

至誠のかがみ



講話集

至誠のかがみ

第二十六回神道講演全国研修大会・山口大会

目次

御挨拶

序

記念講演「吉田松陰の死生観と塾生教育」

神社本庁総長
松陰神社宮司
松陰神社宮司

ご先祖様

粥占御管式

日本の道德教育に松陰の志を

御神水舎建立

もののふの道

花

敬神生活

清めを愛する日本人の心

御神縁への気づき

大切なこと

言葉を楽しむ

田中恆清	上田俊成	上田俊成	石井昌孝	菅野洋子	村田和弘	松吉宣和	畠田明彦	二ノ宮雅子	松瀬弘喜	西尾酒子	仲林亨	松坂公宣	中木屋豊
62	58	54	48	43	38	33	29	24	17	12	1		

やむにやまれぬ ―馬関戦争によせて―

御日待祭（おにまちさい）のあとで ―一本の万年筆―

日本が危ない 保守政権を取り戻さなければ

吉田松陰作の『辞世』と剣舞

ご神霊を拝す

二霊群品之祖（にれいぐんぴんのそ）

自然の贅沢

塩の力

イナバノシロウサギ

ハレの日を司る

こころなごます歌

絆

私の人生楽しみ憲章（八ヶ条）

神楽舞と私

玉井利明 66

真庭宗雄 73

石塚智康 78

多田利子 86

佐上博 90

川原隆司 96

白上陽一郎 100

熊谷房重 105

中嶋俊史 110

佐藤共子 115

佐々木美津子 119

平野直裕 125

松本亮次 129

宮本優子 134

「イセヒカリ」と限界集落

見える物・見えないもの

大和色（やまといろ）

五円で良いご縁

大志

桃太郎はなぜ柿太郎でないのか

留魂（るこん）

白足袋

虫追いまつり

天皇（すめろぎ）の国 — 日本文明史小論 —

R・L・Sと吉田松陰

恋闕（れんけつ）

ある一日

孤高の偉人 吉田松陰先生

佐	上	鈴	黒	芦	河	波	原	木	佐	村	村	松	渡
古	谷	木	田	原	本	多	原	下	古	田	田	本	邊
建	義	明	明	高	文	野	茂	鎭	一	和	佳	ス	知
彦	房	子	司	穂	夫	學	子	二	洌	之	子	ミ	宣

141	147	152	156	160	166	171	176	181	187	192	199	207	211
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

神道講演構成法

山口大会の記録

神道講演全国協議会役員名簿

全国大会の歩み

あとがき

山口大会実行委員長 村田和之

232 230 229 225 221

表紙

松陰神社写真 提供 松陰神社

御挨拶

神社本庁総長 田 中 恆 清

第二十六回神道講演全国研修大会・山口大会の開催にあたり、一言御挨拶申し上げます。
神道講演全国協議会の皆様には、平素より神社本庁の諸施策に対し、格別なるお力添へを戴き厚く御礼申し上げます。

さて、先程、長きに亙り神道講演を通じて斯道の興隆に御尽力戴いた石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の慰霊祭が、村田和之会長様の御奉仕のもと、厳肅に斎行されました。御承知の通り、両先生が初めて出会いはれたのが昭和二十三年五月、この松陰神社であります。その事実を思ひ起こすとき、本日の慰霊祭は殊に意義深いお祭りであつたと存じます。貴会は、両先生の貴い志に学び、またこれを受け継ぎ、昭和四十六年より本研修大会を開催してこられました。会員の皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚のもと日々研鑽を重ねられ、これまで蓄積された成果は、奉仕神社における社頭講話を始めとした教化活動にとつての大きな財産であると存じます。このことは、斯界にとりましても実に心強く、深

く敬意を表する次第であります。

現代人、とりわけ若者の心の荒廃が叫ばれて久しい今日、日本古来の伝統的価値観が見直されつつあります。このやうな時にこそ、創意工夫により神道の精神と信仰を氏子崇敬者に分かり易い言葉で説き聞かせ、次の世代に伝えてゆく神道講演、社頭講話は、益々重要になるものと確信してをります。

また本年は、教育勅語渙発百二十周年の年にあたります。神社本庁と致しましては、貴会をはじめ関係諸団体との連携をより強いものとし、徳育涵養のための活動を展開して参りたく存じますので、更なる御理解、御協力をお願い申し上げます。

結びにあたり、本研修大会が実りある会となりますやう、また皆様方の愈々の御活躍と御健勝を祈念申し上げます、挨拶と致します。

序

第二十六回神道講演全国研修大会・山口大会を当松陰神社で開催されますことは、今年恰も御祭神吉田松陰先生御生誕百八十年の節目の年に当り、時宜を得たものであり、また当神社を会場にされましたことを光榮に存じます。この大会を主管されます神道講演全国協議会の村田和之会長様、佐古一冽副会長様を始め、事務局を担当されます諸兄に深く敬意を表する次第であります。

昭和二十三年五月、神道講演に身命を捧げられた石井壽夫先生と佐古幸嬰先生が、ここ松陰神社で運命的な出会いをされましたが、その両先達の慰霊祭に参列させていただきました、感慨も一入でございました。

さて、この研修大会へご参加の皆様には、申すまでのことではございませんが、神道講演は神道教化の重要な位置を占めるものと存じます。曾てより神社界に於ては、言挙げせぬことが宜しいことであり、日毎只管に神勤することによつて、謂はば神々にお仕えすることを通して、感得して貰えばよしとしていました。むしろ、多弁は不徳であるといった

感じであつたと言えましょう。

しかし、今では祭りの意義や神社の存在理由、神道教学を説かねばなりません。皆様におかれましては、神道講演の熟達者として斯界を導いて下さる存在になられますようご期待を申し上げる次第でございます。

この三日間の研修がその意味においても実のあるものでありますようお祈り申し上げます。挨拶いたします。

山口大会会長・松陰神社宮司 上 田 俊 成



第26回 神道講演全国研修大会 山口大会 平成22年6月22日～24日 松陰神社

第二十六回

神道講演全国研修大会・山口大会

とき 平成二十二年六月二十二日～二十四日
ところ 松陰神社

吉田松陰の死生観と塾生教育

松陰神社宮司 上田俊成

ご参加の皆様、全国各地よりこの萩の地へお越しいただき洵にありがとうございます。この研修大会で記念講演をさせていただきますことを大変光栄に存じます。松陰先生における死生観と塾生教育について、日頃考えております一端を述べさせていただきます。

まず、人が生きるうえで最も大切なことは、高い「志」を立ててそれに向って実践していくことである、志が確かになるほどやる気が起き、生きる意味が深くなると松陰先生は考えられました。安政二年（一八五五）一月に松陰先生が野山獄において執筆され、加冠（元服）を迎えた玉木文之進先生の嫡男彦介（松陰の従弟）に、大成を祈って贈られた「士規七則」があります。松陰先生が野山獄において、武士の武士たる者の生き方について思索を深めていかれ、「士規七則」はその過程で発想されたものであります。

第一則は、人の人たる所以をいい、忠孝を根本としています。第二則は、皇国民としての生き方をいい、君臣一体、忠孝一致が我国の属性であるとしています。第三則、第四則

は、士道の要諦をのべ、「義」を強調し、「欺瞞」を否定しています。第五則、第六則、第七則は、士道を確立するために心がけるべきことをのべ、古代の賢人を友とし、人との交わりを大切にし、死ぬまで努力を惜しむべきでない（死而後已）としています。この中で、「志をたてて以て万事の源と為す」という一節がありますが、これが松陰先生における人が生きるうえでの第一歩と考えられたと言えましょう。

次に、「至誠にして動かざるは未だ之あらざるなり」という孟子の言葉を座右の銘とされ、当に誠を貫ぬかれた人生であったことであります。自分に対しても、他人に対しても欺かないことを貫ぬき通すことは並大抵のことではないと思われませんが、「講孟余話」の中に、「余むしろ人を信ずるに失するとも、誓つて人を疑うに失することなからん」とあり、その真摯な生き様は胸を打ちます。

松陰先生の死に対する考え方、死への安心あんじんは、「留魂録」の第八節を中心に述べてみたいと思います。「留魂録」は、「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」に始まる、殉節（江戸での刑死）される二日前から前日にかけて書かれた、謂はば塾生達への遺書とも言うべき長文のものであります。この第八節は、「今日死を決するの安心は四時の順環に於いて得る所あり。：（中略）：若し同士の士其の微衷を憐み継紹の人あらば、

乃ち後來の種子未だ絶えず、自ら禾稼の有年に恥ぢざるなり。同志其れ是れを考思せよ。」とあります。この節は次のように要約できます。

死を覚悟して不安がないことに、四季のめぐりにおいて思うところがある。秋の収穫によつて一年が終ることに誰も哀しむものはいない。自分は三十歳であり、事が成就することなく死すことは、稲が実らないことに似ていかにも惜しむべきことに見えるが、実は自分としては四季が備わっており、実っているのである。ただ、それが実のない籾なのか、よく実った籾なのかは自分の知るところではない。同志諸君、私の真心に思いを寄せ、志を継承してくれるものがいれば、尊皇攘夷の志は絶えることはない。同志の諸君これをよく考えてほしい。

更に終りの部分を前後の文章を勘案しながら、私の思いで意識してみますと、自分は、まことを貫ぬいて懸命に生きてきた。今、自分は死んでいくが、自分が播いた種子を同志たちが継承してくれれば思い残すことはないし、同志たちに次代を託して安心して永遠の眠りに就くよ。

という意味に解せると思います。

神道には古来、「中今」をどう生きるかという強い意志がありました。祖先—中今—子孫

というつながりの中で、祖先に対し子孫に対して責任をもつて「中今」を生きることが重要なことと考えられてきました。「中今」を懸命に生き、次代に託してつながっていくことこそが「安心」であるとする死生観が古来からの我民族にあったとすることが、私の年来の思いであります。松陰先生は当にこのことを示す典型的な生と死であったと考えます。大變唐突ではありますが、「留魂録」第八節を読みました時、頭に浮かびましたのが、倭建命の「命のまたけむ人は、たたみこも平群へぐりの山の熊白檮くまがしが葉はを髻うづ華に挿せ、その子」という御歌でありました。倭建命が、三重の能煩野のぼのに到られて、ご病気が急変された時、国を偲みび、御妻みめ御子達を偲みばれて詠まれた御歌であります。

「これから先のある人は、平群の山のくまかしの葉を頭飾りにさしなさい、お前たちよ」という程の意でありましょうが、死の際の何という大らかさ、何という安らかさでしょう。しかもこれには、服まつろはない人々を言こと向むけ和やわすため、西に東に遠征につぐ遠征により一生を捧げられ、自分は懸命に生きてきた、後は残った者達頼んだよという、次代へ託す「安心」の気持ちきもちが表れていると思料します。倭建命といい、松陰先生といい、「中今」を懸命に生きることにより、つながりの中に安心を求める死生観は、我民族特有のものと言えるのではないのでしょうか。

次に松下村塾における塾生教育について考えてみましょう。

嘉永七年（一八五四）三月、下田踏海事件で米国渡航に失敗した松陰先生は、自首して縛につき、江戸伝馬町に投獄されます。同年九月に幕府より自藩幽閉を命ぜられ、十月には萩に到着し、直ちに野山獄に入られます。この頃から次第に自分一人の力では大きなことを成すことはできない、有為な人材を育てなければいけないと思われるようになります。安政二年（一八五五）十二月、病氣保養を名目として野山獄を出され、実家の杉家の幽室に蟄居となります。

野山獄では、獄舎を福堂に変える意図のもとに、同囚の人達と勉強会を始められますが、その中心となったのが、孟子の講義でした。野山獄での孟子の講義は途中で終わりますので、杉家のお父上、お叔父上、兄上達が、我々が聴講するから、孟子の講義の続きをやりなさいということになり、三疊半の幽室で講義が続行されます。野山獄と幽囚室での孟子の講義は計五十五回を数え、これが「講孟余話」（旧名講孟節記）として纏められ、松陰先生の代表的著作となります。

この幽囚室での講義に近所の若者が一人二人と入りだし、次第に増えていきましたので、杉家の小舎を利用して、所謂松下村塾での教育が本格化します。もともと松下村塾は松陰

先生の叔父玉本文之進先生が天保十三年（一八四二）に私塾を開かれた時に名付けられたものであり、松陰先生の外叔父久保五郎佐衛門先生がこれを引継ぎ、この久保塾を事実上松陰先生が主宰することとなりました。

小舎を利用して松下村塾に充てたのが、安政四年（一八五七）十一月五日であり、その後続々と塾生が出入するようになり、翌安政五年十二月二十六日に野山獄に再入獄するまで、僅か一年一ヶ月で九十二人の塾生が数えられます。幽囚室での講義を入れても二年強程度の短時日でこれだけ多くの若者が教えを請うたことは驚異的でありましょう。しかも惜ら二十代で維新の礎となられた志士達、明治維新後政治、経済、文化の各方面で指導的役割を果し、近代日本の形成に尽した人達を輩出しました。

何故これ程の短時日で、これだけの人々が育つたのでしょうか。明治後期頃からこのことについて、種々論考や研究がされてきましたが、私なりに考察してみたいと思います。先ず申し上げておきたいことは、教育は真に熱い思いをもつてあたれば短時日で大きな成果が得られる、即ち教育には速効性があるということであり、勿論教育は長い時間をかけなければならぬ一面もありますが、短い時間で大きな志、高い志をもつに至ることができるといふことであります。松陰先生は当にこのことを実践されたのであります。

我国を変えていく強い意志をもった若者を育てる、高い志をもって行動できる若者を育てることに情熱を燃やされましたが、短時日で大きな成果を挙げられた理由は何であったのであろうか。私は次の四点を中心に考えております。

第一点は、「至誠」を貫ぬかれた生き様にあつたと思います。前述しましたように、「至誠而不動者未之有也」は孟子の言葉であります。之を肝に銘じられ、自分に対しても他人に対しても偽らないことを貫き、まことの心をもって諸事に処せられました。常に「まこと」に復そうとすることは、神道の理想とするところでありましたが、安政六年（一八五九）五月、幕命により萩から江戸送りになった時、これが萩との永遠の別れになりましたが、塾生の作間忠三郎や小田村伊之助に宛てた書簡に次のようにあります。

「至誠にして・（中略）・吾れ学問二十年、齢また而立なり、然れども未だよくこの一語を解する能はず、今茲に関左の行（江戸送り）、願はくは身を以て之を験さん：（後略）・」とあり、至誠を尽せば自分の思いが届かぬ筈はないとの強い願望が窺えます。このような生き様が塾生達を揺り動かしました。

第二点は、「知行合一」であります。知識学問は行動実践が伴わなければ何の意味があるだろうかと、厳しく問われます。「講孟余話」に、「記聞きもんの学（むやみに古書を記憶して講

義し、人の質問を待つだけの学問）は以て師となるに足らず」とあります。単に知識のみを詰め込み、それが自らの行動によって示されないことを厳に嫌われました。松陰先生は、それを身を以て示されたのであります。下田踏海の行動は、その最たるものでありますう。

第三点は、個人指導と集団指導とをしつかり抑えておられたことであります。個人指導については、「講孟余話」に「養の一字最も心を付けて看るべし、養とは涵育薰陶して其の自ら化するを俟つを謂ふなり」とあり、塾生個々が自ら化する、即ち自分から気付いて改めていくことを待つ教育を行われました。多くの塾生一人一人にそれぞれ手渡しの文や書簡を贈られ、個性伸長を实践されたことは特筆すべきであります。

集団指導につきましては、「戊午幽室文稿」中の「諸生に示す」に、「学の功たる（学問の成績をあげるには）、気類先ず接し（最初に気持ちや意思が通じ合い）、義理従つて融る（義も理も分かる）。区々たる（とるにたらない）礼法規則の能く及ぶ所に非ざるなり。」とあり、学問の効果を高めるためには、先ず心を通じ、分かり合い、励まし合いながら切磋琢磨する集団づくりが肝要であると説かれます。実際に、討論や共同作業、兵学演習など集団活動によってお互が高まっていたことが随所に見られます。

例えば、「松陰先生絵伝」によると、松下村塾における松陰先生及び塾生たちの座し方は、お互いに向き合つて共に討論している姿であり、松陰先生が上の真中に座し、塾生たちが一様に前を向いている姿ではありません。

即ちただ単に松陰先生の一方的な知識の伝達だけではないということです。

この「絵伝」は、塾生の一人の渡辺蒿蔵が絵心のあつたその兄と話し合いながら、松陰先生の一生を十五枚の絵にしたものであります。

このようにして、塾生たちは論議を重ね合っていました。また、松下村塾は八畳一間で手狭であつたため、大工左官などを入れず、自分達の共同作業だけで控えの部屋を増築して喜び合つたこともありました。

第四点は、松陰先生は性善説に立たれているということです。「講孟余話」に、「先ず己れの性を真に善と篤信し、速かに良心を尋ね来り、其の自ら安んじ自ら快き所を求め、悔吝（かいりん）（くやしく思うこと）のなき如くすべし。」とあり、人は先ず善に立脚していることを確く信ずることから発すべきであるとされています。また、「人賢愚ありと雖も、各々一二の才能なきはなし」（『野山雜著』福堂策上）と言っておられます。このようなことから、身分、門地等に拘泥されることがなく、松下村塾においても武士のみならず、農家出

身等広く門戸を開かれました。これが草莽崛起論ともなり、塾生高杉晋作の奇兵隊の編成にも繋がっていきます。

人間万人への深い思いが根柢にあることが塾生たちの心を強く捉えたと言えましょう。また、松陰先生には、烈々たる一面があると同時に、優しさが満ちていました。下田踏海において辛苦の行動を共にした弟子の金子重輔が、萩の岩倉獄中で亡くなった時の悲嘆は尋常ではなく、全国の塾生門下生友人知人に手紙を出し、金子の鎮魂のための詩歌文章を集めて冊子を作られました。また野山獄中から妹千代さんへ宛てた手紙の冒頭の部分をご紹介します。安政元年（一八五四）十二月、松陰先生二十五歳のことであります。

「十二月二十七日と日づけ御座候御手紙：（中略）：昨ばん相とどき、：（中略）：そもじの心の中をさっしやり、なみだが出てやみかね、夜着をかむりてふせり候へども、如何にもたへかね、又起きて御文くりかへし見候て、いよいよ涙にむせび、つひに夫れなりに寝入り候へども、まなくめがさめ、よもすがらね入り申さず、色々なる事思ひ出し申し候。わもじは、父母様やあに様の御かげにて、きものもあたたかに、給物も^{たべもの}ゆたかに、あまつさへ筆・かみ・書もつまで何一つふそくこれなく、寒きにもきけ申さず候間、御安心成さ

るべく候。：（後略）：」

愛情と優しさに満ちた家族の強い絆を窺い知ることができます。お父上母上を中心にした優れた家庭教育が松陰先生を育くみ、やがて塾生教育において花開いたと言えましよう。

以上四点を中心に塾生教育を考えてみましたが、その教育は熱情溢れん許りのものでありました。欧米のアジア進攻が盛んとなり、外国との関係が切迫していくなかで、儒教を中心とすれども、吉田家の家学である兵学や海防、地理、歴史に加え、特に時事や諸外国、国内の情報重視されました。人はどうあるべきか、日本人としてどう生きるべきかが基本的命題であり、これが昇華されたのが「尊皇攘夷」でありました。講義は時に涙流、時には悲憤され、その熱烈さに塾生たちは奮い立っていききました。「松下陋村ろうそんと雖も、誓つて神国の幹とならん」（「村塾の壁に留題す」という渾身気概の言葉が、その全てを物語るものでありましよう。

ご清聴を感謝いたします。三日間の研修が実り多いものでありますよう祈念申し上げ終りいたします。

一 先祖様

石井昌孝

この四月私は五年間お世話になりました松尾大社より郷里に戻り、現在実家でもあります青森県南部町に御鎮座します諏訪神社でご奉仕をしております。私が生まれ育ったこの南部町は農業を中心とした緑豊かな町で、氏子地域全体約四百戸がほぼ神葬祭という地域です。葬儀と言えば神職がご奉仕し、お盆には地域の方は祖霊社をお参りされます。神葬祭が身近であったため、亡くなられたら家の守り神様になって、目には見えないけれども私達を見守って下さっているという考え方が生活の中で自然に教えられてきました。又、それが当たり前だと考えている氏子地域の方々も多く、誰も不思議に思う方はおりません。ですから、地元の氏子さんや友人と話している時に「神葬祭が地域全体で行われているのは大変珍しいですよ」と説明をすると、皆「そうなのか、この辺だと当たり前だからなあ」と驚かれます。では何故この地域で神葬祭が多いのかと申しますと、明治の時代に、廃仏毀釈の運動がこの地域にも押し寄せ、この地域のお寺が廃寺になることとなりました。

檀家さん達がこれからの事を相談しに行ったところ、住職さんは「廃寺になった後の事は、ちゃんと諏訪神社の宮司さんをお願いしてあるから何も心配しないでください。今までは皆亡くなったら仏様になっていましたが、これからは皆神様になるんだよ」と仰いました。それ以来この地域では神葬祭が行われるようになり、最初は混乱が無いようにと、葬儀では祝詞と一緒にお経をあげたり、鐘を鳴らしたり、線香を立てたりしていましたが、月日を重ね徐々に現在の形になっていったと言われております。

今の話をお聞きになられて、そんなことが本当にあるのかと思われた方も多いかと思えます。実際に住職さんが言われた一言で先祖供養の宗教が変わるのか、檀家さんは納得するのかと疑問に思えるからです。ですが、縦え宗教が変わっても日本人が本来持つ、目には見えない物へ手を合わせ、尊敬、感謝の気持ちを持つ姿がそこに在ったからこそ仏教から神道へとなる時に、大きな混乱も無く今日に至ったと思います。

私達は、当然ですがご先祖様無くして存在する事はありません。必ず両親がいて、祖父、祖母がいて、その又両親がいてと、今こうやってこの世に存在しているのはご先祖様のおかげなのです。又、同時にご先祖様は私達を守って下さり、そして導いて下さると私は信じております。では、我々はご先祖様にどのように応えたらよいのでしょうか。その

答は、手を合わせ、そして感謝の気持ちを伝え、精一杯自分の道に励むということではないでしょうか。

昔葬儀は皆手作りで行われたと聞いております。リング箱を重ねその上に白布を敷いて祭壇を組み、しめ縄をなう人、山で竹や松を切ってくる人、玉串を作る人、直会のお膳を作る人など、皆役割分担をして亡くなった人を送り出していました。質素ではありませんが、そこには沢山の感謝の気持ちが込められていたのではないのでしょうか。しかし、時代とともに準備は全て葬儀屋さんが行ってくれるようになりました。ですが当社では、喪家の家族の方々に「玉串というものは自分の感謝の気持ちを込めてお供えをする物である」と教え、今でも玉串だけは作っていたいております。そうすると、逆に皆さん納得をされ、故人の事を話されながら作られているのをよく目にします。

現在日本では物が溢れ、何でもお金を出せば簡単に手に入る時代になりました。又一方では核家族化が進み、家に神棚も無ければ仏壇も無い、私達は無宗教です、そういった家庭も多くなってきたようです。その結果、目に見える物しか信じられなくなり、神様に対する感謝の気持ちを持つという事が薄れてきているように感じられます。教育勅語の中にありますが、「親や先祖を大切にしましょう」「兄弟仲良くしましょう」何故こういっ

た当たり前の大切な事が見直されず、「夫婦別姓」のような家族組織を壊してしまう恐れのある考えが出てくるのか。私達は、そういう社会の流れを打破していかねければなりません。家庭の中で先祖崇拜を教えにくくなってきたのであれば、私達神職が、家庭内にきつかけを作つてあげればよいのではないのでしょうか。先程私は神葬祭を例に挙げてお話をさせていただきましたが、方法はいくらでもあると思います。先ずそこで大切なのは、普段からの神明奉仕の姿勢、そして多くの方とコミュニケーションをとることだと思ひます。参拝者とお話し、話の流れをみて説いてみたり、ご祈祷に來られた方にお話してみたり、祭典奉仕の後、氏子さんにお話しても良いかと思ひます。では、今まで神社に全く疎遠の人達にはどうしたらいいのでしょうか。それは我々が努力し人との繋がりを築き、先ずは聞いてもらい、そして神社のことを少しずつ理解してもらえようにする。理論だと思われるかも知れませんが、お互い話をしてみないことには何事も始まりません。こちらからのアプローチも必要であると思ひます。

ご先祖様を大切にするということは、言わば家族を大事にすることと一緒なのです。家族を大切に思ふ事は、地域を、そして日本を大切にすることに繋がっていきます。

私自身、ご先祖様に導いていただきましたひとりであります。現に、こうやってご縁を

頂いて私が皆様の前で講演研修をさせていただいている事も、そして神職としてご奉仕させていただいていることもやはりご先祖様のお導きによるものであります。

「お天道様が見ているよ、目には見えないけれども神様は見えてらっしゃるんだよ。だから悪いことをしてはいけないよ。良い事をしてれば神様がちゃんと守ってくださるよ」このような言葉を幼いときから皆様も何度も聞いているのではないのでしょうか。これが、ご先祖様の尊い教えです。

どうぞ皆様、神様、ご先祖様に手をあわせ感謝の気持ちを伝えましょう。

(青森県 諏訪神社 禰宜)

粥占御管式

菅野 洋子

皆さんこんにちは。男神社宮司の菅野でございます。

一月十五日に、当社社では特殊神事・粥占御管式を執り行っていますが、「伝統的な、しかも珍しい神事を沢山の人たちに見に来てもらう為に、お祭りのPRをして下さい」ということで、本日この機会を頂きました。

それでは、粥占御管式を中心に、男神社の祭典を紹介させていただきます。
まず、男神社の一年間の祭典をご説明いたします。

一月 一日 歳旦祭

一月 十日 戎祭（末社 若宮 事代主命）

一月 十五日 粥占御管式

二月 三日 節分祭

二月 十一日 紀元節

二月十七日 祈年祭 五穀豊穰を祈る

四月 三日 神武天皇祭

五月 中旬 ほたるまつり（今年は五月十六日）

六月三十日 大祓式（半年間の罪穢れを祓う）

万灯祭

旧暦八月十四日 観月祭（撰社 浜の宮 宵宮祭り）

旧暦八月十五日 浜の宮 例祭

十月 十日 本社 例祭

十一月二十三日 新嘗祭

十二月二十三日 天長節

十二月三十一日 大祓式

万灯祭

粥占御管式とは、この地域で作る果物を含む農作物の豊凶を、粥を炊いて占う特殊神事です。

直径一、五から二センチの姫竹の節を取って十五センチの長さにして、一本一本の竹筒

にそれぞれ野菜果物の名札を付けます。作物の種類も時代と共に変わり、現在は米・野菜・果物を含めて五十八種です。五十八本の竹筒をひとつくりにして下の方に錘を付けます。名札の部分は釜に浸からないように白布で巻いておきます。

さて、御管式は神社の境内で執り行う神事ですが、男神社の神様ではなく、境内の一角に注連縄を張り巡らせて、ヒモロギという依り代に神様をお呼びしてお祭りをするのです。お供えは米八合・酒、先に準備した竹筒と塩です。

初めに修祓といいまして、祭壇・神饌・釜・玉串・参列者を祓い清めます。

次に、降神の儀といいまして、大山祇大神・大雷神・高竈神たかおかみの神様をヒモロギにお呼びします。

次に、祝詞を奏上します。今年の農作物の出来・不出来を、ありのままにお示しく下さい、という様な事を申し上げます。

次に、酒と米で釜を清めます。

そして、神職・総代・参列者が玉串を奉奠して祭典が終わります。

祭典が済みましたら、水を張っておいた釜に、お供えの米を入れ、竹筒の束を沈め、薪で炊き始めます。

沸騰するのに三、四十分は掛かります。二回沸騰しましたら、「月の水」といいまして、一月から十二月までの雨の量を見ます。

それは、お粥を炊いている薪の消し炭を十二個取り出して見るのです。炭の火がついたままですと赤いのですが、消えると黒くなる部分と白くなる部分がありまして、黒が雨、白が晴れとして、この月は雨が何割というように判定するのです。

そして三回目沸騰しましたら、竹筒を引き上げて、一つ一つ名札を確認しながら竹を割っています。

割った筒の中には米粒が入っているのですが、その米粒の量が不思議なことに色々でして、沢山入っていれば豊作、少なければ凶作という風に判定するわけです。

すべての判定が終わりましたら、神道では直会といいまして、お供えしたお下がりをいただきます。この御管式では、お粥をいただきます。これがまたとてもおいしいのです。何しろ、先の祭典でお神酒とお塩で清めましたから、お酒の隠し味と塩味が効いて、そしてほんのり竹の香りもします。その上、一年間無病息災に過ごさせていただけるといいう、お墨付きでございます。

この神事が何時から始まったのか、実ははっきりわかりません。

神社には明治以前の史料が残っておりませんが、神社にある明治以降の史料の祭典の項に御管式が記載されていますので、少なくとも明治時代には行われていたことは、確かです。

さて、ここで少し話が変わりますが、

日本の食料自給率は、平成二十年度で四十一パーセントだそうです。

ザ・ジャーナルの、高野孟氏は農業新聞で、故藤本敏夫（加藤登紀子の夫）の影響を受け、「国民誰もが、何らかの程度と方法で土に触れ、農に携わって、自分の食う物の一部でもいいから自分で作ることを通じて、生命の連鎖を体感すべきだ。」という言葉に共鳴し、「国民皆農」を実践するため、千葉県の鴨川の山中の荒れ果てた山林千八百坪を買い求め、一年かけて開墾し二年かけて家を建て、三年前から移り住み、稲作り、大豆・味噌づくりなどに精を出しているそうで、高野氏の現在の食料自給率はかなり高いと語っています。

「国民皆農」 私たちも少しずつ、出来ることからやってみませんか？日本の将来の為に。

部屋の押入れで、大麻など栽培している場合では、ありません。

私も、裏庭の小さな花壇に毎年夏限定でキュウリとゴーヤを植えます。

我が男神社の氏子を見えますと、専業農家は、もはや五軒もありませんが、田植えの

時期になると、水田が意外にも沢山あったことに驚かされます。

考えてみれば、農家あつてこそ、御管式なのです。

以上、御管式を中心に男神社のお祭りを、ご説明致しました。

『御成敗式目』に「神は人の敬によりて威を増し、人は神の徳によりて運を添う」とあります。

私共は、これらのお祭りを通じて、より沢山の人たちに神社に集っていただき、神様にも喜んでいただいて、そして私達をお護り頂きたいと思っています。

私達日本人は農耕生活をする中で、氣候に左右されながら自然を畏れ神と仰ぎ感謝すること、これが祭りとなり今日まで受け継がれてきました。

男神社においては一月、御管式の占いでたとえ凶作と出たとしても、二月には農作物が豊作でありますように、国民が平和に過ごせますようにと祈る祈年祭、十月の秋祭りには豊作を祝い、十一月には豊作の喜びと感謝の祈りを新嘗祭として行ってきました。

まさに祭りは、日本の心であるといえましょう。

みなさまも、古くから伝統的に行われている、氏神様のお祭りに参加されまして、日本の精神文化に触れ、日本人の心を感じとって頂きまして、共に日本の文化・伝統を継承し

ていつて頂きたいと、切に祈念いたしまして拙い私の話を終わらせていただきます。
ご清聴ありがとうございました。

(大阪府 男神社 宮司)

日本の道徳教育に松陰の志を

村 田 和 弘

遂に五月三十日、連立政権に分裂が始まった。最初から噂されたことであり、八ヶ月の幕切れ、むしろ遅まきの感じもありますが、野党に替った自民党も早々と空中分解、新党ごっこの乱立が始まり、正に日本丸は沈没に向けて歩み出しました。

しかし「とうとう日本は落ちる処迄落ち込んだ」と見ているだけでよいのだろうか。先人達が築いた品格ある日本の国柄は遠い昔し話、戦後の占領政策は、まんまと当り確実に悪しき骨なしの日本人を造り出してきたのであります。

先般テレビの放映に注目した。吉田松陰没後一五〇年に当り、安倍政権下で改正された教育基本法の中の愛国心条例で謳われている「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する」条例に松陰の教えを取り入れ実践している萩市の萩市立明倫小学校であった。

山口県教育委員会が平成二十一年度推進事業として全県挙げて取り組もうと松陰の教え

を推進したものであります。さすが山口県だと思つていましたが、残念ながら教職員組合の反対で県下統一の推進は実践されず尻込みに終り遂に「吉田松陰」教育は「強制しない」との回答に至つてしまいました。

日本人として真のあり方、生き方を示した松陰の志に何の間違ひがあるのだろうか？。

儒教の教えを基に考案された「士規七則」の第一則に「蓋し人には五倫あり、而して君臣父子を最も大なりと為す。故に人の人たる所以は忠孝を本と為す。」とあります。毎朝、明倫小学校では松陰先生の教えが朗唱されているのであります。その一例を記してみますと、松陰先生のことば、

一年生一学期

「今日よりぞ 幼心を打ち捨てて 人と成りにし 道を踏めかし」。

二年生一学期

「万巻まんがんの書を読むに あらざるよりは いずくんぞ 千秋の人たるをえん」。

三年生一学期

「凡およそ生まれて人たれば 宜しく人の禽獸きんじゅうに異なる所以を知るべし」。

四年生一学期

「凡そ読書の功は昼夜を捨てず 寸陰すんいんを惜しみて是れを励むにあらざれば 其の功を見ることなし」。

五年生一学期

「誠は天の道なり 誠を思うは人の道なり 至誠にして動かざる者は 未だ之れあらざるなり 誠ならずして未だ能く動かす者は あらざるなり」。

六年生一学期

「体たいは私おのなり 心は公おのなり 私を役えきして公おのに殉したがう者を 大人たいじんと為し 公を役して私に殉う者を 小人しょうじんと為す」。

何とすばらしい松陰先生の教えではありませんか。

二学期になると一年生には、

「世の人は よしあしことも いわばいえ 賤しずが誠は神ぞ知るらん」。

二年生二学期

「己いの労を軽こんずるにあらざるよりは いずくんぞ兆民の安きをいたすをえん」。

三年生二学期

「志を立ててもつて万事の源となす 書を読みてもつて聖賢せいけんの訓おしえをかんがう」

四年生二学期

「人の精神は目にあり 故に人を観るは目においてす 胸中の正不正せいふせいは眸子ぼうしの瞭眊りようぼうにあり」

五年生二学期

「道は即ち高し 美し 約なり 近なり 人徒らに其の高く且つ美しきを 見てもつて及ぶべからずと為し 而も其の約にして且つ近く 甚だ親しむべきを知らざるなり」

六年生二学期

「冊子を披繙ひはんすれば 嘉言林かげんはやしの如く躍々やくやくとして人に迫る 顧うに人読まず 即し読むとも行わず 苟まことに読みて之を行わば則ち 千万世せんばんせいと雖も得て尽くすべからず」

と三学期迄続きます。この萩市立明倫小学校では昭和五十六年より全校生徒各学年、每学期毎に一文ずつの松陰先生の言葉が毎朝朗唱らうていされているのであります。

松陰が一学期、明倫館で教鞭を執った縁りある明倫小学校。一年生より卒業迄、一学期一文、合計十八文の松陰の教えが朗唱され生徒達に明倫小学校で学ぶ誇りと、日本人としての使命が芽生え自信に満ちた凛々とした声が学校中に響き渡っているのであります。

今、日本の社会で教育の現場で家庭で学ばれない日本民族の教えがどうして取り入れられないのでしょうか。これぞ正に今忘れ去られている民族の根源の教えではないでしょうか。

山口県長州藩出身の思想家、明治維新の立役者、伊藤博文、高杉晋作等と全国の教育の神様とまで崇め祀られている吉田松陰。

二十九歳で神去りし松陰「吾今国の為に死す、死して君親に背かず、悠々たり天地の事、鑑照、明神に在り。身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも、留置まし大和魂」。

我々日本人ならばこそ、この教えを忘れて日本人といえるのであろうか。

私達の先達、石井・佐古先生の出会いの場所、松陰神社、全国より志しを同じくする人達が合い集ひ、松陰没後一五〇年、初めての開催と聞く松陰神社、全国研修大会参加実践することの慶びに、心新に先人達に「至誠」を誓い結びいたします。

ご静聴ありがとうございます。

(広島県 長束神社 祢宜)

御神水舎建立

松 吉 宣 和

乃木神社は本州の西、山口県下関市の城下町長府の西南に位置し、その裏側には海拔三百メートルの山、表側には瀬戸内海が広がり、汽笛が聞こえるなだらかな坂の中間に鎮座しています。自然環境に恵まれ、豊富な地下水が湧き出るこの地に、地元有志の協力を得て、大正三年に乃木会が発足し、大正九年四月に鎮座祭が行われました。創建後もたくさんの方々の信仰を集め現在に至っております。

御祭神は乃木希典将軍と静子夫人です。乃木希典は、第五十九代宇多天皇の系統で近江源氏を祖先とする乃木十郎希次を父に、父の再婚相手である常陸国土浦藩長谷川金太夫の長女寿子を母に、武蔵国江戸麻布日ヶ窪の長府毛利藩上屋敷で誕生しました。幼名を無人、十歳の時江戸より長門国豊浦の長府横枕に移り父母弟妹と共に定住しました。十五歳で藩学敬業館の集童場に入塾し、その年の十二月に元服、名前を源三と改めました。十八歳の時、報国隊に入隊して軍務に就き、名前を文蔵に改め、二十三歳で陸軍に入隊、陸軍少佐

に任じられ希典と改めました。

父母弟妹と共に十六歳まで生活した横枕の住まいの庭先には、傍の梅の木に「つるべ」をつるし、生活水として使用されていた井戸「梅の井」の石碑が建立されており、当時の生活を物語っています。

乃木將軍御夫妻の遺徳を偲び、春季大祭に参列されたある御夫妻が、旧邸前にある井戸の石碑を見て、当時の乃木さん一家の生活を偲ぶため、この井戸水を一般参拝者に御神水としてふるまうための「御神水舎」を寄贈したいとお申し出にられました。

御神水舎建立について、責任役員、総代に相談の結果了承され、主な崇敬者七名（社団法人日中経済交流協会岩本幸夫事務局長、有限会社中村石材中村重雄社長、有限会社昂佑建設浦野政光社長、浦野正治担当者、厚生病院松浦千鶴子副婦長、奉納者イワモト理研株式会社代表取締役社長岩本藤光・初子氏御夫妻）と会合を開き、ミネラル水供給装置「ミネラルクリスタール」の説明を受けました。

皆さんの同意を得て建物について検討した結果、乃木將軍御夫妻の銅像、その左横に徳山黒髪島の御影石で作製した御神馬「壽号」を配した、瓦葺きの建物に決定しました。

平成二十一年十二月二十三日の天皇誕生日に「天皇誕生日の祝賀記念」として、奉納奉

告祭を斎行し、祭典の後、除幕式を執り行いました。

「水」には軟水と硬水があり、軟水はカルシウム・マグネシウムなどの塩類をほとんど含まない水で、硬水はこれらを多く含む天然水です。

イワモト理研株式会社は二十年かけて「水」について研究され、「ミネラルクリスタ」という、水すべてをミネラル活性水にする「上質水供給装置」を開発、厚生労働省の認可を受けました。ミネラル水の界面活性力で生活排水を環境に適した水に変え、エコを推進しています。「上質水供給装置」とは、「ミネラル水供給装置」の事であり、健康的な水、即ち生命活動に不可欠な栄養素、ミネラルを生成します。生活排水を浄化するという環境保全への貢献と共に、健康面でも画期的な装置と言えます。

例えば、この装置を使って入れた風呂につかれば、まさに温泉気分。すっきり感があり、血流も五官の働きも良くなり、ぜんそく、皮膚病疾患も解消され、皮膚の老化を防ぎます。料理に使えば美味しさが更に増すでしょう。

ミネラルとはカルシウム、マグネシウム、ナトリウム、カリウム、リン、鉄、銅、亜鉛、マンガン、セレンなどの無機物を指し、蛋白質、脂肪、ビタミンとともに五大栄養素のひとつで、欠乏すると生命活動を維持できなくなる重要な栄養素です。この健康的なミネラ

ル水は、温まることで身体に優しい温泉質に変化し、大腸菌、サルモネラ菌、ブドウ球菌等に対する抗菌力が高まり、うがいや手洗いに向いています。

病氣平癒の御祈願に來られる参拝者達にこの御神水を紹介し、病人の血流が良くなり、健康を取り戻せるよう、拝戴を勧めています。

家庭用のクリスタル装置は、直径五センチ、長さ三十センチの筒状の中に活性炭等が詰め込まれたものです。水道メーターの給水側に付ければ、台所、風呂、トイレ、庭の水まきなどの水が軟水に変わります。井戸水はポンプから汲みあげたところに付ければ、安心しておいしい水が飲めます。

(山口県 乃木神社 宮司)

もののふの道

畠田明彦

昨年の十月末で配信が終わってしまいましたが、光テレビのビデオで熱心に見ていた時代劇があります。今から三十七年前の昭和四十八年から五十一年にかけて、三部の構成で放映された、萬屋錦之助主演の「子連れ狼」です。謀略によって公儀介錯人の職を奪い、一族郎党を惨殺した、宿敵柳生烈堂率いる裏柳生打倒の為、一子大五郎と共に冥府魔道を歩む拝一刀の姿、所々に垣間見る武士道精神の崇高さと父子の深い絆に感動する、私が一番好きな時代劇です。

さて、この「子連れ狼」第一部第十八話に若林豪が扮する山田浅右衛門吉継が登場します。公儀御様御用おためしと言う刀剣の試し切り役で、処刑の首切り役も兼ねていた、山田流三代目の当主で実在の人物です。そしてその七代目、山田浅右衛門吉利よしとしが吉田松陰の首はねを刎た人物であります。吉利は松陰の最期を次の様に語っています。

いよいよ首を切る刹那の松陰の態度は、実にあっぱれなものであった。悠々と歩を運

んで来て、役員どもに一揖し「ご苦勞様」と言つて端座した。その一糸乱れぬ堂々たる態度に幕吏も深く感嘆した。

「死して不朽の見込みあらば、いつでも死すべし」と高杉晋作に説いた吉田松陰は、「潔く死ぬ」と言う武士道の美学に、「犬死」を避けた「不朽の見込み」と言う限定を加えました。国に身を殉じた一途な松陰の精神は、朽ちる事無く受け継がれ、見事維新へと導いて行つたのであります。

武士道と言ふは死ぬ事と見つけたり

『葉隠』のこの言葉は誰しも聞いたことがあると思います。しかしこれは死に急ぎの美学を表した言葉ではありません。「日々死を覚悟して奉公せよ」と言う意味であります。武士の本分とは、己の利害を顧みず全体に奉仕できる崇高かつ利他的な精神を持つ事であると説いています。「至誠」を以て公に尽くす事が武士道の究極の目的であります。そしてその「公」の頂点が天皇である事は言うまでもありません。

次に、今申し上げた佐賀鍋島藩士山本常朝の『葉隠』も、吉田松陰の精神基盤となつた山鹿素行の『山鹿流兵学』も、戦乱の世から離れてしまった武家社会における武士の道義的心得が中心で、戦術的な部分にはあまり重きを置いていません。そこで話は「子連れ狼」

に戻りますが、主人公拝一刀が使う水鷗流は、静岡県に現存する安土桃山時代に確立された流派で、開祖は三間与一左衛門景延みまゐちざえもんかげのぶと言う、神官を父に持つ出羽国の人であります。景延は山伏の修行と共に林崎流居合を始め数々の武術を習得し、ある夜神殿における默想中に白鷗が無心に水に浮かぶ姿を想見、大悟を得て居合・剣法・薙刀・杖法を包括した流派を開きました。

我が剣は修験の行道なり。敵心を刀鞘とうしやうの内に斬り、敵をして動かざらしむ。抜かずして敵を圧するが当流の極意、不敗の位なり。剣刃交叉の間、勝敗を離れ純一無雜、私心を去つて神人合一の境地に徹せよ。

開祖はこう教示しました。このような戦わずして敵を制する極意は、孫子の兵法や柳生新陰流流祖、柳生石舟斎の無刀取りにも相通づるところがあります。己の強い欲望が他人への不満や敵対心を生み、そこに戦いが生じる。明鏡止水の境地においては敵もなく戦いもなく、故に負けもないと論じているのであります。このような境地に達する事は、我々一般人には不可能かもしれませんが、常に念頭に置き行動する事が大切だと思います。

次に、武士の理想像は「鎌倉武士」であるとされています。食うか食われるか、力こそ正義であった時代、自分の領地を命がけで守り抜く、それが武士の第一使命でありました。

そして武勇の名を馳せる事は、周りから一目置かれ、領地の安全保障に繋がったのであります。これが鎌倉武士の二大精神、「一所懸命」「名こそ惜しけれ」であります。

鎌倉武士の勇猛果敢さは元寇によって証明されています。「我こそは」と名乗りを上げ、当時世界一のレベルで整備された元軍に、一騎打ち戦法で挑む武士の姿は滑稽に映るかも知れませんが、しかし、これは言葉の通じない元軍に名乗りを上げているのではなく、自分の勇敢さを伝えてもらう為に、味方に対して上げているのです。つまりその功名によって恩賞を得、一族や領民の生活が安全で豊かになる事のみを願い、敵に挑んで行ったのであります。そして「神風」が吹きました。圧勝していた元軍の撤退については様々な議論がありますが、「人事を尽くして天命を待つ」の言葉通り、捕虜となった女の手穴を空け、数珠の様に繋いで船に吊すと言う、残虐無比な元軍を相手に、続く苦戦にも士気衰えず、結局上陸を許さなかった鎌倉武士の純然たる忠孝の精神と、朝廷・幕府・国民一体となった真摯な祈りが神風を起こし、元軍を壊滅状態に追い込んだのです。

未曾有の国難、元寇は阻止できました。又大東亜戦争においても昭和天皇の大御心によって植民地化は免れました。それは、何れもそこに究極の武士道精神があったからです。ところが、これがもし今の日本だったらどうでしょうか。他国に毅然と主張できない事な

かれ主義外交の日本に、この様な国難を克服する事はまず無理だと思います。日々死を覚悟して公に奉仕する心、無我の境地で敵に和する心、確かに大切です。しかしそれ以上に大切なのは、「刀」を抜くべき時には、抜かなければならないと言う事であります。もちろん暴力や戦争を肯定する訳ではありません。波風立たせぬ為に、誇りや伝統を汚す横暴な言動に対し、敢えて見て見ぬ振りをする事は、真の平和を崩し、新たな暴力的支配を生むのです。

「一所懸命」、今こそこの鎌倉武士の精神を以て、国や家族を守る為、虐めなどの卑怯な行為や、正義無き無礼な輩に対しては堂々と立ち向かい、主義主張をはっきりと大きな声で言えるよう、我々が武士^{もののふ}の精神を学び実践し、その道を先導しなくてはならないと思います。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

花

二ノ宮雅子

古来神々より授かった生命を存在させて頂くため、人は進化して参りました。宇宙から見た地球の姿が青く美しく輝く生命を育む母胎であるかのように、地球から見ても私達人間も、一生懸命に咲く花であつてほしいのではないのでしょうか。

花が大好きであつた私の祖母は八十六歳です。ほぼ十年前より痴呆となり、今では入院をして五年が経ちます。初めは良くなると思つていました。とても厳しくて余計なことは一切言わず、明るく強い祖母だったからです。でも病状も悪化し、今は息をしているだけの様な感じで、とても悲しくなります。

私は、二三日に一回、洗濯物を入れかえに参りますが、その時必ず香りの良い花を持つていくのです。

時折、ウーッと泣いたり、硬直した身体を起ここそうしたりするので、お花が好きだった祖母がわかつたのだと思ひ、それを励みに、どんなに暑い夏でも、どんなに寒い冬で

も、家に咲く花や南天の実やハーブなど 少しの植物を届けるのです。花瓶の水が汚れると、それに菌が繁殖するので、水もこまめにかえるのです。

春になると母と私は桜湯にするための桜の塩漬けを、祖父に教えて頂いた通りに作り出します。その中でも一番最初に咲いた寒緋桜を、祖母の元へ持って行つた時の事でした。病室へ入り、

「おばあちゃん、今年はこんな桜が咲きましたよ。」

と話しかけると、なんとパツと目を開けたのです。私と近くにいた先生方はびっくりして目を見合わせました。側にいた看護師の方々が、「よくお孫さんが、おばあさまの為に、季節の色々なお花を持ってきてそつとおいて下さるので、そのお姿と花々に私共も癒されておりました。そして今日は、目に見えぬ神様が私共の側にいらっしゃるのでは？」という気が致しました。お孫さんの気持ちを通じているのでしょうか。この花のように一生懸命生きようとしていますね。」とおっしゃられたのです。

神や人の道を説く、というのは、まず私達の心が尊い神様の「み心」と一つに結ばれますように日々の生活を清めなければなりません。どうすれば相手に気持ちを通じるのだろう、言葉使い、表情、リズム、など色々と考えていた私に、看護師さん達のその言葉は、

「これが、神や人に気持ちを通じる。身をもつて伝える第一歩なのか」と小柄な私にも大きな勇気が湧き、嬉しくなり涙が出たのです。

他に入院されている方からも、

「どなたが入院されとうと？」と聞かれ、

「祖母です。」と答えると、

「あなたは、よく洗濯物は風呂敷に包んで、綺麗なお花は必ず持つて来よるもんね。おばあちゃんの早うようなるようにやろう。お祖母ちゃんは幸せもんたいね。」

とお声を掛けて下さいました。祖母はこれ以上、良くはなれないと思いますが、一生懸命生きようとしている祖母に花を通して春夏秋冬、季節の移ろいを一瞬でも感じる事ができればと、祈っております。

一年に一回開催されている神社界の研修の場、神道講演全国研修大会というのがございまして、その中で知り合いの女性が、

「私は初デートの時、主人から向日葵を頂いたんです。」

と、とても嬉しそうに、お話をしていりました。向日葵は、読んで字の如く「太陽に向かって咲く花」という意味で、花言葉は「ずっとあなたを見つめています」なのだそ

うです。

私もある方から、こんな俳句を頂きました。

太陽と いふ名一輪 白牡丹

この白牡丹は、神々の医師、医者という意味があり、花言葉は「富貴・癒し」です。

そしてこの国を想い、最後まで人と関わり続けた、山口県は萩の地で生まれ、三十歳の若さで刑場の露となった、吉田松陰先生は野山獄の片隅に咲いていた梅檀の花のような人だったといえます。梅檀とは昔は棟（あうち・おうち）、樗（あうち・おうち）といって、毎年、旧暦五月五日には、約束をしたかのように薄紫の花をつけることから、逢時（あうとき）と書いて（おうじ→おうち）になったという由来もあるそうです。いろんな説がありますが、清めから不浄まで全てを知っている高木であり、花なのです。松陰先生の精神や教えは、今なお、この大変な時代の日本の中にも、高潔に咲き続けています。また私達も使命遂行の為、この国の伝統と誇りを守り伝えます。

今、皆様方がいる、この自然の中にある宮は、神様のいらつしやる庭なのです。ここで、講話を聞いたり、神楽を見たり、その時間を神様と共に過ごさせて頂いているわけなのです。心身共に健康な姿を見せて下さると神様はとてもお喜びになられます。

本日、お家へ帰られましたら、ぜひ、お祖父ちゃんお祖母ちゃん、子や孫にも目と心を素直にお向けになり、心健やかな言霊で話しかけてみて下さいませ。

きっと、澄んだ言霊の花が咲くと存じます。

(福岡県 嘯吹八幡神社 出仕)

敬神生活

松 瀬 弘 喜

私は今回「敬神生活」というテーマでお話させていただきます。始めに、人生の大先輩達であります皆様方の前で、私のような未熟者がお話させて頂くことは、恐れおおく思っていますが、私なりに志をもつて、お話させて頂こうと思つています。

敬神生活とは読んで字の如く、神様を敬いながら生活することをいいますが、私たち全
国の神職は、毎朝朝拝時に神様の御前に「敬神生活の綱領」を斉唱しております。先ずは
この綱領を紹介させて頂きます。

敬神生活の綱領

神道は天地悠久の大道であつて、崇高なる精神を培ひ、太平を開くの基である。

神慮を畏み祖訓をつぎ、いよいよ道の精華を発揮し、人類の福祉を増進するは、使命
を達成する所以である。

ここにこの綱領をかかげて向ふところを明らかにし、実践につとめて以て大道を宣揚

することを期する。

- 一、神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清きまことを以て祭祀にいそしむこと
- 一、世のため人のために奉仕し、神のみこともちとして世をつくり固め成すこと
- 一、大御心をいただきてむつび和らぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること

以上でございます。この綱領は難しい言葉で書かれています。簡単に言いますと神道の教えが要約されています。神様に仕える私達神職の目標・使命が書かれています。また神職だけに向けられた綱領ではなく、神様とご縁あつて暮らす崇敬者の生活目標また規範として、昭和三十一年五月二十三日に神社本庁より発布された綱領です。前文は、日常生活で役立つように、神道の特性を活かして実践しなさいと書かれており、以下三項目は、具体的な実践内容であります。

私は椿大神社に奉職して四年目になりますが、この敬神生活の綱領を日々実践することによって、自分が知らない間に、少しずつ内面が改革されている事に気づきました。今回は私の経験をもとに、この綱領を実践することで得られた、神道の素晴らしい御教えを皆様にお話させて頂きたいと思っております。

先ず神社に奉職する以前の私は、最近の若者の傾向としてよく見られる、志や生き甲斐

もなく、毎日をなんとなく生きているという人間でした。勉強も運動も嫌いの面倒臭がり
で自身の将来になんの意欲もない人間でした。ですが素直に、この教えを毎日声に出して
神様の御前で誓い、実践することで少しずつ内面が改革されていきました。

改革されたことの一つに、明るく誠の心をもって神様や御祖先に感謝をささげること
で、何事にも「お陰様です」と思う心が、自分に芽生えました。私がこうして毎日健康に暮ら
させて頂いていることに感謝し、「お陰様です」と思える精神を養うことができました。

そして次にその心が他人への奉仕の心に変わり、仕事にも生き甲斐が生まれてきまして、
毎日を充実できるようになりました。

結果、国の繁栄と皇室の安泰、国民のいやさかを祈りながら、全世界の文明が共存共栄
できることを目標に、微力ながらも力を尽くしていこうという人生の目標を持つことがで
きました。敬神生活を実践することで、自分の内面が清められ、毎日を清く充実に、
また向上心をもって生活する、これが今の私の現状でございます。このように私は神道と
出会って、志をもって生活するよう内面が大きく改革され、日々の神明奉仕に生き甲斐を
感じながら励んでおります。

他人の人生に意見を言える立場ではございませんが、この神道の教えを、できれば私と

同世代の若者に伝えていきたいと思っております。最近の若者は元気がない、人生に意欲がないと世間でよく耳にしまして、原因の一つに世界的不況の煽りで日本の景気が沈んで将来が見えないことが挙げられます。伴って若者が起こす、信じられないような悲惨な事件も増えているように思えます。ここに御祀りされています吉田松陰先生は、今の日本の若者達を見てどう思うでしょうか。きつと「残念だ」というでしょう。そのほか幕末に自分の命を捧げて国を守ろうとした志士達も「残念」と言うに違いないでしょう。

志士達のお陰様で現在の日本に生れた私には、日本の現状が暗いことに対して、申し訳なく感じてしまいます。いずれ近い将来に日本を背負って立つ同世代の若者が、心が病んでいる姿を見ているとすこし残念に思い、このような時代だからこそ神道を世の中に広め、敬神生活の綱領を知ってもらふ必要性を私は感じます。

よく友人から「神様をおがんだら願いが叶うの」と聞かれますが、私は神様にその場限りの敬神を捧げて神徳を頂こうというのは、少し都合のいいように思います。神様は寛容ですから運よくその念願が成就することもあります。私の経験では努力なしで念願が成就したことはありません。だから日頃から心の支えとして神様に手を合わせ、自身の研鑽と努力を重ねていくことによって自分が向上し、結果いい方向に導かれる。と

というのが神徳を頂くことと私は捉えています。このことを友人に話すと友人は「んー奥深い」とししぶしぶ理解してくれましたが、反面うまく教化できなかった私は、未熟さを痛感し、今後の課題にしていきたいと思います。

私が尊敬しています幕末志士のなかに坂本竜馬がいます。坂本竜馬は「人間の使命は、文明を発展させること」と司馬遼太郎の書いた『竜馬がゆく』に書かれています。人間は仕事の大小に関係なく与えられた仕事を一生懸命こなし、龍馬が周りのしがらみに捉れず日本の爲に自己改革し邁進していったように、私達も世の中に貢献していかなければなりません。

そして神道は神の道と書きます通り、武道・書道・茶道・華道など同様、く道と書かれています。つまり人間形成の道であります。敬神生活で養えるのは人間としてなくてはならない道徳や、奉仕の心と向上心です。

このような素晴らしき心を養うことのできる神道の教えを、世の中に広めていくことが、明るい日本の将来に繋がるのではないのでしょうか。

清めを愛する日本人の心

西尾 酒子

皆様、ようこそ「夏越しの大祓え」に御参拝くださいました。皆様とのご縁をいただき今日ここにお会いできましたこと感謝します。

今日、わたしは「清めを愛する日本人の心」について思い起こしてみたいとおもいます。日本人は、選挙では「清き一票を」、「清く正しく」という言葉をよく使う事を愛してきました。手が汚れるとすぐ「手を洗いたくなる」、体が汚れると「お風呂に入りたくなる」、お風呂に入ることが大好き。服が少しでも汚れると「洗濯したくなる」、洗濯すること大好き。木の葉が落ちていたら「お掃除したくなる」、きれいにお掃除すること大好き。

「すす祓え」と言つて、どこの家でも正月まえに大掃除をし、新しい年神様をお迎えする習慣がありますね。

また、どこのおうちでも日本では、玄関で履物を脱いで土足で上がりません。汚い事と清い事を区別しています。履物もそろえて見た目にも美しく履きやすいように気づかい

ます。食堂では布巾・台拭き・雑巾と使い分けして清きことを大切に健康を守るために実践します。学校では掃除することがあたりまえのこととして、子供のときから「清潔」をモットーとして学んでいます。食事の前には手洗いの実践、トイレの後で手洗いをすることの実践を、学校・家で指導してきています。外から家に帰ったら、お母さんは「手洗い、うがいをしなさい」と言つて躡ける日本人。すべて「清めを尊び、命を守ること」が伝えられてきていると考えられます。「美しきことが大好き」「清くすることが大好き」の日本人。この「清め」の尊さ、大切さをどこからどのようにして教え広めてくれたのでしょうか。そのヒントの一つは、神社の神ながらの道の「手水」にあると考えられます。神様にお会いするときは、手を清め、口を清めてからお参りする事とされています。そのことによつて神様は大切な命を守つてくださると信じてきました。神様は常に手を綺麗にする事によつて命は守られることを教えてくれています。

天皇様は、常に日々国民の命を護るという使命を遂行されておられます。

「きよめる」と言う意味は 恥や罪を雪ぐこと。

雄略紀（四七九年）「子の罪を雪むること得たり」とあります。雪のことを「きよ」と読まれていたことから、日本人は雪を見ると心が洗われたような気持ちになる心情、清めら

れたような清々しい気持ちになる遣伝子をもっているのではないでしょうか。

万葉集（二十）では、「掃き清め仕え奉る」とある。このころになると「清める」のきよは、今使われている文字になり、さんずいへんに青と変わってきています。

天皇様の「帛御装束」からも日本人は、「白」を最も清いとされてきたことが伺えます。また、みそぎと云う言葉の意味は、「身をすすぐ。身を清める。身に罪や穢れのあるときや重大な神事などに従う前に川や海で身を洗い清めること」とあります。

万葉集（三）に「・・・天の河原にいで立ちて みそぎてましを・・・」とあります。みそぎをかわらでしていたことが伺えます。

みそぎの神事と言えば石上神宮。身を清め、鎮魂（魂を鎮め、魂をよみがえらす行法）として伝えられてきています。

その行事の中の一部に

「はらえどの大神・はらえどの大神」と神様を呼び、和歌に

「朝夕に神の御前にみそぎして、すめらが御代に仕え奉らん」　イーエツ。エーイ。

「遠つ神固め修めし大八洲、天地ともに永久に榮えん」　エーイツ。ホ。

「天津神国津神たちみそなわせ、おもいたけびて我が為す業を」　エーイツ。サ。

水の中に入り大祓えを唱えお清めの神事が、今も継承されています。

日本は、昔からお風呂が大好きといって温泉に入る事が大はやりです。お風呂に入り身を清める慣習そのものがみそぎであると思います。「お風呂大好き」の日本人は、このみそぎの神事からきていると思います。

また、皆さんご存じの五月十五日、京都では「葵まつり」があります。神様にお参りなされる斎王代様のみそぎとして上賀茂神社内の湧き水の川で「みそぎ」の行事が今も継承されています。

神様にお仕えする神主は、日供祭・お祭には、みそぎを必ず済ませ清めてからお祭をします。それは、清めることにより神様は、ねがいを受け入れて下さると考え継承されてきました。そして、祓え戸において祓え戸の大神様に罪・穢れを祓っていただく神事が行われます。この「祓え」なしでは お祈りの言葉を神様にお告げできません。お清め無くして健康をお守りいただけません。そう信じてきたのです。

今日の「夏越しの大祓え」も日本人の清めの神事であり、お祓いを受けることによって私達のこれからの家内安全・無病息災・身体健全を大神様からお守りいただけるのです。

「水無月の 夏越しの祓え する人は 千歳の命 延ぶというなり」と伝えられているとお

り、この神事を毎年欠かさず執り行ってきました。

お正月前の「大晦日の大祓え」も同じで新しい年を迎えるに当たって私達の一年間の知らず知らずの罪・穢れを祓っていただき、身も心も清められて新しい年を迎えます。新しい年が、健康で幸多き年となるように祈願するのです。そして、大神様にお守りいただく事を信じ、受け継がれてきているのです。

このように天皇様が、継承されてきた古代の清めの神ながらの神事から始まり日本全国各地域の八万余りの神社において清めの神事が継承されて来ました。

その歴史を考えれば少なくとも神武天皇様から始まったとして今年で二千六百七十年も経ちます。この長い年月、日常生活に培われ継承されてきた日本人の心と体にしみついてきていると思います。

このことから、日本人は、古代から鎮守の森に鎮まる神様のきよめの神事から始まり、きよめの心の大切さを体験し生活する中で命が護られることを学んできたことが伺えます。幾千年となく日常生活の繰り返しの中で実践されて尊い命が護られてきたと言えます。そのことが、きよめを愛する遺伝子となって日本人の血の中に流れていると言って過言でないと思います。

しかし、今、社会の現状をまのあたりにするとき、この清めの心と実践が稀薄になりつつあることが伺えます。車中から缶・たばこやゴミを捨てたりする人・海水浴にいつても平気でゴミを放り汚くする人・山登りで山に弁当箱や食べ残しなど捨てて帰る人・自分さえよければいいと考える人が多くなり、大神様・ご先祖から命をいただいていることを信じていない人・学校で掃除をする事を学習しても家庭で「勉強せよ」と言われて家で掃除しなくてすむ生活をすれば大人になって実践せず掃除嫌い、手洗い・顔洗いさえ面倒がる人やこどもたちが、増えてきていると聞きます。

とても悲しい現状に陥ってきています。この現状をくいとめねばなりません。

みなさん！この現状をくいとめて、今まで培ってきた日本人の清めを愛する心の大切さその尊さ・その歴史を伝え、自らも日々生活の中で守っていきましょう！そして素晴らしい日本人のこの清めを愛する心を世界の人々にも伝え、世界の平和をお祈りしましょう。

ご静聴ありがとうございます。また、ご参拝くださり、お逢いできることを楽しみにしています。拝

御神縁への気づき

仲 林 亨

本日は「御神縁への気づき」というテーマでお話させていただきます。

御神縁といいますと何かいいことがあった時や、偶然の巡り合せがあった時などに感じられるものと言えます。また、お賽銭を上げる際、「御縁がありますように」と五円玉を用意し、さらには「十分御縁がありますように」と、十円玉と五円玉を用意する方がいらつしやるように、自分にとって幸せだと感じられる出会いを求めるときや、実際にそのような出会いがあった時に使われる「良い出会い」というイメージが強い言葉だと言えます。ですが、その反対に悪い出来事や困難を乗り越えなければならぬ時にも御神縁という力が働いているのではないかと私は感じています。

例えば、仕事の上で難題にぶち当たったとします。その時、何とか解決策を見出せないかと努力を尽くした結果、今までの自分ではできなかったことができるようになった。また、今回の難題を生み出した原因は準備段階にあったので、これからはこのようなことが

ないように注意しようということを学んだ。そして、その経験が後々の自分を支える大きな経験になった。これは神様が「今のあなたにはこれを学んでおかないといけないのですよ」というお気持ちを込めて難題に出会わせて下さったのだと考えることができるのではないでしょうか。

問題の渦中にある時は何で自分がこんな目に会わなくてはならないのかと、不運を嘆いてしまうものです。ですが、このように悪いことや困難な出来事でも神様が学びの機会を与えて下さった、つまりは御神縁を頂いたのだということに気づくと、物事を前向きに捉えられ、自分の身の回りに起こることから様々なものを学びとることができるということにも気づけるようになります。ですから、困難や悪いことも広い視野を持つて見れば、「御神縁」と言えるのではないのでしょうか。

ですが、悪いことも前向きに捉えようと、自分一人で解釈し、自分に言い聞かせるというのは頭ではわかっていても、時としてつらくなるものです。なぜなら、苦しい状況を独りで乗り越えようとしてもそこには、本当にこの困難を解決できるのであるのかという不安や孤独感が伴うからです。しかし、私の経験では、困難を良い方向に捉え、努力を続けていますと、自分がやってきたことが報われたと思えるような出会いがおこります。

私は現在、八坂神社の境外摂社又旅社というお社の管理を担当しています。又旅社は三条商店街という商店街の中にあるお社で、神輿渡御の際、祭礼を執り行うところでもあります。今年の四月から社務所に住み込み管理をしておりますが、初めてのことばかりで大変なことの連続です。しかし、商店街の方々を始め又旅社を大切にして下さる方々との出合いが私を支えてくれています。

又旅社では毎月二十七日に月次祭を奉仕しております。ご参列される方の多くは地元の方々ですが、先月の二十六日に東京からお参りに来られたご家族がいらっしゃいました。このご家族は毎月京都に来られるらしく、二十七日に月次祭があることを知ると「来月は二十七日に来て参列させてもらいますね」とおっしゃっていました。このような出合いがありますと疲れも吹き飛び、頑張ってきて良かったという思いに駆られ、再び努力を続けられるようになります。

このような出合いも御神縁によるもので、始めに申しました「良い出合い」というイメージの御神縁です。神様には和魂と荒魂という二つの性格がごいますが、神様の計らいである御神縁にも二面性があるようです。ですが、両方とも神様が下さった学びの機会です。

このように考えますと、困難な状況の中において良い出会いをもたしらしてくれる方にありがたさを感じるのはもちろんのこと、困難な状況を乗り越えようとしている人に対して自分もいい出会いをもたらし、自分が助けられたことに対するお返しを多くの方々にしていくことも大切なのではないかと気づかされます。

奇しくも、又旅社の鎮座する地域は私が神職を志した時に住んでいたところであり、神様が「初心を思い出しなさい」というメッセージを込めてこの地に戻してくれたのではないかと感じています。今の私が感じていることをもとに、このようなお話をさせて頂きました。本日はありがとうございました。

(京都府 八坂神社 権禰宜)

大切なこと

松坂公宣

親を思う心にまざる親心、今日の訪れ何ときくらん

親を思う切々たる心情を読まれた吉田松陰先生のこの歌の如く、大きな親の心に胸打たれる気持ちで萩の地に参りました。

戦後神社界は、神道指令により大きな試練を受けましたが、その混迷の時期を克服して今や安定期を迎えております。しかしながら地方に奉仕する神職の中で、一抹の不安もあります。本日は、全国各地に数多く鎮座する末端神社の神職が、現在抱えている問題点についてお話ししてみたいと思います。

まず神職の兼職と言う事についてですが、所謂諸社の神職の中には、神明奉仕のみでは生活の成り立たぬ者が、少なくありません。よって兼職に頼ることになる訳ですが、兼職と言っても幾つかの形があり神職自身の兼職、家族の者の副職等、いずれにせよ神社以外の収入で、生活の一部を支えている場合を全てこれに含めますと周辺を見渡す限り大部分

がこの枠内に入ってまいります。そして、その職種も多岐に渡り各神職さまざまです。当地方では、自営の場合は農業、外部勤務では学校の教職員、市役所の職員等が多いようです。これは神社神道の発生や、社会的役割の点で触れ合うものが多いからでしょう。

また兼職の実態は、収入の比率を見ると一層明白になると思います。それは地方では、その殆どを兼職に頼っている例が相当数に上るからです。

たとえば、兼職で一応の生活の安定を得る事が出来れば、無理な所望もせずに済み神道の純粹さが保持されると思います。

また別の職業を通じて新たな社会奉仕もできるでしょう。社会の真の姿に触れ、深く浸透すれば強い人間の繋がりも期待できるし、神社を支える力になる事もあります。

しかしながら、兼職が神職に多くの負担を強いている事も、また事実であります。例えば、平日であれば出勤前の早朝に外祭を奉仕して、祭典が近くなってくると帰宅した後、夜遅くまで準備に追われる事も屢々あり祭典が終われば、その疲労が抜け切れぬまま出勤することになります。特に、日曜祝日に行事が集中する最近の傾向では、休息の日は持ちにくく、また時には自分の昇進を犠牲にする事もあると思います。

また地方で奉仕している、神社の後継者の事についても触れてみたいと思います。末端

の神社の神職は、日曜日は原則として、休む事が出来ない事が多い様に思います。

神職とそれを取り囲む家族、特に奉仕している神社に神職が一人しかいない職員の休日はどういう事になっているのでしょうか。

この様な所にも兼職をしている地方の神職の後継者問題の、見落とされている一面があるのではないのでしょうか。

地方では、一神職が兼務社を十社以上受け持っている事は、珍しくない事があります。

抱えている兼務社の数が増えれば増えるほど氏子との触れ合いも希薄になる事と思います。また神社の経営の面で見ると、初宮詣・七五三・結婚式等、大都市の大きな神社に集中する最近の傾向では、一定地域内の氏子のみに依存する底辺の神社は、益々運営が厳しい状況にあるのが現状であります。神社経営の中でその収入の大部分を占める祈願・外祭等について一つ私自身の中で思う事があります。それは祭典終了後に受け取る初穂料の事です。お祭りを奉仕すれば御礼を頂くのは、ごく自然の事なのですが、そこに問題はないのでしょうか。報酬を得る為の奉仕なのか・奉仕した後に頂く初穂料なのか・人が生きていくために必要な生活の糧は他に求めてでも神職が奉仕している姿勢を、氏子の方々に見て頂く事、その中で、氏子崇敬者との信頼感が生まれて、繋がりのある関係が築いていけ

るのではないでしようか。

全国に鎮座する、神社の大半を占めている諸社の神職は、我が国に根ざす神社神道の担い手である事を自覚することも重要なことであると思います。なぜなら全国氏子の大半はその諸社の神職と共にあるからであります。

氏子と一体になって生活を営み、氏神様を中心に村作りをした昔の神職の生活を今一度考え直してみる必要が、今の時代にあるのではないかと思うからです。

以上、現在いろいろと感じるままを話してきましたが、要は諸社の神職が、その土地に根付いた祖先以来からの伝統の良い所を正しく継承して、独善に陥らず精進して神明奉仕に励むこと。その中で、私達の遠い祖先が持ち抱いていた大きな理想を受け継ぎ、明るい子孫の時代を切り開いていくこと、更にそれを実践し伝えていかなければなりません。

そして一番大切なことは、氏子の気持ちに答えられる神主さんになること。その為には知識だけでなく、神職自身が神様に向う心を磨いていくこと、その心の持ち方の大切さを改めて思う次第であります。

言葉を楽しむ

中 木 屋 豊

言葉の幸う国・言葉の輔くる国。こんな表現が日本という国柄でした。言葉には霊力があり、人を喜ばせたり、怒らせたり、悲しませたり、楽しくさせたりすると信じられてきました。確かに何気ない一言で、人を傷つけることがあります。逆に大変勇気づけたり、発奮して頑張りを引き出していたりすることもあります。本当に不思議な力が、言葉に宿っているのです。

それではなぜ言葉が力を持つのか。言葉が「意味」を持って誕生し、意味のように役割を果たすからです。たとえば働くという言葉を考えてみましょう。漢字はにんべんに動くと書きます。つまり人が動くということです。なぜ動くのか。それは、はたの人を楽にするためです。重い荷物を持った人がいます。入口の戸をあけてあげれば入りやすくなります。高い所で仕事をしている人がいます。必要なものが、下にあつてそれを取ってあげる。作業能率が上がります。電話がかかってきました。あいにく担当の者は、席にいません。

ん。その旨伝えて、用件をしつかり聞きメモして、担当に伝えます。はたの人が、まさに楽に仕事が出来ることになり、会社の信用は上がり、組織がスムーズに機能することになります。

会社や仕事だけではありません。家庭でも同じように考えられます。夫や子供が家に帰るころ、妻が食事を作ってくれています。安心して仕事や学校に打ち込むことができます。妻もまた、今日食事を作ることが出来るのは、夫がしっかりと働いてくれるので、安心して食材が買えるのです。はたの人とは、自分の周りの人、傍らの人という意味です。親が安心して働くことが出来るのは、子供たちがまっすぐ育っていて、初めて出来ることです。

今日お集まりの方々は、長年にわたり医療の現場で、働いてこられました。患者さんの「手当て」をする方々です。お腹が痛い時、人は思わずお腹に手を当てます。すると手の温もりが冷え腹を直してくれるのです。胸に手を当てて考えてみる。反省をすること、きれいな心を取り戻せるのです。つまり「手当て」は、悪いところを直すために行うことなのです。

さて不思議な事を表す言葉に、「くしきこと」とか、「くすしきこと」があります。奇妙なことなのです。病氣や怪我が治るのは、まさに不思議なことだったのでしょう。それを

扱う人がクスリシ・クスシと呼ばれることになったのでしよう。医師と書き、古語でクスシと読みます。看護と書いて、古語でミトリと読みます。皆さんが相手にされる患者さんは、病気の人たちです。病気とは、まさに「氣」を病んでおられるのです。病は氣からといわれる所以です。「氣」を確かに持つていただくための、日常の活動が、看護の活動です。良く見ていただくことなのです。

私たちも、氣が枯れる人たちの、祓いをいたします。氣を入れる。氣合を入れるのです。氣が枯れるのは、けがれることだからです。そのとき私たちは、祈ります。一心に神に祈ります。これから進む道を、踏みちがえないように、神の道只一筋に真っ直ぐという意味を込めると、「往く」では物足りず、「伊往く」と表現します。神様の御加護が十分照り輝く、すばらしく照り輝く意味を込めて、「伊照り輝く」と表現します。強調の接頭語「伊」が付く言葉の一つ、神様を下に置かないという意味で、「いつく」といいます。たくさんの人や物が集まることを、「伊群れ集う」といいます。「祈る」は、強調の「伊」と、述べる知らせるという意味の「宣る」からできています。神や人に、心から述べたり、知らせたりする行為を「祈る」と表しているのです。

病院は受け付けから始まります。順番に医師や看護師さん、症状によってレントゲン技

師さん、理学療法士・作業療法士さんなど、たくさんの方々が患者にかかわります。どの分野のスタッフが大事で、どこは責任が軽いということはありません。全てが大事なのです。病院を構成する一人一人が、良い「気」を発しなくてはいいけません。ではその良い「気」は、どうして出来るのでしょうか。良い言葉が響く家には、良い気が流れ、良い「家風」が出来ます。良い夫や良い妻には良い子が育ちます。良い子たちが集まる学校は良い学校になり良い「校風」が流れます。良い「校風」で育った学生が会社に入ります。良い会社となり、良い「社風」が吹いています。良い従業員を育み社会に貢献します。そうした「家風」「校風」「社風」で構成される地域は、良い「風土」を醸成します。全ての命が、光り輝くところになります。

家でも地域でもこの職場でも、正しく良い言葉が溢れ、命を大切に尊重しあい、良い社会を作り伝えることが、我々大人に課せられた課題ではないでしょうか。良い言葉の言葉を楽しむこと、今日から実践しましょう。

(鹿児島県 稻荷神社 宮司)

やむにやまれぬ――馬関戦争によせて――

玉井利明

（平成二十二年六月三十日斎行の敬神会・高縄神社敬神婦人会合同総会開催奉告祭後社頭講話を想定）

去る六月二十二日から二十四日にかけて、山口県萩市の松陰神社で開催されました第二十六回神道講演全国研修大会に、私は参加致しました。

夜行フェリーで早朝の小倉港に降り立ち、下関で赤間神宮参拝、御裳川公園で長州砲の見学などして会場へ向かいましたので、きょうは、そのことに因んだお話を致します。

明治のはじめ、赤間宮に奉仕した白石正一郎という方は、かつて維新運動を裏で支えた下関の豪商であり、鈴木重胤門下の国学者でもあって、勤皇の志士たちをかくまい、大事な情報交換の場を提供して、最も親しかった高杉東行先生の書翰によれば、その資産

「借り尽くされ飲み尽くされ」

というほどに志士たちを支援し、奇兵隊の設立と運営にも多大の私財を擲った御方であり

ます。

その白石家は、河野家分流の末裔だそうです。

むかし、河野家は勇猛果敢でした。源平の戦いで、西国の武将みな平家方に与するなか、河野通信公は水軍を率いて源氏方に就きました。その功績により御家人として鎌倉に屋敷を賜り、北条政子の妹を娶ったりしましたが、承久三年、通信公は鎌倉との縁故をなげうって、後鳥羽上皇の御もとに馳せ参じたのであります。

そのせいで、河野家は没落しました。が、通信公の曾孫にあたる通有公、蒙古の大軍襲来するや水軍を率い関門海峡を通って博多湾へと出陣し、敵の船団に果敢な襲撃をかけたのです。

そんな河野家発祥の地は御案内のとおり、ここ伊予風早の河野郷ですね。河野家によってこの地に祭られた河野三島宮。その社名、明治四年に古代の社名に復し高縄神社と改めたのが、この、われらが氏神様です。

白石正一郎という人も、かつて水軍を率いた河野氏分流の末裔ですから、幕末の時代、商人の身分であっても、勇猛果敢だった先祖たちの血が沸々とたぎったことでしょう。その活躍の場が、関門海峡だったことも因縁めいています。

幕末、わが日本にとって最大のピンチは馬関戦争後の講和談判だったのではないでしようか。

文久三年、朝廷と幕府の合意により五月十日が攘夷決行の日であったにも拘らず、これを実行したのは長州藩だけでした。関門海峡を通る外国船を攻撃し、逆に報復を受けて被害甚大。その事態打開のために起用されたのが、これに先立つその年の三月、京の都で賀茂神社御親拜に供奉した將軍を擲擧するように、その行幸を奉拜する群集のなかから

「いようつ、征夷大將軍！」

と声をかけ、上司に叱られるや十年の暇乞いをして

「西へ行く人を慕ふて東行く我が心をば神や知るらむ」と隠遁を決め込んでいた高杉東行先生です。

奇兵隊という軍事組織は、その時につくられました。

ところで山口県宇部市出身の菅直人首相は、みずからの内閣を「奇兵隊内閣」などと称しました。高杉東行先生がお聞きになったら、どうなさるでしょうね。少なくとも褒められることはありませんまい。

さて、その年の八月十八日、攘夷派の公家たちが失脚し長州へ落ちのびるという政変が

起きました。世にいう七卿落ちです。

その形勢を挽回しようとあせる急進派の上洛を阻止する役目なのに、逆に急進派と激論し同行して大阪へ船で脱走した東行先生は、萩へ連れ戻され、元治元年三月二十九日から牢に入れられてしまいました。

その間に京では池田屋事件があり、さらには蛤御門の変。惜しみても余りある大勢の人材を失ったのであります。

東行先生が罪を許され出獄して再び起用されたのは、蛤御門の変から十四日目でした。長州藩追討の勅令が出され、一方では関門海峡における前年の戦いの報復だと称して英・仏・米・蘭の四ヶ国連合艦隊による攻撃が迫っていたのです。藩では、もはや高杉に対応させるしかないということで、東行先生赦免となりましたのであります。

けれども時すでに遅し。敵艦の砲撃が始まり、たった二日間で味方の砲台ごとく破壊され、陸戦でも敵の近代戦術にかなわない。日本国内では、幕府が長州征伐のいくさを準備し始めたという。

このさい外国と和睦するしか無い。

藩では、高杉を筆頭家老の養子ということにして全權使節に任じ、講和をすすめさせよ

う、との方針が定まりました。

前年、五回にわたる戦闘で損害を受けたアメリカとフランスは、受けた損害の何倍ものダメージを長州側に与え既に報復を果たしています。それなのに、損害らしい損害もなかったオランダが加わり、しかも前年の戦いに直接関係もなかったイギリスが主力となつて前年の報復と称する戦いを仕掛けてきたのです。

下関沖に停泊したイギリス東洋艦隊の旗艦ユーリアス号の艦上で講和の談判が行われました。賠償金の支払い要求は何とかかわしましたが、イギリス側は彦島の租借を申し出たのです。

イギリスという国は、かつてスペインと制海権を争つて勝利しました。そしてイベリア半島南端のジブラルタルを直轄植民地として、大西洋から地中海への入口にあたる海峡に睨みを利かせることが出来たのです。そして今、アヘン戦争の結果、清国から租借した香港を利権拡大の拠点にして、着々とかの国をむしばんでいます。彦島を、もしもイギリスが支配したならば、日本海から瀬戸内海への入口である関門海峡、この日本の大事な、いわば喉首が押さえられてしまうことになるのです。

そのとき晋作（東行）すこしもひるまず、居ずまいを正して、まるで神主のようにおご

そかな声で天地開闢から説きおこし、わが国が神国であることを滔々と語って、租借など、寸土たりとも出来ぬ由、述べ伝えました。

吉田松陰先生の教え。その真髓。この愛弟子の口をかりてほとばしり出でたるか。祖国の神々、そをよみし給ひ、みいづ添へさせ給ひしか。その氣迫、その言靈に、相手は沈黙したといひます。

かくて、国は救われたのです。

その功績はしかし、この世では報われません。優れた人であればあるほど、神様は、甘やかしたりなさらないようです。

それからの東行先生、目まぐるしく変わる情勢のなかで俗論党からも攘夷派からも命をねらわれ、一時は孤立無援、必死の逃避行と起死回生の大勝負を繰り返すうちに、その身体、病魔にむしばまれ、血を吐きながら幕府軍と戦い、自分をかくまった罪で捕えられた勤皇の女傑・野村望東尼を救出して、元号改まり明治となる前年、慶応三年の四月十三日、二十九歳の命を終えたのです。

下関から吉田への葬送には、三千人もの人々が松明をかざしてつき従ったといひます。いっぽう、白石正一郎翁もまた、神様に甘やかされませんでした。

御一新成って、維新運動に協力した商人たちは新政府に取り入って財閥になったりしましたが、正一郎翁は、そのような道と無縁だったのです。

御一新と共に廻船問屋は倒産しました。あたかも、維新運動に燃え尽きた高杉東行先生と命運共にするがごとくに。

その昔、御先祖が源氏方に就き、水軍を率いて戦った壇ノ浦。その海原を見はるかすところに、敗れた平氏の公達もろとも海に御入りあそばした幼き帝の神霊を奉斎する赤間宮。そこに御仕えするのが、白石正一郎翁、最後の勤めでありました。

(愛媛県 高縄神社 禰宜)

※ 「そのとき晋作・・・・・・・・・・」は、能楽『船弁慶』の「そのとき義経・・・・・・・・・・」に擬す。

※ 高杉家の先祖は武田姓（源氏？）。

※ 彦島は壇ノ浦合戦で平家の陣地。

御日待祭のあとで——一本の万年筆——

真庭 宗雄

私の母は、今年卒寿満九十歳をお陰さまで元気に迎えます。毎朝六時には、境内の清掃「お宮はいつもきれいに、そうじをせんといけん」と有難いことであります。

その母の姉さまは、山口県は旧徳山市、今の周南市河東に住んでおりましたが三年前に亡くなりました。その姑さんも十年ぐらい前に百一歳で他界いたしました。お名前を山時シゲヨおばあちゃんと申します。私が徳山へ遊びに行くと、いつも「宗雄ちゃん、よう来たね。ゆつくり泊って、おいしいもの食べて行きなさいよ」と大事にしていたきました。そのシゲヨおばあちゃんは、六人の男の子を授かって、元気に大きく育てられました。がその六番目の男の子、名前を「洋六さん」と申します。この洋六さんは、仔細あって本人が一歳半の頃、千葉県は習志野の榊見家に養子として行かれました。洋六さんは、学問を優秀な成績で、十五歳より旧海軍士官学校に入られ十九歳にして軍艦陸奥に勤務することになりました。その時、呉の軍港・徳山の港に入港の折には、河東のシゲヨおばさん宅を

訪れ、休暇を楽しんでおられることも。その時に「私があなただの母よ」とは言われなかったそうです。

そして昭和十八年五月末岩国市は柱島沖に陸奥が停泊。洋六さんは、習志野に帰省せずに、徳山におばさんを訪れ休息、日本で最後になろう休日をご過ごされました。そして休日明けの朝、洋六さんは、これより南洋方面の作戦に出港することを告げられました。

シゲヨおばあちゃんは、「うんうん、わかったよ」とうなずかれ、奥のタンスより一本のパイロットの万年筆を取り出してこられ、そのキャップを取って、和裁の太い針で「洋六」と彫りしるし、「はい、これを持っていき。おばちゃんからの、成人式のお祝いだよ」と手渡されました。

その時何故「私が、あなたのお母ちゃんよ」と言えなかったじやろうかと、言っておられました。

そして洋六さんは、その万年筆を大事に胸の内ポケットに差され、「ありがとうございませう。いつも身から離さず大事にします。では行ってまいります」と、徳山を後にされました。

そして六月八日午後〇時十五分、陸奥は謎の爆発を起こし、三好輝彦艦長以下

千百二十一名の尊い生命が周防灘に失われました。

その中でも数少ない生存者は、どこにも知らされず寒い北方の地、或いは暑い南方の地の作戦に加えられ、シゲヨおばあちゃんたち家族が戦死したことを知ったのは、半年後のことであつたと聞きました。

終戦後、おばあちゃん達は、陸奥遺族会を結成、生存した人々を中心に陸奥顕彰会を立ち上げ、三好艦長夫人以下皆さんで、毎年六月八日山口県大島郡東和町と、岩国市柱島で慰霊祭を斎行。「どうしても陸奥を引揚げたい」との思いを年毎に強くされ、昭和四十年に県庁へ引揚げの願いを出されました。

昭和四十二年に前年と同じように請願に県庁に行かれた時、ロビーで神戸の浜田物産社長・浜田悦蔵さんと会われました。浜田氏は皆の願いを聞かれ、呉市にある深田サルベージに遺族の熱意を届け、あらゆる手立てを惜しむことなく使われました。「陸奥は揚げられます。必ず揚げられます」と浜田氏は約束され、とうとう昭和四十五年六月八日東和町筏八幡宮で引き揚げ工事安全祈願祭を二百余名の遺族、顕彰会また工事を行なう関係者で行われ、引き揚げ作業が開始されました。

そして昭和四十六年三月二十日柱島沖、おばあちゃん達遺族の見守る中、ワイヤー十五

本で四番砲塔が、ポツカリと海面に現れました。おばあちゃん達は心から「息子よお帰り、寒かったろうね」と涙ぐみながらも、喜ばれたそうです。そしてこの年より昭和五十年までの五年間、四十メートルを超える海底ゆえの困難極まる中、ご英霊の遺品とともに、主砲など艦体の七十パーセントを引き揚げ、陸奥の沈没地点を望む丘に陸奥記念館が建設されました。

昭和五十年春、その最後の引き揚げが終了。その時徳山へ呉の深田サルベージより電話がありました。「恐れ入りますが、すぐに呉の会社まで」おばあちゃんは、胸騒ぎを覚える中、取り急ぎ呉の港まで行き、会社の応接室で待っていますと、係りの方が、真っ白な布に包まれた小さな物をテーブルの上に置かれました。そしておばあちゃんがそれを手に取り、包みを広げると中には、一本の万年筆が。

「あつ、これは、洋六にあげた万年筆じゃ」おばあちゃんは、しっかりとその万年筆を抱き上げ、「洋六さんお帰り。寒かったろうね。冷たかったろうね」と、三十二年ぶりに息子が帰ってきたと、頬には涙が伝わっていたそうです。

私も徳山に呼ばれ、床の間の三方に安置されたご英霊の万年筆を拝ませていただきました。「よかったね。おばあちゃん。洋六さんが帰ってこられましたね」と。

それから一カ月後、シゲヨおばあちゃんは万年筆を大島郡東和町の陸奥記念館に納められました。大事な万年筆を何故に。

それは、「私と同じ思いを持つ母が千百余名いる。私と同じ思いを持つ妻がいる」との思いで納められたのです。

三十数年間、冷たい海底にあっても、母は毎朝かげ膳をお供えされ、必ず帰って来ると祈っておられました。母と子の絆、子と母との絆は、切っても切れないのです。今の世にあって一番忘れてはならない事では無いでしょうか。

(山口県 豊榮神社 宮司)

「日本が危ない」保守政権を取り戻さなければ

石 塚 智 康

本日は山根神社の祈年祭にお参りくださり、ありがとうございます。

お祭りの後、私が近頃危惧していることを少々お話してみたいと思います。

昨春秋、保守政権が破れ民主党を中心とした連立政権が誕生しました。果たして国民にとって、よい政治をやってくれるのかと思っていましたら、何と次々にこれまでにない施政、政策、法案の用意をしているではないですか。

今日はこのうち四つほどお話してみます。

先ず第一、昨年十二月、中国共産党の要請を受けて天皇陛下と習近平中国国家副主席の会見を強引に進めました。

天皇陛下のご健康のため、外国要人が天皇陛下との会見を望む場合には、一ヶ月以上前までに文書で正式に申し入れるという「一ヶ月ルール」が平成七年に定められ、以降歴代内閣で守られてきました。

ところが鳩山民主体政權が今回このルールの慣例を破り、十二月十五日強引に会見が行われました。

この異例の事態を巡って世論が騒ぎました。慣例無視に抵抗した宮内庁長官に民主党幹事長は「辞表を出してからものを言え」とまくし立て前代未聞の言動です。自分を何様と思っておられるのか、高々党の幹事長が皇室命令権までも何でもやってやるという傲慢さが如実に現れていると思っています。許せません。

天皇陛下は日本国及び日本国民統合の象徴であります。

天皇陛下の尊厳を守るとは政治的中立性、公平性を確保する意味から重要なことです。これまでの内閣はこのことを厳粛に守ってきたのに民主体政權になって無視し、天皇陛下が政治利用されたことは日本国の尊厳にかかわる極めて遺憾なことです。

次に、現政權はやたら中国、中国といって向こうから言われることは何でも呑もうとしています。

その一つに靖国神社があります。「靖国は戦争犯罪者が祀つてある。A級戦犯は罪人だ。そこに参拝することをしてはならない」と言われて、それでは誰でもわだかまりなく無宗教性の国立追悼施設の建設に取り組むと計画をしています。しかしこれは全く意識が外れ

ています。

靖国神社は何も先の大戦ばかりではなく、日清日露の戦いからこの国を守るため尊い犠牲となられ殉職された多くの御霊を敬い鎮めようと、東京招魂社が創建されその後靖国神社と改められ、先の大戦での英霊も多くお祀りされている神社です。ましてや英霊にAだBだCだのと言う御霊はありません。

これを御霊の鎮まりや何もない国家追悼施設建設こそ全くの無意味であり無駄なことです。中止すべきです。

また民主党は最も危険な悪法、日本を解体する売国法案である「定住外国人地方参政権付与」法案を成立させようと企んでいます。

この法案の概要は、三年間日本に滞在している外国人に無条件で日本人同等の権利を認める。それは縦え不法滞在であっても三年間日本に居れば永住資格が与えられる。そして資格が与えられたら、その後はどんな理由が有ろうとも日本から追い出されないという内容です。

こんな恐ろしい法案が成立したら、たちまちに日本の主権は外国に持っていけます。外国人で特に危惧するのは急増している在日中国人です。

戦前から横浜、神戸、長崎等の中華街に住んでいる華僑の人々でなく、イデオロギー政治体制、歴史観が国益の異なる中国共産体制下の反日教育を受けて育った三十歳代の若者が圧倒的に多いことです。

その狙いは中国共産党による中国の日本侵略工作なのです。その数たるや今や韓国、朝鮮人を越して七十万人を上回っているそうです。これは政令指定都市人口に匹敵する数です。

これが与党賛成多数で成立すれば日本の国政をも左右されかねないのです。特に暴力革命、破壊活動容疑団体等に選挙権を与えたらどうなるか。非常に恐ろしい事です。

一旦外国人に支配されたらもう復権することは不可能です。このことをいまの与党はわかっています。地方だからよいのだろうと言う議員も居るようですが、地方からどんな反日分子が出だしたらどうでしょう。国政に及ぶのは火を見るよりも明らかです。

ですから何としてもこの法案は潰さなければなりません。

また中国の内なる移民侵略ばかりでは有りません。国土侵略もどんどん攻略が進行しています。

竹島がそうです。この島は古く江戸時代に発見されて、幕府から許可を得て鬱陵島ウルルンへ渡りアワビ、アシカの魚獵、木竹の伐採を行っていた船の良好寄港地であったそうです。ところが昭和二十七年、韓国が一方的に李承晩ラインを發し、竹島もライン内に囲い込んだ事により領有権争いが続いています。今は韓国が灯台、見張り場、兵舎等を築き警備員を常駐し不法占拠を続けています。

対馬も攻略が進行しています。かつて七万人の人口も半減しその後韓国人が大挙して移ってきています。そして島内の土地建物等が次々に韓国資本の手によって買収されています。海上自衛隊、航空自衛隊、レーダサイト等の隣接地が韓国資本で買収され、対馬の人に向かって「ここは元々韓国の領土だ」と言い看板も立てられているそうです。

日教組指導者もこれらの島は韓国のものだと容認している。そう教えるべきだとこの異様な状態を政府は知っていても見ぬふりをしている。これでは日本国土が盗られてしまう。きちつとした外交を望むものです。

もう一つ 日本文明を破壊する法務大臣と社民党党首が中心となって民法改悪を進めていることが有ります。

それは「選択的夫婦別姓法案」です。こんな法案が通り夫婦別姓になれば日本の社会は

大混乱を起こします。連綿と続く家族の絆が断ち切られてしまいます。

なぜなら家族制度こそ日本文明の根幹を成すものであります。

国民の中には、選択的だから問題ないだろうと思われる人も在るかもしれませんが、同姓家族と別姓家族とが混在する社会では様々な混乱が起こることになります。

別姓になれば親と子どもの姓が違うことは子どもにとつても心理的影響や負担が有り、またいじめの対象になる事も十分考えられます。

別姓夫婦は結婚前に子どもの姓をどちらに統一するか決定し、それは途中で変えることは出来ません。

そういう面からすると面倒だからとむしろきちんとした法律婚が減って、事実婚といわゆる同棲関係が増えることは充分予想されます。生まれた子どもは非嫡出子です。これは日本の将来に大きな禍根を残すことになります。

またお墓を守るのは日本人の根本です。

お盆や彼岸にはご先祖の御霊を家にお連れしてともに時間を過ごす。

お墓参りをして、先祖との繋がりで自分が生まれてきたという敬虔な気持ちになる。ご先祖様が見ている、お天道様が見ている、と言われると悪いことが出来ない。それが日本

人の生き方です。

両親が先祖を祀る、その後ろ姿を見て子どもたちはご先祖様を肌で感じ、次第に成長するにつれ自然に先祖祀りが出来るようになります。

ところが別姓になりお墓が別々になれば、誰がどの墓を守るのか。代が代わったら解らなくなってしまう。そうなれば守りきれなくなり荒れ果てて家族制度も破壊してしまう。

ですからこの夫婦別姓法案は家族制度を否定してバラバラの個人になってしまう。

親も子もない、自分が自分として生きたいように生きればよいのだ。そこには家族制度は邪魔だ。家系図は成り立たなくなります。出生の系統は完全に否定されます。

法務大臣が目指しているのは戸籍の廃止で個人籍導入であり、婚外子いわゆる非嫡出子の相続分の平等化です。

そして民主党内の日教組を始めとする旧社会党の面々が政策シナリオを描いているこの夫婦別姓法案の最終目標は皇室破壊という恐ろしい意図が隠されています。

ですからこの企みを阻止するためにも世論を喚起して断固反対して成立阻止しなければいけません。

以上、天皇陛下下の政治利用。国立追悼施設建設。定住外国人地方参政権付与。選択的夫

婦別姓法案。を話しました。

これら四つの悪政、悪法阻止のため何としても左翼政權を撤退させ保守政權を取り戻さなければなりません。

そうしないと日本が危ないのです。

七月には参議院議員通常選挙が行われます。

私も神社界も保守政權を取り戻そうと、神道政治連盟を通じて比例代表に推薦候補を擁立して強力に推しています。皆様方もいまの話をご理解いただきまして、強力な清一票の行使をどうかよろしく、よろしくお願いを申し上げます。
ありがとうございます。

(鳥取県 山根神社 宮司)

吉田松陰作の『辞世』と剣舞

多田利子

本日、この松陰神社で神様としてお祀りされております吉田松陰先生についてお話をさせて頂きます。話の中で吉田松陰先生が何回も出てきますので、先生の敬称は省略させて頂きますことをお許し下さい。

吉田松陰は、昨日の松陰神社の宮司様のご講演を始め参加者の講話の中にも出てまいりましたが、皆さまもご存知のように、江戸時代の末に徳川幕府を倒し、天皇政治を起そうとした思想を強く持って活躍された方です。三十歳の若さで処刑されましたが、処刑される七日前に獄中から郷里に送った『辞世』の詩があります。『辞世』といいますが、この世の中に別れる前に作る詩歌のことをいいます。松陰自ら朗々と吟じたのを筆記させたといわれております。この『辞世』の詩を今から心をこめて吟じさせて頂きます。

辞世

吉田松陰作

吾今国の為に死す

死して君親に負かず

悠々たり天地の事

鑑照明神に在り

有り難うございました。松陰がどのように吟じたかは分かりませんが、この松陰神社で吟じさせていただきましたことは幸せでございます。

この詩の意味は「今、私は国のために命を捨てようとしている。私の行なったことや考えたことは、いつさいが国の前途を思つてのことであつて、そこには一片の私情もさし挟んではない。志半ばで処刑されても天子や両親にそむくところは少しもないと信ずる。後世に残るものといえば、自分のすべてを捧げた忠誠である。忠誠こそが神明に対して、いささかも恥じるところがない。私はなんの後悔もなく死につくことができる。」という内容です。三十歳の若さで国のことを思い、また両親のことを思いやつた松陰の明々白々の心境がこの詩の中に力強く表現されています。

さて、私事になりますが、子育てを終えた頃より剣舞というものを始めました。剣舞と

いいますのは、先ほど吟じました詩吟に合わせ、刀と扇を持つて舞うものです。この劍舞を、地域の青少年育成のために公民館で小学生や中学生、またそのお母さん達と一緒にお稽古に励んでおります。

この『辞世』を舞うとなりますと、まず詩の内容を理解し作者の気持ちになって舞を振り付けていきます。少し説明しますと、舞い人は松陰自身になります。「吾今国の為に死す」―吾で自分を指さし胸をたたき刀で戦つて死ぬ舞をします。「死して君親に負かず」―右手を上げ君子を見上げ、左手を上げ両親を思う、そして気持ちをこめてゆっくりお辞儀をします。「悠々たり天地の事」―扇を広げ世の中を見ながら歩き、扇で天を指し地を指します。「鑑照明神に在り」―刀を鞘ごと出し日本刀に映る自分の姿を照らします。「神や仏に對してなんの恥じることはない、どうぞこの命を差し出そう」と言う意味が込められています。

簡単に手振りだけをさせて頂きましたが、二分間の吟に合わせて舞います。吟を詠ずる人も松陰の気持ちになって吟じ、劍舞を舞う人も松陰のその時の心情になって舞います。この両者が一對となつてこの『辞世』の詩が命あるものとなり、見ている人を感動させます。

剣舞や詩吟の世界では、今もこの『辞世』の詩は子供から大人まで愛され、知らない人はいません。吉田松陰先生は亡くなって百五十年たちましたが、今も私たちの心の中に生き続けています。

以上でございます。有り難うございました。

(大阪府 素盞鳴尊神社 欄宜)

「ご神霊を拝す」

佐 上 博

この講演研修会は神社本庁で開催するものとしては禊・鍊成行法の研修と共に、一番長い歴史のあるものだと思っています。初参加で恐縮ではありますが、宮司の薦めもあり、私が先日体験した貴重な経験と自分の考えとを話してみたいと思います。宜しくお願い申し上げます。

昔から「神様は見てござる」とか「神様は実在する」等とよく耳にしますが、私はこの歳になる迄一度も神様にお目に掛かったこともなく、祖先から受け継いでいる神道の家系の長男として、ひたすら家訓を守り神を崇め勤めてまいりました。私は長い間、民間の企業に勤め定年後に宮司の薦めで「直階」と云う神職検定講習を受け、現在は長束神社の出世として奉仕をさせて頂いています。

今年の三月七日に村田宮司が兼務されている、高乃宮神社の奥の宮に当る仙竜神社で春季例大祭の神事中、午前十一時半頃の事でした。一連の様子を記録に残そうと、デジカメ

でスナップ写真を十枚撮り、映像のチェックをしたところ、その一枚に黄金色に輝く球形状のものが写っている事に気付きました。何だろうかと思い、周りの三、四人の役員に見せましたが判明せず、私の傍に居られた石井寿夫先生の甥に当たる石井陞会長に見せたところ、映像に手をかざし何か熱いものを感じ、手にビリビリと波動を受けるとのこと、急いで官司にお見せしたところ「ご神霊と思われる為、直ぐ現像するように、プリントで見たい」との指示を受けました。処理をして持参したところ、黄金色をした球形状で、その中に紋様がはっきり写り、玉の周りには勢いのある炎が見え、鮮明なもので「徳の高いご神霊だと思われる」とのことでした。私は靈感を持った人間ではなく、狙った訳でもありません、偶然に撮れたものです。

この出来事を契機に私なりに色々調べてみましたが「ご神霊と思われる」点を二、三述べて見ますと

◎先ずは第一に知人の霊能者に見てもらったところ「これは神様が出ておられる姿で、しかもその周りには多くの御霊も集まっている」との解説を受け益々確信を得ました。

◎インターネットで「神霊写真」について調べてみましたが、これ程までに鮮明な写真は見たがりません。

・銀板カメラではフィルムの重ね焼などが出来る紛い物写真も可能でしたが、デジカメの普及により人為的なトリック写真は難しいといわれています。

・人為的なものとして考えられる事は

①光源があるとレンズにハレーションを起こす。

②光の反射に依る映り込み。

③バカチョン・カメラ等のメカ的原因。

④オーブといわれるカメラに写る球体は何故写るのかは現在は究明されていないが、「遠近焦点のピンボケ、フラッシュ時に空気中のホコリや水滴など水の湧き出る場所等で写ることがある」とあります。レンズに何か付着しているのであれば二〜三枚撮れるはずですが、一枚だけ写し出された。

・しかし、この写真を撮った場所は神社の拝殿内であり、祭りの為に事前に大掃除をし、ホコリは出ず、室内で水滴もなく、別光源からの映り込みも無い。

・特殊神事として拝殿内で鳴釜神事が行われましたが、この時は神事の直前であり、蓋は閉めた状態で蒸気は出ていなかった。

・カメラはソニー製のサイバーショットでフラッシュは発光しましたが、この機種の中

では最上級のもので、四年近くも使用しているもので初めての経験であり、メカ的な欠陥とは考え難い。私も五十年近くも写真を撮り続けており、写真撮影には絶対の自信を持っています。

◎ご神霊と考えられる不思議な出来事として

・当日予定していた小学三年生の巫女が式の直前に「怖い・怖い」としゃがみ込み身体を震わせ巫女舞の奉仕をする事が出来なかった。

（子供は感受性が高いので、何かを感じたのかも知れません。）

・神事中に鳴釜の音に異変があった。初めは大きな音がしていたが、途中で突然音が消えた。（私は初めての経験でした。）

・パソコン・プリンターで二枚だけ印刷をしたが、その後は映像を取り入れたパソコンが壊れ、それ以降は陽画版より手間をかけ焼き増しをしている。

このように様々な不思議な要素が重なっています。では何故この度の「ご神霊を拝す」ことが出来たのであろうか。

私なりの思考ではありますが、深く図り知れないご神霊のご出現には神様と神主と氏子との複合的な条件が重なり、こうした現象が起こったものと考えられます。それは、ご縁

を頂き当会の会長である村田宮司と身近に接し、神社に奉仕する中でこうした不思議な現象も当然あり得ることだと感じる点が多くあるからです。

三代に渡り四国の霊山・石鎚山の先達を拝命されている。又、宮司は常に神主として神明奉仕する心掛けとして「学と行」を極め「本物の神主」を目指すよう日夜厳しく指摘され指導を受けています。宮司は石井・佐古岡先生のご意志を継ぎ、寝る時間も惜しみ一心に神明奉仕に励まれる超人的な日々を送っております。幼い頃より身体が弱く今迄に五、六回も死線をさまよって来たと聞きます。小学校三年生の時医師にも見放され病床に伏せていた頃「この子は村田家にも神社界にも必要な人間となるので生命を取ることは出来ない」との神のお告げを受けられました。一生涯スポーツや水泳・タバコも吸うことは出来ないと医者より告げられた身体で何故、神社界の錬成行法道彦としての代表的な指導者であり寒中褌や居合道・登山ができるのでありましょうか。何度も医者より見放され死線をさ迷う都度に、それを持ち越え蘇る強靱な精神があるのでありましょうか。私は神の力で生かされているという信念と、ここに祀られる吉田松陰先生の「至誠」の心があるからこそだと思います。

この高乃宮神社の鎮守の森の元はハゲ山であったと聞きますが、今では昼間でも薄暗い

山となっています。これは五十年かけて神体山とすべく念願を込め全国より著名な神社のご神木が多く移植され育てられ、麓には石井先生の御霊と胸像が奉安され、靈感の強かった先代宮司と共に建立されている場所であります。

こうした諸条件が重なり「世の為、人の為」にと一心に祈念する村田宮司の傍に『ご神霊』として写し出され、我々凡人に拝する機会を与えられたものと信じるものであります。ご静聴ありがとうございます。

（広島県 長束神社 出仕）

二 靈群品之祖

川 原 隆 司

いよいよ七月十一日に参議院議員選挙が行われることが決定し、これから全国津々浦々で舌戦が繰り広げられることとなりました。民主党に政権が変わり、今のところ高い支持率に支えられている菅首相のもとでの、初の国政選挙となりますが、外国人参政権の付与・夫婦別姓の問題等日本の国柄を揺るがしかねない法案が目の前に用意されており、

また、竹島・対馬問題等わが国の領土が脅かされている現実には、一有権者として厳しい目を向けなければならぬでしょう。世界に類を見ないほど長い歴史と伝統に彩られたわが国は、尊い神話の昔から神々が合議制をとっており、なにか事が生じると、八百万の神が集まり議論を重ね、正しい政を行ってきています。速須佐之男命が乱暴をはたらいたことにより、天照大神が、天の石屋戸にお籠りになった時も、思金神が計画を練り、天宇受売命が踊り天照大神の興味を引いた時に、力持ちの天手力男神が石屋戸を開きこの難を脱しています。見事な連携プレーと能力に応じた適材適所の人事といえますか役割は、今の

世の範となるものです。全知全能の神を祀る一神教の世界観には、日本の神が合議制にて政を行うことは、理解しがたいことと思われませんが、教祖や教義がなく、自然に発生した神道が根底にある神の国では、この和の精神は連綿と引継がれてきたのです。それでは、この神の国の成り立ちはというと、『古事記』には、伊邪那岐・伊邪那美二柱の神が相談し、天の御柱を左右より廻り、お互いに見合した時に男神が女神に「あなにやしえをとめを」これは現代風に言えば「ああなんと美しい女性であろう」と発し、続いて女神が男神に「あなにやしえをとこを」これは「ああなんと凛々しい立派な男性であろう」と答へ、今でいうプロポーズの言葉を交わし、初めて夫婦になったと記しています。この時、男性が先にプロポーズするのが好ましいようですが、最近では「草食系男子」といわれる男性が増え、女性から逆にプロポーズする方が増えているようです。ともかく、その後お互いの体の一部を補いながら、緑豊かな素晴らしい日本の国土を始め、多くの神をお生みになったと伝え、この神業により、伊邪那岐・伊邪那美二柱の神は、国生みの神「二霊群品之祖」といわれるようになりました。「二霊」とは伊邪那岐・伊邪那美二柱の神を指し、「群品之祖」とはあらゆるものの親を意味します。日本の国、多くの神、万物の祖神として大無辺の恵みをもたらす「二霊」は、神と人、自然、日本を一本の線に繋げる出発点であ

るといえます。神と人とを同一に考えるのは如何と思いますが、常に「二霊」は、親として現代に生きる私たち又、日本の国を見守っているのです。私は、「二霊群品之祖」を祀り、「お多賀さん」と呼ばれ親しまれている滋賀県の大賀大社に奉職させていただいていますが、神のご縁を得て結婚し、三人の子宝にも恵まれました。「七つまでは神の子」といいますが、赤の他人同士がものすごい確率で結ばれ新たな血の継承として子供を授かる、まさに神業ということを実感した訳ですが、その後の生活はといいますと、妻との会話はめっきり減り、子供達はお母さんの味方となっていました。先頃、こんな幸せ我が家にならずめが一時期同居するようになりました。或る時「チュンチュン チュンチュン」と大変近くで鳥の鳴き声がしたので、外に出てみると隣の畑に立っている柿木を住処にしていたつがいのすずめが、口に藁を咥えさせと我が家の屋根に運んでいるではないですか。こんな処に巣を作られては困るので、藁を運んでくる度に取り除いていましたが、処を変えながら必死に巣作りをしている様子をみると、親は大変だなあと自身と照らし合わせるようになり、巣の建設を許可しました。障害がなくなつたすずめは着々と巣を完成させ、ヒナも孵り我が家を巣立っていきました。親の苦労はどこの世界でも共通で、国づくり・家族づくりも様々な障害を経て継承されてきています。

最後にこの萩の地が生んだ幕末の思想家吉田松陰先生は、幕府を批判したことにより安政の大獄で死罪になりましたが、獄中より家族に宛てた『永訣書』に「親思う心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらん」と辞世を遺しているように、子供が親を想う以上に親は子供のことを想っている、ひいては、「二霊群品之祖」と称え、神々に感謝している心以上、「二霊群品之祖」は今の世の全てを温かく見守っていて下さるといえるのではないのでしょうか。大変取り留めのない話でしたが、ご静聴いただきありがとうございます。

（滋賀県 多賀大社 権瀬宜）

自然の贅沢

白 上 陽 一 郎

本日は自然の贅沢と言うテーマでお話させて頂きたいと思います。

なぜこのテーマかと申しますと、自然の味を味わえることは贅沢であり、感動でもあると感じ始めたからです。

きっかけは、四月の初めにタラの芽の天ぷらを食べたことです。もちろんタラの芽を食べたのは初めてではありませんが、今回それが食卓に上るまでの経緯を聞いて、本当の贅沢とは何かが肌で感じられ始めたような気がしましてこれをテーマに選びました。

さて、タラの芽というのは、一昔前までは食材としては見向きもされないものでしたが、近年高級食材としての需要が伸び、乱獲が進んでいるそうです。

タラの芽は二年連続で新芽を摘んでしまうと木そのものが枯れてしまってもう採れなくなるそうです。そのことを一般的にはあまりご存じないようで、私も知りませんでした。

春になると一見人里離れた山の中では旬の食材をめぐる争奪戦が繰り広げられている

ようです。

タラの芽は、お店に出回る頃には日が経ち、その上高値でなかなか売れず、その間に蕾が広がって味覚が落ちてしまうものが多く、このためまだ蕾が広がらないうちにそれを狙って乱獲されてしまうのです。

母の知人が山を持っており、その方から毎年頂くのですが、私はタラの芽など山に行けばいくらでもあるものだと思っていました。

ところが、そのようなことで来年の収穫が危ぶまれる状況になっていることを知ってからは、すごく貴重なものを頂いているという有難さを実感すると共に、贅沢だなど感じるようになりました。

来年はもう食べられなくなるかも知れないという残念な気持ちだが、タラの芽を一層味わい深いものにしました。このことで、贅沢は口で味わう、目で味わう、心で味わうことが大切なことだと改めて感じました。

自然のものを「味を付けずに味を頂く」ということが、本当の贅沢だと感じました。

ところで、当神社のご祭神、吉田松陰先生は贅沢に関しての感じ方はどうだったのでしょうか。特別に先生の書かれた贅沢論といったものがあるわけではありませんが、先生の

生き方からそれをみてゆきますと、先生は贅沢にも通じる遊芸ごと等は、武士の嗜みではないと退けられました。しかし、茶の湯だけはその精神を賞賛されました。

旅で水戸を訪ねられた際、水戸齊昭が茶道なりあきの精神について記した「茶ちやの対こたえ」を見て感動され、これを書き写してお兄さんに送っておられるのです。

水戸齊昭は、江戸時代末期の水戸藩主で、藩校弘道館を創設された方ですね。

その説くところは、「お茶の交わりは睦まじい中にも礼儀がある。度々会合するがあまりお金は使わない。楽しみながらも贅沢はしない。これに背くことは茶の法ではない」と書かれており、先生はこれを評して、「簡潔高古（古風でみやびやかなこと）、至れり尽くせり。故にこれを書して差し上げます」ということで、お兄さんの杉民治さんにこれを送つてあげました。

お茶の精神は、武士道の精神とも一致するものがあり、一種の遊芸ごとでありながら先生の心をとらえたようです。

私は贅沢三昧というのは良くないと思いますが、真の意味での贅沢を味わうということの良いのではないかと思っております。

お金をかけずにいくらでも贅沢を楽しむことは出来ます。高価なもので身を飾ることば

かりが贅沢ではありません。

贅沢の「贅」の意味は、不要な物、無駄な物、余計な物、という意味で、そういう物が沢山あることが贅沢という意味なのです。

言ってみれば、生活にはなくても困ることは無いものです。

私はまだ、贅沢という意味がはっきり分かっておりませんが、人は何故美味しいものを食べたがるのか、なぜ高価なものを欲しがるのか、これはやはり人間の性としか言いようがありません。しかし、その余計な物は使い方によっては、良い効果を發揮し、人の心を豊かにすることも出来ると思っています。

贅沢の感じ方は、人によって様々だと思います。人から見てもそれほど贅沢ではなくても贅沢だと感じる事が出来る人。贅沢をしていてもそれを贅沢だと感じる事が出来ない人等。日常生活でそういうことに気づくこともなかなか難しいことだと思います。

本来は贅沢とは、感じ取ることなのかもしれません。それには素直な気持ちになつてみる事が大切だと思います。

都会にいても自然の有難さを感じようとする気持ちがあれば感じる事が出来ますし、逆に田舎にいても感じる気持ちがあれば感じる事は出来ません。

感じようとする気持ちさえあれば、山に行つて空気を吸い込むだけでも贅沢だと感じる
ことが出来ると思います。

大切なことは日常生活の中で、心にもご馳走をあげることを忘れないようにすること
ことで、それによつて有難さや、贅沢を感じる心が育つてくるということではないかなと
思います。

大変まとまりのない内容でしたが、これで私のお話を終わらせて頂きます。

(山口県 松陰神社 榎宜)

塩の力

熊谷房重

今月の四日の朝、ちょっとゆっくりしておりましたので、新聞を読みながら何とはなしにテレビを聞いておりました。NHKの「あさイチ」という番組で、ゲストは「郷ひろみ」という歌手でした。郷ひろみと言えば、昔よくテレビで歌っていたチャラチャラした軽い感じのあの歌手か、朝っぱらからもっと増しな人物はいなかったのかと、少しにがにがしく思っていました。が、インタビューは進んでサプリメントの話になって、ビタミン剤などたくさんさんの携行品を並べて説明をしているようでありました。アナウンサーが「その白い粉は何ですか。」というのがはつきり耳に入りましたので、フツと目を上げました。郷ひろみさんが手に取ったのは、一〇センチ足らずの透明なビニール袋に入った白い粉で、それを振りながら彼は説明をしました。「これは塩なんです。完全に自然な海からの塩で、何かあった時とか、非常に疲れた時などに、体に振りかけたり、なめたりするんですよ。すると、とても元気になるんですよ。」と手ぶりを入れて話しながら、もう、次の携行品の

説明に進んで行つたのであります。

私はこの塩の話を聞いて、急に、郷ひろみもこれは捨てたもんじゃないな、と見直したのであります。アイドル歌手だったとはいえ、一芸に秀でている者は、直感的に鋭いものを持っている、「塩の力」を実感として知っている、感覚として「塩の持っているエネルギー」を感じている、すごいものだなあ、すばらしい事だと、本当に感心をしたのであります。

それから数日たって、今月の十日に、神宮において「神宮と崇敬会の参与・評議員会」が開催され、私も出席を致しました。十日の朝に、外宮、続いて内宮の特別参拝が行われ、その際に、参道の途中でお祓いを受けました。神宮においては、塩によるお清めが行われます。神宮の神事に用いられるこの塩は、伊勢市二見町汐合にある御塩浜で作られます。入浜式塩田の古式のまゝに、夏の土用に潮水を取り、釜で煮つめて作った自然海塩であります。この塩が、絶大なる祓いの力を持っているのであります。

私どもの祭典事の初めに、必ずお祓いをしますが、その祓詞の中にありますように、御祖神・伊邪那岐大神が禊祓をなさいました時に、海の中に身を浸して清める事によって祓いが行われ、そして、その直後に、天照坐皇大御神を初め尊い神々がお生まれになられた

のであります。

海の塩というのは、国つ神の恵みであり、ものを生かす力でありますから、その強大な力によって罪穢が祓われるのであります。罪穢というのは、清らかな体を包み隠すものや、我々を生かしている尊い「氣」を枯らすマイナスのエネルギーのようなもので、我^がを出した時の心の乱れや、精神の衰えのことです。それから、それに海の塩を振りかけますと、国つ神のプラスのエネルギーが与えられ、マイナスの氣の衰えが復活して、罪穢が消えていくのであります。祓いというのは、決して汚いものを取り除くというような事ではないのであります。歌手の郷ひろみさんが、自分の日常生活の中でごく自然に行っていた事が、正に祓の本質なのであります。そして、その塩による祓いの効力を実感として、彼は感じ取っているのであります。

海は、生命を生み出すエネルギーを持っておりまして、三八億年前にこの海の中で生命が誕生しました。植物となり動物となって、その動物が自分の体の中に海を取り込んで、やがて陸上へ進出し、ついに人間へと進化をしたのであります。

地球内部のドロドロしたマグマや岩石が溶けこんだ海水に、山の植物のミネラルといったの水が流れこんで、いっしょになったものが海水であり、その結晶が自然海塩であり

ます。隣の大分県佐伯市の間越海岸はごこで作られております自然海塩「なづなの塩」には九〇数種類ものミネラルが含まれているのであります。植物のミネラルが結晶したものがこの自然海塩であります。

平成九年に、規制緩和などの理由で、塩の専売制度が廃止されました。それまで長い間、塩の製造・販売は一部の業者に限られており、中でも昭和四七年の塩田法によって、全国の塩田はつぶされ、代わって塩はイオン交換法によって工場で精製される単なるNaClという物質となったのであります。

専売制度が廃止され、塩田法が解除された翌年、平成一〇年頃から、全国あちこちの海のきれいな所で、海水から作る自然海塩が製造されるようになりました。「なづなの塩」もその内の一つであります。

日本人は、神代の時代から禊祓をして、この塩の持つ絶大なる力を知っていたのであります。神事に使用する塩は、この自然海塩でなければならぬと、私は思っております。

田植が終り、さなばりの祭・あるいは水神祭・宮ごもりの時などに、昔から汐汲みしづみをして海の汐水を竹筒に入れて持ち帰り、氏神様の前庭で自分の身に振りかけ、残りを田んぼの水口に振りまく。この汐汲みをする人も今は少なくなりましたが、これなどは非常に大

切な禊祓の行事であり、是非とも、多くの方々に、伝統行事として残して行ってほしい、実践して疲労を回復させ、元気になつていただきたいと思っております。

今日は、田植え終了後の水神祭にちなんで、海の塩の持つ力について、お話を致しました。

どうも、お疲れさまでございました。

（福岡県 八幡古表神社 宮司）

イナバノシロウサギ

中 嶋 俊 史

今年は学習指導要領改訂の年にあたります。教育基本法が改正されてから初めての学習指導要領の改訂となり、「ゆとり教育」に別れを告げ、教育再生元年とも言える年になるのではないかと思います。新しい学習指導要領のもと、各社が新しい教科書を整え、教科書採択の作業も進められていることでしょう。

そんな中、小学校低学年の国語の教科書に日本の神話が復活したということが話題に上っていました。国語の学習指導要領に「伝統的な言語文化に関する事項」という項目が新たに加えられたことを受けて、全ての教科書会社が神話を掲載することになりました。教材として選ばれた神話のほとんどが「因幡の白兔」でした。「因幡の白兔」ほど日本人に親しまれている神話はないと言ってもよいかも知れません。これをきっかけとして、かつてのように、もっともって神話が日本人にとって身近なものになることを願うものです。

さて、鳥取県民なら一度は白兔海岸を訪れたことがあるのではないのでしょうか。海水浴

場として夏には多くの人で賑わい、近年はサーファーたちに人気のポイントともなっています。この白兎海岸に白兎神をお祀りする白兎神社がご鎮座になっています。皮膚病をはじめ、病氣平癒にご利益があり、また大国主命が八上姫命とご結婚なさることを予言したということから、縁結びの神様としても知られた神社です。

白兎神社と言えば、この白兎海岸にご鎮座になっているお社が真つ先に頭に浮かびますが、実はこの神社から二十キロほど内陸部に入ったところにも白兎神社はお祀りされていました。現在は神社の名前は変わっていますが、白兎神をお祀りした神社がいくつか認められます。また社殿に兎の彫刻を施した神社が多いのも特徴的です。白兎神をお祀りしている神社の近くには八上姫命をお祀りした神社もあり、そのご縁で多いのかも知れません。ところで、隣の伯耆の国にも白兎の話があるのをご存知でしょうか。「因幡の白兎」ならぬ「伯耆の白兎」の話です。本居宣長が著した「古事記伝」の中にもその話が出てきます。大山の麓の川で鱒と遊んでいた兎が、誤って川に転落して隠岐島まで流されてしまい、帰って来るときに鰐を騙すという話です。兎が流されたときに木の枝につかまって流されたので、この川を甲川と呼ぶようになったという話も伝わり、川の名前の起源譚ともなっています。今でも大山町の中山神社のさぎの宮というお社に白兎神がお祀りされているので

す。

白兔神をお祀りしているのに、さぎの宮とは少し気になります。本居宣長は古事記伝の中でこの中山神社のことについて、「伯耆国に鷲大明神と言ふあり。鷲とは兔を誤りたるならむか」と述べています。「さぎ」とは「うさぎ」の「う」が欠落したものではないかと推測しているのです。

しかし、話はどうもそう単純なものではなさそうです。人類を長い間苦しめてきた病気の一つに天然痘があります。いわゆる疱瘡です。幾度も流行を繰り返し、致死率の高さから不治の病と恐れられて来ました。昔はこの天然痘を鎮めるためには神仏に祈るしか方法がありませんでした。

伯耆の国に勧請されている天然痘を鎮める神様、疱瘡守護神として広く認められる神様にいなせはぎのみこと稲背脛命がおられます。ちよつと聞きなれない神様かもしれませんが、稲背脛命とは一体どんな神様なのでしょう。

出雲市大社町鷲浦というところに伊奈西波岐神社いなせはぎがあります。出雲大社から約七キロ北上し、日本海に面したところにご鎮座になっています。ここの神社のご祭神が稲背脛命なのです。古くから鷲大明神、あるいは白鷲大明神として信仰が厚く、神社は鷲の社と呼ば

れてきました。

実は先ほど述べました中山神社にお祀りされているさぎの宮にも、白兔神のほかに稲背脛命が併せてお祀りされているのです。ですから本居宣長は、「鷲とは兔を誤りたるならむか」と述べていますが、伯耆の国に広く勧請されていた稲背脛命をお祀りしていたがために、さぎの宮と呼ばれるようになったと考えた方が納得がいくようにも思います。

白兔神は白兔大明神と呼ばれ、稲背脛命は白鷺大明神と呼ばれ、どちらも疱瘡守護神として信仰されてきました。この二柱の神様はどちらも大国主命と深い関係があり、ときには混同されることもありました。白兔と白鷺、似ているようでもあります。そういえば兔は一羽、二羽と数えます。「稲背脛命」の「稲」とは因幡の「稲」であり「はぎ」とは皮を「はぎ」取られたことに由来するというような珍説も見受けられます。

いずれにしても人間は流行り病に対しては、一心に神様に祈ることを通してその回復を願ってきました。病気を鎮められる徳の高い神様がおられると聞きつけたら、なんとか自分の村にもお祀りしようとそれはそれは一生懸命だったことでしょう。病気にかかったとしても軽い症状で済めば、神様のお蔭と、神様に対する感謝の心を忘れずに生きてきたのだと思います。

医学の進歩や、電子顕微鏡などの機器の発達により、人類は恐ろしい病気を克服してきました。天然痘、結核、ペスト、コレラ、赤痢などなど、多くの病気の治療方法は確立され、大きな流行は起きなくなっています。

しかし現在でも、感染症による恐怖は無くなったわけではありません。新型インフルエンザの流行に怖れおののき、日本中からマスクが消えて無くなるという現象が起きたのもつい最近のことですし、家畜の伝染病である口蹄疫の流行に対して、何十万頭という牛や豚を涙をのんで殺処分しなければならなかったことを思うと、人間の力では如何ともし難いものが世の中にはまだまだあると言わざるを得ません。人間の力でなんでも解決できるという奢りを捨て、素直な気持ちで神様に向かうことが今求められているようにも思います。

来年は、十二年に一度巡って来る兎年です。何かの折に、今日の話を少しだけ思い出していただいて、「因幡の白兎」ゆかりの白兎神社、「伯耆の白兎」ゆかりの中山神社、あるいは出雲の伊奈西波岐神社にお参りされてみてはいかがでしょう。きっと神様のお蔭を受けることができると思います。

ハレの日を司る

佐藤 共子

六月二十日は、父に感謝する「父の日」でありました。私は五月五日の子供の日と同じく考えておりましたところ、何とこの日は米国から伝わったそうです。思えば記念日が好きな私たち日本人は、クリスマスやバレンタインデーまですっかり暮らしに取り入れて感謝する日として定着させてしまっています。

自分が今こうしてあるのは両親のおかげ、元気で生かされていることに感謝、食事をいただけのことに感謝、四季折々の恵みに感謝する。古来私たちは、耕作の初めや収穫の秋など農耕の節目ごとに神さまをお迎えしてきました。日々の生活を営むため、旬をわきまえ時を知り、一年のあいだに生産勤労の日と休息慰安の日を合理的に配置してきました。こうした生産勤労の日をケ（褻）、年中行事の日をハレ（晴）という心意で対応し、節・節供・節日ともよばれていました。ハレは非日常的な特別にあらたまった気持ちをもって迎えられました。ハレがましい気持ちで晴れ着をつけ、晴れの場に出て晴れの膳につくとい

う特殊な日であり、働かず祭りをする日でありました。

ハレの日を司る。つまり祭りの祈りの言葉とはどのようなことか。稲は毎年繰り返し収穫することの出来る作物であります。人生儀礼も代々親から子へ、そして孫へ繰り返されます。ハレの日を大切に、私が神前で祝詞を上げるようになって十年余りとなりました。家庭でのお祭りはその家の受け継がれてきた、又地域集落で守られてきたなど、多くの知恵が潜んでいるもので、それを最大限に生かすことだと心にしています。祝詞とは、お祭りに神職が神さまに申し上げる言葉です。

—言葉の幸はふ国—

この日本という国は言葉の霊力が、幸せをもたらしてくれる国振りであると万葉集に歌われている通り、良い言葉は良い結果を招き、悪い言葉は悪い結果をもたらすと古くから信じられてきた国なのです。そのようなところでつまりは、感謝からはじまる良い言葉を神さまに申し上げること、それこそがハレの日に行われてきたことではないでしょうか。私たち日本人は、結婚式など大切な晴れがましい場面では慎重に良い言葉を選んでいきます。そして尊敬する人や、お世話になった人には丁寧な良い言葉を心がけているのです。

私のところで年々行われている祭りにも楽を奏しながら神前に進むための進み歌という

のが在ります。

—あなにやしえおとめを

あなにやしえおとこを—

そう歌うことから始まるのです。

「なんてまあ美しい乙女だろう」

「なんて素敵な男でしょう」

男女の出会いの言葉からお祭りがはじまる。

「あなにやし」社殿に進みながら素敵で美しい出会いから万事はじまる。そう聞きながら一歩一歩進む気持ちは、とても幸せに満ちたりております。

私たちの命には限りがあります。昔は人生五十年といわれていましたが、現在は八十年、傘の寿と書いて傘寿の時代になりました。有難いことに、私自身も未だ折り返しのところにございます。

節目のある生活のおかげで、記念日として父の日、母の日、バレンタインデーを受け入れるのは得意です。賑やかなお祭り騒ぎも大好きですが、時節をつくり、ハレの日に手を合わせ祈る。祭事を受け継いで守り伝えていく。伝統というのは変わらないように思えま

すが、その時々で変わってきたはずです。現代はリセット・チェンジという言葉もよく耳にしますが、そうであるから形はかわろうとも受け継いでいく強さ、正しくありたいと思
い願うその心を繋げることが大切ではないでしょうか。良い言葉に満ちた毎日、それこそ
が遠い代々の親たちが求めてきた幸せなのかもしれません。

わが身の幸せを喜び、感謝の暮らしを送りたいものです。

(山形県 薬師神社 宮司)

こころなごます歌

佐々木美津子

昨夜降り続いた雨で境内はもちろん矢作の郷土は清められ、青空のもと今日この佳き日に古希をお迎えになられました皆様、おめでとугоさいます。

戦争のさなかこの世に生を受け、戦後の物資の乏しい時に子供時代を過ごすことを余儀なくされ、中学を卒業してからは日本再興・高度経済成長の中で一生懸命生きてまいりました。汗を流し、苦しい時・悲しい時そしてうれしい時に共に学び共に遊び、けんかした友のこと：美しい郷土の山で蝉をとり、くわごを食べ無邪気に泳いだり鮎釣りをした矢作川：こうした友との思い出がこの七十年の歲月の心の支えとなつて頑張つてこられたと思います。若くして亡くなられた方もありますが、遠くからそして近くからお集まりの皆様、あ的小学生のころに戻りご一緒に声高らかに「ふるさと」を歌いましょう。

歌は心をなごませてくれます。

うさぎ追いし かの山

こぶなつりし かの川

夢はいまもめぐりて

わすれがたき ふるさと

いかにいます父母…

幼き日の思い出の地・天照御祖神社そして心の郷土矢作をいつまでも宝として、お元氣でお過ごしくださいますよう心からお祈り申し上げます。

七十歳を迎えた古希の方々の瞳にうつすらと光るものを見ました。童謡は心をなごませてくれます。

古希の祭を終え、私は保護観察を初めて担当したA少年を思い出しました。今どうしているだろうか？元氣でいるだろうか？

「こんばんは。保護司の佐々木です。A君いますか？約束の日なので伺いました。」

待たされること数十分。しばらくして薄暗く青白い顔をした彼が玄関に現れました。玄関は履物が散乱し廊下の隅には洗い物が丸めてあり、障子はあちらこちら破れ穴が開いて

いました。

これは大変なことになる……でも自分が慌ててはいけなさと平静を保ちながら通されるまま茶の間に入りました。同席したのは、本人・父・祖母。父は酒で身を崩し病院通い、母は家娘であるが夫の行動に耐えかね地元を離れて働き、したがって年老いた祖母が家事を賄っていたのです。

「A君一緒に仕事さがそうね。」「お母さんから電話あるの?」と思いつくまま尋ねても返事は曖昧でした。ただおばあさんの孫を氣遣う心情が痛く心に響きました。こうしてA君との付き合いが始まりましたが、あれやこれやと考え足どりも重く家路につきました。

A君は、高校進学に失敗し目的もなく時を過ごしていました。このような家庭事情の中、小遣い銭欲しさに建造物侵入そして窃盗を繰り返し、私の担当するところとなったのです。家族や近所の人々から認めてもらうことがほとんどなく自尊心を傷つけられ自信をなくし、人との付き合いもうまくいかず自己中心的な行動に走ったA君。何より先に考えなければいけないのは、就職させ自活の道を歩ませることでありました。

はじめは、訪問し話しても返事さえしてくれず、そっぽを向かれることが多く途方に暮れることがたびたびでした。焦ってはいけな焦ってはいけなと自分に言い聞かせなが

ら、時には叱り時には庇い時には父とし母となつて：

「出逢い」と「感動」を大切に、豊かな感性を培うこと――。そこで訪問の都度、私の好きな「金子みすゞ童謡集」の中から読み聞かせすることを思いついたのです。

上の雪さむかろうな

つめたい月がさしていて

下の雪重たかろうな

何百人ものせて

中の雪さみしかろうな

空もじめんもみないで

こつつん こつつん打たれる土は

よい畠になつてよい麦生むよ

朝から晩まで踏まれる土は

よい路になつて車を通すよ

それから半年、A君は笑顔をみせるようになり、帰りには手を振ることもありました。公共職業安定所で紹介して頂いた事業所で働き、本人も意欲を持つて仕事に励む日々が続きました。給料を手にすると気の緩みから時には無断欠勤する日もあったけど、わざわざ係長が迎えに来るほどの親切さで良い雇用主に恵まれたことへの感謝の気持ちでいっぱいでした。そして二年後、両親のことや気になることもありましたが、やっとおばあさんの安堵の笑顔を見られるようになり、私は解除通知を手に最後の訪問を終えたのです。

童謡には、懐かしい歌や心安らぐ・心洗われる歌がたくさんあります。金子みすゞの郷土山口で、尊敬する松陰先生の、この松陰神社において、私の好きな金子みすゞとA少年との出逢いを語ることが出来た幸せを胸に

私がりょうてをひろげても

お空はちつとも飛べないが

飛べる小鳥は私のように

地面を速く走れない

私が体をゆすつても

きれいな音は出ないけど

あの鳴る鈴は私のように

たくさんの唄は知らないよ

鈴と小鳥とそれから私

みんなちがつて、みんないい

(岩手県 天照御祖神社 宮司)

昨年の七月十二日に、私恥ずかしながら年甲斐もなく三人目の子供が授かりました。其の日は、奉務を終え家に帰ると、妻が『陣痛が来たかもしれない』と半信半疑ではありましたが、早めの夕食を取りしばらく様子を見ていました。午後八時頃になると十分置き位に痛みが繰り返すようになり、急いで掛かりつけの医院に、上の子供二人を連れて駆けつけました。到着すると、早速助産師の簡単な診察を受けた後、すでに病室が宛がわれていましたので、そこで妻は着替えをすまずと、分娩室に入りました。私達は出産が終えるまで病室で待機しようと子供達を寝かせる段取りをしていると、看護師が病室にきて「立会い出産しますか。しないのであれば自宅に帰ってください」といわれました。「病室で待つのはだめですか」と尋ねると、「ここは完全看護の病院です。時間外ですのでそれはだめです」と答えが返ってきました。元より、立会い出産をする心づもりは無く、産後の穢れのこととも考え家に帰り待とうかと思いましたが、このまま帰るのも気が引け思いきって立会

い出産に挑む事にしました。

立会い出産は一昔前までは、タブー視されていましたが、近年では妊婦の出産に伴う痛みや不安感を近親者が付き添う事によりそれを軽減する出産方法という事で、ある調査では、約五割の夫婦が此の方法で出産されている程、普及され認められるようです。本来は立ち会う前に、父親も予備学習をして臨むべきではある為、看護師にこの事を尋ねたら、「飲み物を飲ませたり、励ましの言葉を掛けてあげるだけでいいから心配しないで大丈夫ですよ」と教えられ不安を抱きながら分娩室に入りました。

分娩室に入ると、妻はお腹には胎児の心音を図る器具が、手には点滴、血圧と心拍数を図る器具がつけられおり、つい先ほどまでとは別人の様な姿で横たわっていました。

横に付き添って暫く立つと、次第に陣痛の間隔が短くなり妻の表情が苦痛に満ち、腕につけられた点滴から血液が逆流するぐらい全身には力がはいり、見ているのもつらい状況になってきました。

その様子は、初めての立会い出産でしたが、見ているうちに此の雰囲気、この状況は一度経験したことがある様な気がしてきました。これ以上見ているのが辛くなってきた時、漸く子供が生まれ、安堵感と生命の誕生に感動を覚えました。助産師から聞くと、比較的

安産であつたようですが、とてもそうは思えなく出産の大変さがよく伝わってきました。後から振り返ると、あの光景は、父が八年前に他界しましたが、その時の最後の様とよく似ているような気がしました。

神話の中にこの様な話があります。伊邪那岐命、伊邪那美命という仲の良い夫婦の神様が見えます。この二柱の神様は、日本の国土を造り固め整えた神様であり又、多くの神様をおうみになった神様です。最後に火の神様をおうみになる際、伊邪那美命が大火傷をされ、それが元でお亡くなりになります。そして、伊邪那美命が黄泉国という死後の世界にいかれてしまいます。伊邪那岐命は愛しい伊邪那美命を追いかけて黄泉国へいき、連れ戻そうとしますが、すでに黄泉国の食事をしてしまいそれが叶いません。そして、伊邪那岐命は姿を見てはいけないという伊邪那美命との約束を破り、怒りにふれ伊邪那美命達に追いかけられ黄泉国から逃げ出す際、黄泉比良坂に大きな石を置いて塞いでしまいます。

死によって生が生まれ、そして死と生との世界を区別し、それと同時にそれ以前は死の世界との区別が無かったことが言える神話であります。私の体験的な事で申し上げますと死の瞬間、生の瞬間は似通った共通点があると思います。

人生の最初と、最後の出来事は、親族、家族にとつて最も大きな人生の節目になります。

それは、喜びであったり、悲しみであったり違いはありますが、共通する事は親族の絆を確かめ合える最大の機会ではないかと私は思います。その苦難、喜びに対して互いに知恵を絞り、助け合い、励まし合い気持ちが通い合う時ではないでしょうか。そして、その気持ちをお忘れることなく持ち続ける事は大切であり、それが、親族としての心の原点になり太い切れない絆となると思います。

その時の気持ちを忘れることなく親族の連携をとることは昨今の世情の流れから考えても大変重要なことであると思います。儀礼、慣習等日本人の美しい文化を軽視する風潮の中で、親族、家族が一つになる事は、この素晴らしき日本の文化の継承に不可欠であり、原点であると思います。そして、死んだ人への恩返しであり、生まれてきた人への役目であると思います。

(三重県 多度大社 禰宜)

私の人生楽しみ憲章（八ヶ条）

松 本 亮 次

私は今八十二歳になります。この年になると人間の行先を判ずることが出来るようになった感じがいたします。時に他人に意見を言えるようにもなりました。「私は八十二年の人生経験から言っているんですよ」と言うのと、「そうですねー」と納得してくれます。

この世は余りに情報が多すぎる。勉強するほど分らなくなる。うつ病になるのも不思議ではない。「だからどうすればいいの」という問いに答えて、私の八十二年の人生を振り返って、根本的に「何事も神は総て見ていらつしやる」と思えば、誰も見えてくれない。誰も誉めてくれない。と世に言う「馬鹿らしい」という不満は湧いてきません。人生が楽しいという一語につきます。そこでまとめたのが「私の人生楽しみ憲章八ヶ条」であります。

第一条は「笑顔とあいさつで楽しみます」

若者に言います。「これは人生の切札です。こころのこもった笑顔とあいさつが出来れ

ば、最低飯は食えますよ。逆にこれが出来ない人と人に相手にされません。最悪は結婚もできないでしょう」と。

第二条は「会話と団らんで乐しみます」

人嫌いは貧乏性です。認知症になりたくなかったら会話と団らんを求めなさい。

第三条は「競争ではなく助け合いを乐しみます」

この世は競争ばかりです。小泉元総理は競争すれば人間は進歩し、生活はよくなると豪語されました。まるで競争が美德であるかの如く。世間の風潮に流されてはいけません。競争の窮極は破滅です。相手を倒す。戦争です。競争は美德ではありません。勝つ事のみが目的です。競争心の強い人は他人に嫌われます。世に言う切磋琢磨というのは助け合いです。競争ではありません。

第四条は「若者よ、出世ではなくやり甲斐を乐しみましょう」

人間出世を追うと、それが目的になります。上司に対してゴマスリ人間、米搗バツタと

なつて、下には威張る最もイヤなタイプとなります。家では奥さんから「あなた、役付はまだ来ないの？」など言われ、家に帰りたくない。酒の力で帰るか、ホームレスにでもなりたいと思うかもしれません。「俺は誰にも負けんことをやっているぞ」とやり甲斐を求めよ。自分に誇りを持って。そうすれば出世はついてくる。出世は追うものではない。出世はついてくるだろうと勝手に決めなさい。

第五条は「神の造られた自然を楽しみます」

世に「人間到る処青山あり」という諺がありますが、これは志もないのにただ都会に出れば道が開けるというものではありません。人間になくてもならないのは癒しです。癒しの最たるものは自然です。春の繚乱、夏の蝉時雨、秋の紅葉、冬の雪景色、四季折々の癒しに恵まれた日本列島こそ、神の造られた自然そのものです。この自然を忘れて、敢えて都会のコンクリートの中に飛び込むことにはないのです。都会の無機的な「箱」の中で仕事も退職して年をとると何に癒されるのですか。ペットの癒しには四季のような変化はありません。恐ろしい認知症という化物に喰われてしまうのですよ。福祉は政治経済の産物です。これは時に急変します。特に政権交代ともなると尚更です。個人の力ではどうするこ

ともできません。若い時期は短い。「少年は老いやすく家庭（学）は成り難し」老いて気がついて遅い。老後は国家が保障する、家族など無用であるという社会主義理論に幸福はありません。自然の豊かな田舎で家族と力を合わせ、家族の愛に癒されて生きる事が窮極の幸せなのです。

第六条は「私は世のため人のために尽くして楽しみます」

この理念と実行はストレス解消の根本です。即ち相手が何をしてくれるのか。夫が、妻が、何をしてくれるか。親が、子が、何をしてくれるか。と相手にサービスを求める。国が、県が、市が、地域が、何をしてくれるか。と自分に都合のよい行政を期待すると不満ばかりが募ります。当然です。自分の思い通りにはなりません。これが今日の自己中心主義という病気です。ストレスがたまり、不満が爆発。それが自己、家庭、社会を破壊します。だから相手に求めるのではなく、自分から相手に尽くすのです。国家に対して自分が出来るか、地域に対して何が出来するかを考え、努力しなければなりません。あいさつでも相手がすれば俺もしてやるというのでは、何時までたってもよい人間関係はできません。人生総て先に尽くすこと。お互いに尽くし合えば楽しくなります。敬神生活の綱領は

素晴らしい達眼ですね。

第七条は「私は祖先の子を育てて楽しみます」

子供は自分達が生んだ子供でも、遙か昔よりDNAが受け継がれてきた祖先の預りものです。子供を粗末にした者は必ずその罰を受けます。即ち子供は神の子です。何にも勝る宝です。よい子育てをした者は必ず幸せな人生を送ることができます。よい子育ては日本の伝統的な子育ての中にあります。

第八条は「愚痴やねたみを捨てて楽しみます」

愚痴というのはよくこぼします。しかしこれは煮ても焼いても佃煮にしても食えない。ねたみも百害あって一利なし。ねたみあるところに発展なし。足引っ張りのイヤらしさ。これは捨てることしか方法はありません。

この八ヶ条は神の教えて下さった道であり、楽しい人生のために必ず役立つと信じて人々に話しています。

神樂舞と私

宮 本 優 子

本日は、神樂舞について少しお話したいと思います。

現在、当神社では秋の例大祭に式典と御幸祭の出発前とで、二回小学六年生の子供さん四名で「浦安の舞」を舞っていただいております。

天地の 神にぞ祈る 朝なぎの

海のごとくに 波たたぬ世を

という詠です。

この意味は「天（あめ）」とは天（てん）、すなわち宇宙、高天原を指し、「地」は地球を指します。宇宙の神様、地球の神様、朝のおだやかな海のように、世界が平和でありますように、心がおだやかでありますようにと、願いを込めた祈りの舞であります。この「浦安の舞」は、皇紀二千六百年記念に多忠朝先生が作られた曲です。

この舞のほかに「豊栄の舞」や宮司の舞う「旭日舞」、あるいは一曲で舞方が四十六種く

らいある「浪波神楽」など、又、地方に伝わる様々な神楽舞があります。

この神楽舞の起源は、「天の岩戸開き」の神話にまでさかのぼります。天照大御神の弟、須佐之男命が数々の狼藉を働いたため、激怒した天照大御神は天岩戸に隠れてしまわれ、世の中は真つ暗になり、悪神がはびこり出しましたので、八百万の神々が智慧をしばらく引き出す作戦をとります。

「この世は、すばらしい神が現れ、世を治めてくれる」と申し、

「ああ、楽しや楽し」

とお酒を飲み、天宇受売命が木枝を取り踊ったのが始まりとされています。

この岩戸開きの神話は、私達に一人一人の個性があり、役割がみな違うところにある、その力をうまく組み合わせ、事が成り立つのであるから、すべての人が主役である、自分の持分を精一杯がんばりなさいと教えてくれているように思えてならないのです。皆さんは、どうお考えになるでしょうか？

私は子供達に舞を教える時、「一郎さん」「二郎さん」と呼びます。

「三郎さん、ここはあんたが主役。ここはしっかり覚えて。皆は三郎に合わせて」

という調子です。役割があるからです。私も子供達からたくさん事を教えてもらいます。その中で一番強く残っているのが、直霊心であります。

数年前の大雨の秋の例大祭のことです。

この祭りこそ宮原神社の岩戸開きであり、宮原町の岩戸開きになったと思うのであります。

朝から雨がパラつき、昼ごろから強くなりました。子供神輿や各地区の山車が集合している中、総代達の協議の結果、お渡りは「中止」となり、その旨を伝えるべく参集所に行きますと、巫女達がティッシュペーパーをまるめてたくさんのテルテル坊主を作り窓に下げて、

「雨が止みますように……」

と祈っているのです。胸が痛くなるのを抑えて、

「中止ヨ」

と言うと、

「イヤじゃ」

「私達、舞うんヨ」

「雨でも舞うんヨ！」

私は、

「風邪引いたらアカンし…」

と言う。

「おばちゃん、人は神の子やろ？それに、舞ったら神様喜ぶんやろ？私ら神様に喜んでほしいんや」

「神様、一緒に舞うんやろ？風邪引かんヨ。神様も一緒やもん」

「それとも、おばちゃん嘘ついたん？」

「千早濡れたらアカンし、千早着やんとするから舞わして」

「このままするから！」

私は、返す言葉がありません。

その時ふと外を見ると、雨が止んでいるのです。

「今や！」と思い、すぐ準備をし、巫女の舞が始まりましたが、又すぐどしゃぶりの雨になつてきました。しかし、巫女達は舞を止めません。白衣装のまま落ちつき、おごそかに舞っているのです。

それは、とても優雅でした。

周りの人達を見ると、傘もささずにジッと見入っているのです。目から涙を流している人達もいて、胸がつまりました。

横から青年団の人の声が聞こえてきました。

「小学生にあそこまでやられて、わしら出やんかったら一生の恥やなあ」

「おばちゃん、わしらも舞わしてやあ」

巫女舞が終わるとすぐ、獅子舞が始まりました。そして、各地区五台の山車の演奏が始まり、

ピーヒャラ ピーヒャラ

雨の中にぎやかになり、総代長が

「お渡し止めるわけにはイカン」

と言って、号令をかけました。総勢二百五十名の行列が、有田川のお旅所に向かったのです。帰って来るまでには五時間かかります。

全員歩いて帰ってきました。子供の親御さんは車で迎えに行ったのですが、子供達に断られたそうです。誰一人風邪を引いた人はいません。

この祭りを機に年々盛り上がって、今では、町が心一つに出来るのは祭りしかない。

「わしらから祭り抜いたらアカンなあ」

と言われるようになり、未来の子供達に残して上げられる財産は心や、祭りを通じて、心を作ってあげよう、と考える氏子さんが多くなってきたのです。

この小学六年生の巫女さんから始まった岩戸開きは、昨年で笛を習う子供達が百人を越し、夏休みが始まると、祭りまで毎日が練習日です。氏子の宮原雅楽部も作られ、農作業の傍ら「越天楽」を練習、祭りの式典は生演奏です。又、今年は「多喜会」が発足し、小学生低学年の獅子舞を作ろうと、四月から毎夜公民館に集いすべて手作りされ、後は振り付けを考えるだけになっているそうです。

明治天皇御製に

いその神　ふるきためしをたずねつつ

新しき事を定めん

とあります。古き文化、風習を守りながら、新しい文化をも創っていく事の大切さを教えられます。

物事すべて必然であります。

過去がどうであろうと、目の前の事柄をすなおに精一杯頑張つて生きる事を、神道では「惟神の道」といいます。「惟神」に生きてこそ、物事の岩戸開きが出来ると巫女が教えてくれました。

自分の心の岩戸開き、家庭の中の岩戸開きを、ぜひしていただきたいと思います。

(和歌山県 宮原神社 権瀬宜)

「イセヒカリ」と限界集落

佐 古 建 彦

平成二十二年神宮神嘗祭「献穀米」として奉納される「イセヒカリ」のお田植え祭に参列頂き有難うございました。

本日の祭員七名、怜人（雅楽奏者）七人、裏方七名、総勢神職二十一名は、岩国支部の有志の方の奉仕でした。第二部の田植式には、早乙女二十名、田男七名、地元的神楽団十五名の特別参加、そして四十名の来賓の方々のご出席でした。参列された皆様から「素晴らしいお祭りでした」との、お褒めのことば。「お祭りがあの様に厳肅なものとは初めての体験。鳥肌が立った」と申され、それを聞いた私も鳥肌が立ち嬉しさが込み上げて来ましたよ。

しかし、当事者の私達にとっては、反省・反省、また反省です。来る九月二十六日の「拔穂祭」はより厳肅で皆様に「祭り」の凄さを味わって頂ける様、今から準備して参ります。御都合のつく方は是非参列して頂けると嬉しいです。

本題に入る前に、今上陛下のお写真を皆様に紹介させて頂きます。昨年九月末頃の宮中の神田での陛下のお稲刈りです。神社新報に御願いして、宮内庁から特別に許可を頂いて、送って頂いた写真です。私の一生の宝物です。それでは本題に入りますが・・・。

「イセヒカリ」について初めて聞く方も多少おられる様ですから、かいつまんでお話しします。

○奇跡のお米「イセヒカリ」とは

平成の御代替りに時を合わせたかの様に皇室の祖神、天照大御神をまつる伊勢の神宮の神田で新種のお米が生まれました。

神宮の祭りに欠かせない稲を作るのが神田ですが、平成元年の秋、伊勢地方を台風が二度も襲いました。当時、神田の管理責任者をされていた森晋氏によれば、神田のコシヒカリは無残にもべったりと倒伏したそうです。倒れやすいのがコシヒカリの最大の欠点です。ところが、水田中央に悠然と直立する稲株があることを、台風一過の朝、森氏が発見しました。コシヒカリより稈かんが太く短い、しかも成熟するにしたがつて、見事な黄金色になりました。

平成六年の秋に山口県農業試験場の元場長岩瀬平氏いわせへいの所にこの稲の評価とお米の分析依

頼が参ります。山口県内の稲の専門家は感嘆の声をあげたそうです。第一に食味値が高い、第二に収量が多く多収性である、第三の特徴は耐倒伏性・対病性が強い、第四の特徴はタnpak含量が低く酒米に適している、第五に極めて特異な遺伝特性を持ち、どうやらイセヒカリは「遺伝子が動く」らしいのです。良い事づくめの「驚異の稲」は平成八年一月「せいじゅうむえん聖寿無窮を祈念し皇大神宮御鎮座二千年を記念」して神宮酒井逸雄少宮司より「イセヒカリ」と命名されました。

平成八年秋の神嘗祭から神前にコシヒカリに代わり「イセヒカリ」がお供えされています。山口県神社庁と岩瀬氏は大切なお米を守るために、山口イセヒカリ会を設立して、イセヒカリの系統選抜・品種の固定化に取り組んできたのです。平成十四年に「イセヒカリ2号」を「原種」とする事を神宮の了承が得られました。翌年から山口県の青年神職会が原種の種籾の生産を、山口県の徳佐で毎年厳粛な神事を執り行つて、生産を続けているのです。（以上、イセヒカリ誕生と山口県神社庁との関わりを評論家斉藤吉久氏の講演録から抜粋しました）

この大切なお米で限界集落、——私はこの言葉は嫌いですが・・・——ともかく過疎化を止め、里山・棚田を守りたいと、酒井酒造の酒井佑氏と立ち上がったのです。岩国の錦帯橋

を「五橋」と申します、その五橋が商標で全国に名が知れた銘酒です。そこで、まず酒米として、生産してもらい、付加価値を付ける為に化成肥料は使用しない、農薬も使用せず、環境に優しい農法の農家に対して魅力の有る収入を保証します。

都会に出た人で定年を迎え、田舎に帰りたいけど・・・農業は経験ないので…。その様な人達を応援する「帰農塾」を同時に立ち上げたのです。

酒井さんとは「馬が合う」のです、何よりも日本の伝統文化を大切にしよう、戦前の日本人が持っていた「武士道」精神、目に見えない神さま、仏さまを敬う子供たちを再生しよう、美味しい五橋のお酒を傾けながら「イセヒカリ」プロジェクトがスタートして、本日のお田植え祭となったのです。

しかし、新しい事をやりますと色々な壁にぶち当たります。その時は、亡き父の「大祓いを神前で大声を出して奏じろ」の言葉を思い出し、「気枯レ」を祓い「ハレ」で元気に成り、又一步前進するのです。我々神職が大切に行っている「敬神生活の綱領」と云う指針書があります、僕はこの中の一、世の為人の為に奉仕し、神のみこと持ちとして世を作り固め成すこと、この件が好きなのです。高天原から親父がエネルギーを送ってくれているのでしょうか、何としても、自然を守り「治山治水」の原点に戻せと申しているのです。

日本人の原点は農耕民族です、稲作です。神道の原点は自然との共生・協和と考えます。お米を大切にして、神さまにはお神酒が必ず供えられるのです。そのお神酒をこのイセヒカリで造り、岩国の特産品として全国に販売するのです。この運動が広がる事により岩国の里山、棚田を守り、過疎化を食い止める事に繋がるのです。その運動をここ美和町の生見八幡宮のご斎田から始めたのです。

歴代の天皇さまが御自身で稲作を始められたのは、昭和天皇さまが始めてと思います。その天皇さまが崩御されたその年の秋、伊勢の神田「西八号田」に誕生した「イセヒカリ」は昭和天皇さまが「平成の斎庭の稲穂」として捧げられたと思うのは私一人では無いと考えています・そして、今上天皇さまは平成二年から御播種を始めています。これも偶然ではなく両天皇さまの大御心であると私は確信しています。

昭和天皇 御製（昭和二十九年）

新米を 神にささぐる 今日の日 深くもおもう 田子のいたつき

（天照大御神の神前に、新しいお米を神饌として奉納する新嘗祭の今日の日、農家の方々の苦勞に対し、深く感謝の念を思います）

そろそろ直会の準備が整った様です。今日のお神酒は酒井酒造さまがイセヒカ리를原料にして、木桶で昔ながらの造り方をしました「五橋」です。どうかお神酒を戴かれ神様の御神徳を受けてお帰り下さいませ。本日は本当に有難うございました。

(山口県 宇津神社 宮司)

見える物・見えないもの

上 谷 義 房

皆様、こんにちは。上谷義房と申します。こういった講演をするのは初めてですので、お聞き苦しい所もあると思いますが、ご容赦頂きたいと思ひます。よろしくお願いいたします。

本日は生活の中での目に見える物と見えないものについて、お話をさせていただきたいと思ひます。

まず、皆様に質問をしたいと思ひます。

「皆様はこれがなくて生活に困っているという物がありますか？」

皆様それぞれ意見はあると思ひます。真つ先に『お金』を思い浮かべる方がおられるかもしれません、今日は『お金』は抜きで考えてみてください。お金以外にこれがあればいいのにと、これがあれば生活が楽になるのにと想像されると思ひます。しかし、普通に生活をしていく分を考えてみると、特にないと答える人が多いのではないのでしょうか。

また衣・食・住はすべて揃っていると感じる方がほとんどだと思います。周りは物で満たされ、必要な物はすべて手にしているという環境です。家、車、パソコン、食事などすべてが揃っている中で生活をしているのです。それが現在の日本だと思っています。

逆に世界の発展途上国と言われる国に目を向けると寝る場所もなく、食べる物にも不自由している人達はたくさんいるのです。確かに、こういう人達と比べると日本の国民は恵まれています。演題にもしておりますが、目に見える物ですべてを満たされ不自由することなく生活している私達もいれば、目に見える物でさえ手に入れることができずに生活をしている人達も世界にはいるのが現実です。

ほんとうにこれだけで日本人の今の生活は満足なのでしょうか？

物質的な豊かさだけがあれば幸せだと感じるのでしょうか？

いろいろな要因があると思いますが、平成二十年版の国民生活白書によると日本人の生活満足度は年々下がっているようです。データとして、経済的、物質的な豊かさだけでは満足度、幸福度は上昇しないと示されているように思います。

では、それ以外に何があれば人々は幸せを感じるのでしょうか。実際に生活していると目に見えないものによって、人々の心や内面を支えている部分はたくさんあると思います。

それは周りの人達からの信頼や信用、周りの人達からもらう愛情や気配り、やさしさ。私は現在三十歳、独身で愛情を一番欲しております。しかし、なかなか上手くいかないのが現状ですが…。

やはり、これらが人の心を支え、生活をより満足のいくものにしていてと思います。ですので、目に見える物で満たされ不自由がなければ幸せかというところではないと思います。

また、私達人間の命についても考えてみてください。人間はなぜ生きていけるのか。私達の命は自然の恵みによつて成り立っているのです。目には見えない空気や太陽、月の光、目に見える物では私達の食物となる動物や魚など、自然界すべての支えによつて生きています。自然の恵みに感謝しなければなりません。これを人間はもう一度認識しなければならぬと思います。

同じように神様もお姿は見えません。見えないものの一つです。しかし神様はいつも皆様の側で、またいろいろな所から見守つてくださっていると思います。そして、導いてくださっていると思います。

太古の昔から自然界で起こる地震や雷、大雨等は人々を恐怖に陥れてきました。これは

現在も同じです。その時人々はお姿の見えない神様にお祈りをし、守っていたかどうかしました。自然界の脅威ほど怖いものはないということです。しかし人々には神様のお力をお借りしたい、お祈りをすれば神様は守ってくださいという考えが心のどこかにあるのです。それは昔から現在までずっと続いている自然な考え方なのです。新年を迎えればまず神様にご挨拶をします。初詣ですよ。今年一年も無事に過ごせますようにと。また、叶えてもらいたい願ひ事がある時にもお参りをします。ただこれは神様のお力だけではなく、まず自分自身の努力があつてこそ叶えていただけるというのを忘れてはいけません。テレビなどでよく耳にする『人事を尽くして天命を待つ』という言葉の意味、そのものだと思います。

このように人々は人生の内に何度も神様に又神社にお参りに行くのです。目には見えな
い存在であつても、人々の心の部分を支えてくださる、守ってくださいる存在として。また
お力をいただき、導いてくださる尊い存在として。難しく考える必要はないと思います。
日本人が意識しなくても元々持つている考え方なのですから。また、途上国の人達も物質
的な豊かさはあまりないのかもしれませんが周りの人達のやさしさや、それぞれの人達が
信仰する宗教の神様のような存在や教えを信じる事が支えとなり毎日を生きているので

はないでしょうか。

これからは私達神職も含め、日本人は神様はいつも見守ってくださっているという意識を持つことが大切だと思います。その神様がおられる神社にお参りに行くときは鳥居をくぐればそこは神聖な場所であるということも忘れてはならないと思います。

目に見える物で満たされた生活の中で、神様のお力や自然の恵みのような目には見えな
いものに少し気持ちを向けてみれば、何か感じることもあるのかもしれない。

これからは私達を見守ってくださる神様の存在、周りの人達を大事にしていく気持ちを
忘れずに生活していかなければならないと思います。また今を不自由なく生きていけるこ
とに、もっと感謝したいと思います。

皆様も少し考えてみて下さい。

ありがとうございました。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

大和色

鈴木明子

古来より日本人は優れた感性で、自然が醸し出す様々な色を表す言葉を紡いできました。その美しい表現は、今や外来語、レッドとかピンクなどの言葉に取って代わられています。それは大変なことで、大和色の表現が無くなるということとは、その感性も失われる、言うなれば繊細な感性から単純明快な感性になってしまふ、ひいては他人の心を思いやる深い心が浅くなるという由々しき問題にまで発展していくのではないかと心配されます。そこで、移りゆく自然のそこはかとないう色を愛し、自然のもつ命の輝きや目に見えぬ神の働きを感じ取った日本人の魂の繊細さ、豊かさを色の表現より探っていきたいと思います。と言いますと、皆さんは日本を代表する桜の色からと思われる事でしょうが、違います。そこはここ萩市の大会ですので、萩市にまつわる色からお話したいと思います。ここ萩市はなぜ市の名前が萩なのか、普通誰でもが萩が生えていたからと思われるでしょうが、実は説が二つあるそうです。

一つは、この萩市に笠山という山がありまして、そこは椿の群生林だそうです。そのツバキ→ツハギ→ハギと音がつまつてできたのではないかと言う説で、現在も笠山は椿の名所だそうです。もう一つはハギが生えていたからというものですが、萩が群生している所があつたかというところではないようで、私としては前者の説にロマンを感じます。萩市が誇るかの有名な幕末の思想家、吉田松陰や彼を取り巻く維新の志士達が、江戸や都へ上る途中に、笠山の真つ赤な椿を見て、燃ゆる思いを新たにしたかも知れません。

さて、日本人の愛した色としてまずは、その椿の赤、お日様、天照大神様の太陽の赤があるのでは、と染色家吉岡幸雄さんが『日本人の愛した色』という本のなかで書いています。生命の根源の色であり、太陽の色である赤、その色を身に纏われた方がおられます。天皇陛下であらせられます。

「黄櫨染御袍」、禁色とされており、天皇陛下がご即位のとき、また宮中の重儀の時だけにお召しになられるご装束です。この御袍の黄櫨染は、櫨の木の黄色と蘇芳の赤とを掛け合わせた一見、金茶色なのですが、太陽の光を浴びると赤茶色に変化する、即ち金茶色の内側に美しい日本の太陽の色、茜色が浮かび上がるそうです。

茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

と万葉時代、額田王が天武天皇に詠んだ歌にうたわれている茜色です。

天皇陛下は、万物を照らします太陽をお召しになられてその命を頂かれ、私達に分け与えてくださるということで、

昭和天皇の御製

さしのぼる朝日の光へだてなく世を照らさんぞ我が願いなる

という御願いをいつも持つていてくださるのです。

この禁色の黄櫨染は、二代將軍徳川秀忠が自分も着たいとして、お抱えの染め師に染めさせたが、どうしても作れなかったと言われています。

皇太子殿下の禁色の「黄丹」おうにの色も昇る旭の色を表しています。飛鳥時代に「朱華」はねずと呼ばれるた色で黄色味の強い朱色です。朱色にはこの他、真朱まさほ、洗朱あらいしゆなどという表現もあります。赤にはこの朱色の他に丹色、茜色、緋色、紅色、とあり、それぞれに微妙な色の違いから美しい色表現がなされています。大和言葉の繊細さには驚かされます。

例えば、桜色が薄れしつとりとした色になったとき、昔の人は「桜鼠」さくらねずとよび、愛おしみました。移りゆく季節の中で色の変化を紡いだ言葉です。

私達日本人は、落ち葉にさえ微妙に変化していく色を感じ取り、朽葉、黄朽葉、青朽葉

と呼び分け、清々しい竹を見ても、若竹色、青竹色、老竹色と言葉を紡いでいます。

藍色は四十八色に変化し、粹の文化、ジャパンブルーとして世界が注目しています。

自然の色の美しさを組み合わせ、平安貴族は襲色目という独特の美を創りだしました。

そんな日本独特の美を世界に売り出して成功しておられる方に堀木エリ子さんという女性がいいます。和紙で世界初の緞帳を制作された方です。この方は日本の美は移ろう美しさで、和紙の障子を通して光りが移ろってゆくその穏やかな美しさを、世界に発信していきたいと二十八才で会社を起こされました。

混迷を深めている今の時代だからこそ、私達は、吉田松陰の「かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」の歌のように、大和魂を、そこから生み出された大和色を、日本人の感性を大切にしていきたいものです。

（滋賀県 立木神社 権禰宜）

五円で良い縁

黒田明司

私がお奉仕いたします四山神社の祭りでは、参拝者が福銭と呼ばれる五円を借りていき、翌年には御礼返しに倍額以上を返して、又新しいお金を借りていく習慣があります。

この信仰は江戸時代からと思われませんが、明治、大正の時代は一銭。昭和の戦時中には死線を越えるということで五銭を借りて千人針に縫い付けていました。昭和三〇年代頃から現在の五円になりました。五円はご縁に通じ、神様と金運にご縁があり、商売繁盛、縁結び、家庭円満にご利益があり、穴の開いているお金は望みが通るといわれ、春秋の祭りには多くの参拝者が借りていくわけでございます。

数年前でしょうか、長崎県からお参りに来られた方が四山神社は五円が有名だから、直径三メートル程の石の五円石を奉納したいと申し込みがありました。そんなに大きいものをどうしたのだろうか。初めてお会いする方でしたので気持ちも纏まらず、取り敢えず、住所と名前、電話番号を伺っておき数年が過ぎました。

平成十七年に宮司になりましたが、炭鉱で栄えてきた街も閉山と共に人口は減り、この不景気の時代に益々活気がなくなりました。

長年親しまれてきた五円玉で参拝者や地域社会の人々に明るい希望が持てることはできないだろうかと考えました。

五円石奉納の話を思いました。宮司になつてはじめての寄付事業でした。長崎の石材店に現物を見に行きました。道路沿いには直径三メートル程の立派な五円を模った石像がありました。現物を見て総代さんに相談して、四山神社にふさわしい参拝者に親しまれるお宮に近い参道の横に直径一メートル、五円の穴の部分は台座から150センチの目の通りの高さにし、先の見通し良い大きな五円石建立を計画しました。

そしてこの機会に五円玉のことを、インターネットで調べてみました。五円玉は黄銅、真鍮で出来ています。昭和二十四年、硬貨を発行する際に軍が使用していた大砲の薬きょうなどに使われていた黄銅を再利用して作られました。平和に暮らせますようにという願いがこめられた材質を使っています。直径は二十一ミリ、重さは3.75グラムで一匁。表のデザインは稲穂の茎が三本に二十七粒の粍がつき農業を表しています。横線の十二本水平線は水を表し水産業、歯車の数は十六個で工業を表しています。裏の双葉は林業を表し

ているといわれています。

戦後の昭和二十四年、日本の国が平和で産業が豊かになりますようにという思いを込めたデザインになっています。五円玉には平和と産業繁栄の思いが込められていることを知り益々価値が有ることが解りました。

お陰様で昨年平成二十一年九月に皆様の浄財に依りまして五円石の台座に福授銭と刻み、氏子崇敬者の皆様と共に竣工の除幕式を奉仕することが出来ました。

お祭りでは神様とのご縁を求めて、福銭と呼ばれる五円を借りる人、返す人で境内は賑わいます。五円石を始めて見る参拝者は四山神社に相応しい立派な物が出来ましたねと喜んで、手を合わせる人、しっかり撫で回す人、穴に顔を入れたり、家族で写真を撮る人様々です。参拝者はそれぞれ神様と良いご縁を結び、明るい見通しの良い希望を戴かれたのではないのでしょうか。人々の笑顔が印象的です。

私達は今、景気回復、雇用拡大が望まれる世の中に、どうやって生きていくべきか判断に迷うときがあります。そんな時に、五円玉をお財布から取り出しぐっと握り締め五円玉に込められた願いを思い出しましょう。

そしてお宮に行きましよう。二拝二拍手一拝、お参りが済みましたら、じっと拝殿を見

渡ししましょう。そこには敬神生活の綱領という額縁が掲げられています。「神の恵みと祖先の恩とに感謝し明き清きまことを以って祭祀にいそしむこと」とあります。私達の生活も明るい清らかな正しいまことの心で生活しなさいということを教えてくれます。

明治天皇様のお歌には

いかならむ　ときにあふとも　人はみな　誠の道を　ふめとおしえよ

とお歌いになられています。

私達の生活は嬉しいとき、悲しいとき、困難に直面するとき、色んな時があります。そんなときに神様の御心であるまことの心で対応するならば、きっと良い結果があります。これを神様のご縁があつたというのではないのでしょうか。

神社には長い歴史があり、夫々の時代に先人たちが培ってきた信仰の力があります。今後とも神様と皆様との大きなご縁、良い御縁がありますことをお祈り申し上げましてご挨拶に替えさせていただきます。

(熊本県　四山神社　宮司)

大志

芦 原 高 穂

萩の里に立ちますと、やはり幕末にあつて、我が国の行く末を憂いつつ多くの志士を育てられた吉田松陰先生を思い浮かべるのは私だけではないと思います。

今や、大河ドラマで龍馬伝が放送され、明治維新が注目を集めております。

松陰先生の御事績をたどる時間はありませんが、浦賀に來航した米國船への渡航失敗により、野山獄に投ぜられた中で行われた、先生の『孟子』の講義録でありますこの『講孟箚記』を手にする機会を得まして、もっと早くにこれを読んでおけばよかったと思つたわけです。時代を超えた警世の書であり、混乱した今の世を見るにつけ、ますます緊要度が高ましていると思われたわけです。

入獄当時の野山獄には十一名の囚われ人がいて、最長の者は四七年にも及び一旦入獄すると生涯出獄は許されない状況で彼らは前途に何ら希望を持ってない有様でした。

そうした中で、囚人の教化を目的として松陰先生は孟子の講義を通して皇國の皇國たる

所以、人倫の人倫たる所以、夷敵の憎むべき所以を正に至誠と親切を以て説いたのであります。

講孟劄記卷の一の中に、

今且つ諸君と獄中にありて学を講ずるの意を論ぜん。今已に囚奴となる。又人界に接し天日を拝するの望みあることなし、講学せつびして成就するところありと雖も何の功効あらんと云々是所謂利の説なり。仁義の説にいたりては然らず人と生まれて人の道を知らず、臣と生まれて臣の道を知らず、子と生まれて子の道を知らず士と生まれて士の道を知らず豈に恥ずべきのいたりならずや。

そして、「明日に道を聞けば、夕べに死すとも可なり」と実行の効果のいかんを考えることなど取るに足らぬ事であり、この志にいたらば初めて孟子を学ぶ事ができるとしております。

また有名な湯武放伐についても「凡そ漢土の流儀は必ず傑出した人を選んで是を指導することを命ずる、しかし、その人物がふさわしくなければその人をその地位から引き下ろす、天が引き下ろしたものを討つのであるから放伐ということに何の疑問を抱かぬのである。

我が国はこれと全く違っている、天照大神の御子孫が天地と共に永遠にましますのであって、そこにこの大八州が開かれたのであり、天皇が末永く守られるものである。

それ故に日本国民たるものは天皇とよろしく喜憂を一にして他念を持つべきにあらず」として、湯武放伐の思想とは一線を引いて、批判したのであります。

講孟簡記の中には、小国とのつきあいは徳を持って行い、大国には相手の事情を察しながらつきあうべしとして、凡そ古今東西他国の侵入により滅亡するよりも国内が分裂状態となつて自滅することの方が多しとしているのです。

現下の我が国の状況を見ると、正にこの滅亡の縁に立っているのではないかと背筋が寒くなるのを禁じ得ません。

この本には現代にも通じるような示唆的な事が多く書かれており、時代を超えた警告の書であると思います。

学問的系譜を見ると、叔父である玉木文ノ進を忘れることができません。有名な松下村塾はこの玉木文ノ進が天保十三年建てたもので、十三歳の若き松陰先生もこの塾生の一人でした。

熱血漢で烈々たる姿勢で門下生を指導し、その厳しさたるや私語はもとより頬杖や視線

を外に向けたら平手ではなく拳骨で殴りつけという話も伝わっており、庭先の向こうにある崖から若き松陰先生も放り出されて気絶したこともあると聞いております。

元々吉田家は毛利藩でも山鹿流軍学師範を勤め、熱血教育者でもあった義父大助は二十九歳で逝去されましたが、義父の書き残した王覇おうはの弁わきまを学びます。この場合、王とは天皇であり皇室を指し、覇とは幕府を指します。叔父玉木文ノ進は厳しく鍛え、十五歳にして名前を松次郎に改めました。藩主敬親公の御前で孫子虚実遍を講義し褒美の品を受け取り実家に帰宅し、「玉木の叔父が茲におられたらどれほど喜ばれたであろう。」といったところ実の父親である百合之助は、言下に「兵学者の跡継ぎは兵学に詳しいのは当然のことよ、従来の学問を弄ぶのではなく、国を救うほどの全く新しい学風を開きたい一切の策謀を排し、一筋の学風を打ち立てたいといったはずだ」と厳しく叱正されたといえます。

さて、松次郎の前は大次郎で先生はこの吉田家を継ぐものとして学問を修め十一歳で藩主敬親公御前で武教全集を講義、その内容に多くの藩士が大いに期待したといえます。

いま触れました実の父親である杉百合之助は下級武士ながら、尊皇の志高く、禄高二十六石の微禄で侍とは名ばかりで農作業に追われる暮らしぶりながら常に書物を横に置き、勉学を疎かにすることなく、兄梅太郎と次男である松陰先生に四書五経などを農作業

をしながら暗記させました。

松陰先生は生まれたときの幼名を虎之助と申しまして、母が滝といって極貧に喘ぐ杉家へ文政九年嫁がれました。

こうした松陰先生の思想的背景を考えますと、やはり生まれ育った家庭に関心を向けざるを得ないわけであります。

当時学問好きで江戸詰でしたが暮らしの糧を切りつめて蔵書を集めていた杉家が国元へ戻った後、火災に見舞われ、それら財産でもあった蔵書は灰燼に帰した上、暮らしは一変して、極貧の生活を余儀なくされ、当時の当主であった杉七兵衛は失意の内に他界し、後を継承した百合之助は侍とは名ばかりの貧農の暮らしぶりでありました。

そこへ養父の薦めで嫁いだのが、毛利藩でも下級藩士の出身の滝さんでありました。

当時の杉家は、病床の義母の介護とこの母の妹が子連れで同居し、この妹も病床につくという、これ以上の不運は考えられないような状況でありました。

そうしたなか滝は夫百合之助の口癖であった「神州清潔の民」という言葉に触発され、それまでたまにしかわかさなかつた風呂を毎晩沸かし家族がこれによって疲れた体を癒す事を励行したのであります。

燃料の薪は近くの山で集めたので、手間をかけるだけで経済の負担はありませんでした。当初儉約を旨としていた夫は更なる負担を増す事だけに当初反対しましたが。

平素口にしていた「神州清潔の民」という言葉に反対する事もできずこれを受け入れ毎夜風呂を沸かすことに同意したのでした。

これにより夫は、一日の疲れを癒し病床の義母も清潔を保ち、嫁ぎ先より身を寄せていた義妹も体調を回復するという効果が徐々に現れたのでした。

そうした環境の中で長男梅太郎そして次男虎之助が誕生し、都合七名子宝に恵まれたのでした。

佐古幸嬰先生が以前話された事ですありますが、女性是一家の妻であり母でありそして太陽でなければならない、滝さんは正に一家の太陽となられたのでした。

(北海道 旭川神社 宮司)

桃太郎はなぜ柿太郎でないのか

河本文夫

「ボーヤ良い子だ寝んねしな〜今も昔も変らずに〜」で始まる「まんが日本昔ばなし」皆さんもご存知。TBS系で放送されたテレビアニメです。

私この歳になって、ネットの配信サービス、ユーチューブで懐かしくて時々見ております。これらを見ていますと、日本の昔話の特色として、自然と動物のかかわり方が深いことが挙げられます。自然の恵に感謝し、また動物が人間と会話をしたり、教訓や恩返しなどを通して、共に助け合いながら生活している様は、神道の精神そのものでございます。

さてさて、中でも有名で、日本昔話の横綱といえ、子供からお年寄りまで、みんなご存知「桃太郎」。

「桃太郎」、そんな昔話はもう忘れたと言われるかもしれませんが。そりやそうでしょう。いやいや本当に高齢者社会ですね。こちらのお社の宮司さんも高齢者。講演している私も前期高齢者。お参りになっている皆さんも多くが高齢者。「桃太郎」そんな昔話あったかな

と言った感想でしょう。それでは、昔を思い出して始まり始まり。

昔々、あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんは、山に柴刈に、お婆さんは川に洗濯に行きました。すると上流から、大きな桃が、ドンブラコッコ、ドンブラコッコ。お婆さんは、あまりにも大きな桃なので、家に持って帰りました。早速切ろうとすると、真つ二つに割れて、中から可愛い男の子が生まれました。お爺さんとお婆さんは大喜び、名前を桃太郎と名付け大事に育てました。その頃村には鬼が出没して、村人は大変困っていました。それを知った桃太郎は、お爺さんとお婆さんに恩返しにと、鬼退治に出かける事にしました。

と、こういう展開ですが、さてさて、何故「桃」なのか不思議です。子供の頃、何で桃なのかな？柿でもいいのに。ましてや林檎でもと、思った方は多いと思います。調べてみますと、やはり中国の文化の影響があります。中国では、古くから桃が「仙果」として神仙の貴い果実として位置付けられ珍重されております。また古来、桃には邪気を払う力があるとされ、桃の節句（三月三日）に桃を飾るのも、桃に邪気を払う力があるとされたためであると考えられます。でも何となく納得したような、しないような。

私が奉職しております小さなお社は、神主二人も要りませんので、父が存命の頃は、企

業に勤務しておりまして、所属事業部が北京生まれの中国人の通訳を雇っております。ところがなんとその奥さんが、島根県の社家の出の方であり、その関係から大変親しくお付き合ひし今もお付き合ひしております。彼との経緯等お話すると面白い話なんです。又の機会に譲りまして、あるとき、出張先で食事をしながら「桃太郎」の話になりました。彼が言うには「桃はね、中国では子宮を意味するのよ」と、思わず今までの疑問が吹っ飛ぶ解答を得ることができたのです。なるほどそうか、子宮という意味もあるのか。そうです。ね、桃はその色合ひ、形、なにか女性のお尻を連想させますし、「クレヨンしんちゃん」は「桃」とくれば、すぐにおねえさんのお尻と連想するでしょう。なるほどそうか、これで桃太郎の長きに渡る疑問が解決されたのです。

実に美味で、その匂いといい、形といい、納得でございます。徳のある人の元には人が集まるのたとえの言葉に「桃李不言下自成蹊」と、桃は何も言わなければ自然にその魅力に引かれ人が集まり道ができるとまで言わしめる桃でございます。

さてさて、話は展開し、鬼退治に出陣と展開するのですが、桃太郎は家来を連れて行きます。この家来ですが、何故、猿、犬、雉なのでしょう。

その前に、理解しておかないといけません。この物語は大変よく出来てお

りまして、この物語の中で、鬼が住むという「鬼が島」は、皆さんどの方角にあると思いますか？ 今日のご参拝の皆さんならすぐピンとききますね。そうです、鬼門の方向にあります。それでは鬼門は何故丑寅の方向かわかりますか？うーん難しい問題ですね。それでは鬼はどのような格好していますか？そうですね、金棒を持ち、頭には角。そして縞のパンツ、すなわち寅のパンツを履いています。角があるから、丑。丑にも角があります。そして、パンツは寅柄。まさに丑寅の方位となるわけです。そこでこの鬼門に居る寅に、對抗するには裏鬼門の動物を家来に引き連れていけばよい。頭いいですね、桃太郎は。そこで考えました。裏鬼門で頼りに成る動物、未申の方位で、となると未では役者不足。やはり猿でしょう。しかも陸上でゲリラ作戦は得意、これにまさるものは居ません。しかし、鬼が島は、海に囲まれております。そこで、海に強いすなわち泳ぎに長けた家来が必要。裏鬼門あたりでこれに相応しい動物となると、午未申酉戌の中では、犬掻きという泳法を持つている犬となります。犬掻き泳法、馬鹿にしちゃいけません。この犬掻きは中々の物です。さて桃太郎は、猿、犬だけでいいかなと念には念を入れて考えます。そうだ鬼が島の上空から偵察もいるぞ。となると空を飛べるのは酉しかいません。即ち物語のなかでは、雉と相成るわけであります。これで家来は揃いました。この三人の家来を連れて鬼

が島に鬼退治。首尾よく鬼は降参。目出度し目出度しとなるわけです。この話、我が国家に照らし合わせますと、猿は陸上自衛隊、犬は海上自衛隊、雉は航空自衛隊、まさに陸海空となります。国家の防衛に大変重要な組織です。

「桃太郎」という昔話、決して、戦争を肯定しているわけではありません。桃太郎と動物が我々の生きていく上での知恵を教えてくれていると思うのです。まさに日本の伝統文化の詰まった物語、本日は学校では決して教えない日本昔話でございました。

（山口県 宮尾八幡宮 宮司）

留魂

波多野學

神社界では、石井壽夫先生は昭和の吉田松陰だと云はれる方もられます。昭和二十年、兵役を解かれた先生は、五十鈴川で禊、神宮に平れ伏し、学者への道も嫁を迎へることとも決別し、「神州、嚴として神州たり」と神国の再建を誓ひ、郷里広島市の二葉山の山小屋に籠り、『古事記』『日本書紀』を只管熟読^{ひたすら}。竟^{つひ}には『古代の日本神道と新地球文化』と云ふ貴重な上・下巻の大著を遺されました。

昭和二十三年五月、占領軍GHQにより、昭和天皇様の戦争責任が取沙汰され、陛下の御留位懇願運動の呼びかけに、西日本の有志が、この松陰神社に集結、石井先生も馳参じました。

神道講演本『庭のおしえ』を遺された佐古幸嬰先生との出会いでもありました。この出会ひにより、石井先生は神社界での神道講演の道を開いたのであります。戦後の神道指令下の斯界にとつて、石井先生は慈母とも云へる佐古先生と共に大きな支へとなり、佐古先

生が度あるごとに「神様は見てござる」と云はれた言葉が今も耳に残つてをります。

その石井先生が『まさりて貴き神道』を出版され、神道講演の同志に「大ミソギして生れ変れ」と警鐘を鳴らされ、同志元本渡諏訪神社・靖国神社宮司大野俊康先生に宛られた書翰の「同志諸賢よ、日本の神道は必ず世界の宝となる。かたく信じてご健斗あれ」「わが魂は ^{たま}七たび生れて 墓すらも み代を憂ひて 雄叫ぶを聴け」と書された言葉がご遺言となりました。

この縁りの松陰神社で両先生の御霊祭が斎行されました。神道講演の原点に戻つた、魂を洗はれた清々しい気持であります。

吉田松陰先生が逝かれて百五十年が経ちました。松陰先生は文政元年のペリー来航に際し、将来の日本がどうなるのか、欧米列強の国々の亜細亜への有様を具さに視てをり、幕府の国策対応に不満でありました。

安政二年、鎖国時代とは云へ、外国渡航への禁を犯したと云ふだけのことで、十二月十五日、長州藩野山獄に一年二ヶ月にわたり、獄中生活を送ることとなります。獄中では、人の倫を解く孟子の講義を多く行つてゐます。父君百合之助、親族、長州藩においても、先生を大事に優しく接し、やがて病氣保養と云ふことで、生家杉家の三畳半一間に蟄居と

なっています。初代玉本文之進、二代久保五郎左衛門、そして三代目松陰先生の松下村塾です。「松下陋村へいそんなりと雖も誓つて神国の幹もととならん。」八畳一間、更に十畳半増築。僅かの期間ですが先生の講義がなされます。時に妹の婿となる久坂玄瑞十八才、高杉晋作十九才、山縣有朋、伊藤博文始め身分を問はず、多くの門人が集ひました。塾は門弟が自由に意見が云へる草莽の人材の集ふところでした。先生は「那波列翁ナポレオンを起して、フレーケード（自由）を唱へねば腹悶癒し難し」と云つてをります。将来の日本を見据ゑ、武士に限らず草莽の人材を求めたのであります。安政五年暮には「皆僕と所見違ふなり。僕は忠義をする積り、諸友は功業をなす積り」との言葉も残してゐます。

安政六年五月、長州に対する幕府は、先生を野山獄より江戸送りとします。大名家来の収容される伝馬町揚屋あげや入りとなります。

門人松浦亀太郎は、先生の肖像を心を込めて描き、先生自ら賛を入れてをります。今この松陰神社に大切に保管されてゐます。涙松での悲しい別れです。

かへらじと思ひ定めし旅なれば

ひとしほぬる、涙松かな

伝馬町で最後に書き留められた『留魂録』は密かに伝へられたのであります。重罪に

なるとは思ってもゐなかつたのでありますが、

安政元年外国に渡航せんと図り蟄居

海防論、外国船打ち払ひ論を唱へ

人心一致して天皇を奉じ

国事を尽す所信は

公儀を憚らず不敬の至り

と死罪となります。国がだうならうと、幕府を守ることしか頭のない幕閣には、先生の「国思ふ恋闕の心」は届かなかつたのであります。

親思ふ心にまさる親心

今日のおとずれ何と聞くらん

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも

とどめ置かまし大和魂

第二十六回神道講演全国研修大会同志の方々が魂の禊をせんと、この松陰神社に集ひました。戦後六十五年、穢れにけがれ、腐りきつた日本。神社界も他人事^{ひとこと}ではありません。

神国日本の文化と伝統、世界に比類なき歴史を築いてきた日本を守り抜かうではありません

せんか。松陰先生の魂を留どめ、御国のために頑張りませう。石井先生も佐古先生も、きつと天空よりご覧になつてをられます。

(福岡県 高見神社 宮司)

白足袋

原 茂 子

私は大阪府の南部・関西国際空港から車で二十分の岸和田市にご鎮座の夜疑神社にご奉仕しております。夫が宮司・長男が禰宜・私は境内清掃を受け持つ権禰宜という役目で、長男の妻と孫二人の家族六人で氏神さまにお仕えしています。

秋祭りには十一台のだんじりが境内に勢揃いします。その日には孫娘が浪速神楽を舞い、男の孫は楽太鼓を打ち、禰宜が龍笛を吹いてご奉仕いたします。一方私と嫁は、だんじり曳行の時に首に下げる木製の肌守の授与に追われるひと時です。

春夏秋冬のお祭りや七五三詣等のご祈祷や参拝者の受付係は家族でどうか都合がつきますが、元旦と戎祭（関西では一月九日・十日・十一日に執り行うお宮が多いのですが）にはそうもいかず、氏子総代さんにお手伝いをお願いし、元旦のお守りやおみくじ等の授与は巫女さんに、戎祭の福笹や縁起物は福娘さんにお任せすることになります。《十八才以上の未婚の女性であること》の唯一の条件を書いた看板を境内に立てる一方で、年に一度

十二月に発行する社報『氏神だより』（新聞折込で全戸配布）にも募集を載せています。面接の折に「時給いくらですか」と先ず尋ねる娘も時には居りますが、今年も十名の巫女さんにご奉仕いただきました。大晦日の夜に、白足袋を自前で用意してもらい、白衣と緋袴に着替えるのですが、和服に手を通すのが初めての娘もあつて、一人で着ることが出来ず、足袋の小鉤の止め方も解らない娘もいます。中には足袋カバーのようなのを持つてくる娘もあつたりして大慌てでお宮にある白足袋を貸し出すこともある始末です。数多くある授与品の種類を覚えることや、「ようこそのお参りです」と耳慣れない挨拶を教えられてとまどっているようでぎこちなさを感じますが、お昼頃には白衣も身につき、自然な対応が出来るようになっていきます。夕刻ご奉仕を終え（と言っても巫女さんの格好をしたかっただけの娘もいますが）白衣から洋服に着替え帰宅する一人と廊下で出合い「お疲れ様、寒いところで長いこと立ちんぼで身体が冷えてると思うから風邪を引かないように温かくして、今夜は早く休んでね。ご両親にもよろしくお伝えください。ありがとう」とお礼を言つてふと足元を見ると白足袋を履いています。初めてのことで靴下に換えるのを忘れたと思い「あなた白足袋のままよ」と言つと「ああ来る時もそうでした。今日はブーツやから外から見えへんよつて大丈夫です」私はあつけにとられて二の句が継げませんでした。（洋服に白

足袋。それは無いよ。白足袋にブーツなんて駄目。白足袋がかわいそう。いろんな想いが頭の中を駆け巡ります。「白足袋は男性なら紋付に羽織袴の時、女性も同じように晴れ着の時は白足袋なんよ。古い話になるけど私の新婚時代には普段着に毎日銘仙という紬の着物を着て、別珍の色物の足袋を履いてた」と彼女に言えば良かった。「おばちゃん、うちはこれでええんや。ほっといて」と言われそうだから、そして元旦早々だし……とやり過ごしてしまい、今でも心にひっかかっています。

当社の戎祭は新しく社殿を建て、当社の本社に相殿でお祀りされていた事代主命様にお遷りいただき、昭和五十八年が初戎でした。初代福娘をお願いした娘さんの一人が、宵戎当日、お母さんと一緒に来られました。「娘はこの春嫁ぎます。嫁入りに持たせる一枚をこんなお目出度い日に着させてもらい、戎さんから福をいただいて幸せになつて欲しいと思ひまして……」と仕付糸のついた真つ白い長襦袢を差し出された子どもの行く末を祈る母親の心に胸があつくまりました。ついこの間と思つてましたが間も無く三十年になるのですね。その日の事もはつきり心に残っています。

私が子どもの頃は、元旦には洋服と下着はまっさらを着せてもらい暗いうちに氏神様にお参りしました。お盆にはご先祖さまが帰つてこられるのを迎えして、糊の利いた浴衣

を着て新しい下駄をカラカラと鳴らして盆踊りの会場へ行きました。「楽しそうに踊っているみんなの姿を見て、ご先祖さまが喜ぶんよ」と母がいつも言っていました。普段は食べられないご馳走もただけて子どもには嬉しい楽しい日です。ハレの日は心が躍りました。今日では何時でも何処でも美味しい食べ物や好きな衣類が手に入り、毎日がおまつり日のようです。日々の暮らしにメリハリが無くなりました。電車の中で念入りに化粧する娘。身だしなみをする場が他人の目にふれない処から大衆の中になり、内外のけじめも有りません。制服のスカートを短くしハイキングに出かけるような姿で校門をくぐる中学生。校則や約束ごとを守る気が無い大勢のこどもたち。親の顔が見たい」と思うことが度々です。私が知っているほんの二、三十年の間に日本人の道徳心が大きく変わってしまいました。

ご皇室を敬いご先祖さまに手を合わせ、両親を大切にし子どもを育み慈しむ、そして他人に迷惑をかけない……そんな当たり前の心遣いをどこへ置き忘れてしまったのでしょうか。

「親の顔が見たい」と思った私はよくよく考えると、その親を育てたのは私達の世代だと思いに至りました。憎まれ婆さんになってもいい、「また昔話か……」といやな顔をされても平気。私に神様が残して下さっている命があと何年何ヶ月か知る由もありませんが、家庭で家族

に、お宮の境内片隅で地域の人たちに、昔の良き時代の話と今のこの豊かなくらしはご皇室とご先祖さまのお陰であることを語り続けようと心にきめました。

来年のお正月には、かわいい靴下を買っておきましょう。「これに履き替えなさい」と実力行使が出来るように！

（大阪府 夜疑神社 権禰宜）

虫追いまつり

木下 鏖 二

「ドンドン・カンカン・ドン・カンカン・ドド・カカ・ドド・カカ・ドンカンカン」

《ブォー》 ほら貝の合図で、虫追いまつりがスタートする。

六月の初旬、やわらかな初夏の日射しのもと、田の面を渡る薫風が早苗を揺らし、私達の頬を撫でて通りすぎます。

拝殿に於いて豊作祈願祭のあと神職を先頭に、氏子総代、区長、二戈^{にしご}、頭^{かしら}が進みます。神職は榊の枝にシデを付けた祓串を捧持し、氏子の皆さんが、それぞれ七、八メートルの長い笹竹に付けられた吹き流しの五色の幡、ほら貝、太鼓、鐘の所役を分担して進みます。むらの要所要所で神職が祓串でハライを致します。そのあとはやし言葉が続きます。

「サイトウ ベットウ サネモリ りゃ おーらんぞ おーらんぞ あーとは豊作じゃ 豊作じゃ 豊作じゃ 豊作じゃ」

とはやすのです。

ホラ貝を合図にスタートするドンドン・カンカンの音楽に続くはやし言葉は、実に心地良く村々に響きます。

田の草取りで忙しい村人達も、立ち上がり、かぶりものを取り、「ごくろうさん」と声を掛けてくれて、腰をのびしながら通り過ぎるまで見送っています。

村中一廻りあと、氏神さまに還った行列の人々は、おのおの神社に参拝のあと、道具等を片付け、氏子総代会長の宅へ移動し「なおりい」に入ります。時刻もちょうど昼どきでした。

にぎやかな、話し声と歌声とが続きます。夕日に空が赤く輝く頃、やっとおひらきです。「豊作バイ」「豊作バ」と言葉を交しながら三々五々それぞれの帰途につき、虫追いのまっりは幕を下ろします。

直会の真つ最中、気分の良いようになった若者の一人が、「おたずねですバツテン。ヨカですか」と手を上げました。

氏子総代会長が、

「ヨカバイ、いいナツセ」

「どーも、コンまつりは、時代に合わん。時代錯誤てち思いますバイ」

「なーんでナ」

長老の一人が気色ばみます。

「まあまあ、よかもネ、云うてみナッセ」

と神職が中に入ります。

「わしゃー 思うバツテン、今は害虫駆除には、農薬散布ですモネ、農薬で、ツマクロヨコバイもイチコロですタイ」

会社勤めの兼業農家の若者が農薬有効論に一票を投じます。

しかし、みんなは農薬がその毒性に於いて、恐ろしく怖いものだとは良く承知しているのです。それは己の周囲を見ると判然としているからです。農薬中毒で身体を痛めた多くの人々を知っています。入院した人もいるのです。更に農薬によって、豊かな肥沃の土地が痩せて細っていく事も毎日見ているのです。

そして最後に気付くのです。

地球上の生きとし生きる物は、己のみでは生きて行けない。互いに生かされていること、そうだ、命あるもの、みな横につながっている

その事に気付かなくてはなりません。

次に命の縦のつながりに気付きます。

うしろを振りむくと親である

親のうしろがその親である

その親のそのまたうしろがまた

その親の親であるというように

親の親の親ばかりが

むかしの奥へとつづいている。

これは、沖縄県が生んだ詩人山之口獏さんの詩です。そして詩は続きます。

まえを見ると

まえは子である

子のまえはその子である

その子のそのまたまえは

そのまた子の子であるというように

子の子の子ばかりが

雲の彼方へ消えているように

未来の涯へとつづいている

六月二十日の熊本日日新聞の投稿欄「読者のひろば」に一つの文章を見出しました。

一時、流行語に使われた『人の命は地球より重い』の言葉がありますが、私達日本人は、深い感謝と畏敬の念から、個人としての自分のいのちに目をつけるより前に、自分にいのちを授け、育んでくれた親のいのちに心を寄せました。人間のいのちほど尊いものはないというのが、現代人のセリフですが、その尊いいのちを私達に授けて下さったのはどなたですか。一人立ちできぬ幼児、手塩にかけて育てて下さったのはどなたですか。いのちほど尊いものがないとすれば、尊いいのちを授け育ててくれた親ほど、子どもにとってありがたい尊い存在がまたこの世にあるでしょうか。その親に、またその親があり、そのまた親があり、無限にさかのぼって、天地のはじめまで祖先がつながる。この一切のご先祖があればこそ、自分はいまここに生きている。日本人は、すべてのご先祖のいのちを敬愛し、祖のいのちのなかに、上座にまつて拝まずにおれない神を仰ぎます。おのが肉親を通して神を仰ぐ、これが日本神道の核ともいえる思想で、偉大な特色なのです。「いのち尊し」を根元とした日本人なのです。

産みなさぬものなしといふあらがねの　土はこの世の母にぞありける

「母なる大地」こそ全てのいのちの親です。そして天地の万物は全て「はらから」であることに気がきます。と同時にいのちある万物を神と見定めたのです。

これぞ日本神道です。そして「神道は人類を救う」根元的思想がそこから芽生えていくのです。

(熊本県 大江八幡宮 宮司)

すめろぎ

天皇の国——日本文明史小論——

佐 古 一 洌

心ある皆様も思ひは同じかと存じますが、日本の現状を見てをりますと、これで日本は果して大丈夫なのだらうか。本来の日本の姿は一体どこに行つてしまったのか。更に又日本は、既に亡国の坂道をひた歩みに歩んでゐるやうな気がしてならない。

もしさうだとすれば、日本の衰退を嚙ひ止め起死再生の術はあるのだらうか。又もしあつたとしても一体どのやうにすれば良いのか。さう言つたジレンマと申しませうか、不安、悩みが時折よぎるのであります。

西洋の歴史学者であるハンチントンやトインビー、更にシュペングラ―は、世界を六大文明或いは七大文明に分けました。そして日本をその世界の大文明の一つに位置づけ、しかも日本だけが一つの国で一つの文明圏を形成してゐると言ふのであります。

一文明一国家を形成する日本では、この文明の魂、精神とは大方のご想像通り、天皇のご存在であります。

悠久の歴史の中で、天皇は平時は水面下に身を沈めてゐるが、国家又は文明の危機が本格化すると急に浮上する。そして歴史の危機を乗り切ると又水面下に沈む。この周期的サイクルが日本の文明史のパターンであるとされるのであります。

日本にあつては天皇こそが、この国の存続を決め最後の時には必ず出て来る国の強い強い生命力、すなはち文明力を持ち、それが存続の危機を救ふことにもなるのであります。

例へば江戸期には三つの重大なポイントがあります。

- (一) 士・農・工・商の武士が作り上げた個人倫理を究めて行つた武士道があり、
- (二) 藩校・私塾・寺子屋の普及により、世界史上類例のない教育の目覚めがあり、
- (三) 古来天皇が坐し坐すが故に、長い年月をかけて醸し出されて来た尊皇思想の高まりであります。

武士道は、かつて新渡戸稲造が全世界に紹介し、新渡戸の同窓内村鑑三が「日本国最善の産物」と絶賛し、「是れある間は日本は栄え、是れが無くなる時に日本は滅ぶ」と断言しました。

人として生きて行くべき人類普遍の最高の道徳が武士道なのであります。

藩校・私塾・寺子屋のうち、寺子屋は日本全国でその数は一万四千もあつたと言はれ、

平均しても一都道府県当たり三〇〇軒もあるのであります。

当時如何に寺子屋が普及し教育が行き届いていたか、判ります。

その教育の普及と最上の道徳としての武士道、そして万世一系の天皇のご存在。

この三つがあつたからこそ、たとへ突然のペリー来航に遭遇しても、日本人全てがしつかりと覚悟を固めて維新の大改革へと進んで行くことが出来たのであります。

明治維新後日本は西南戦争、日清・日露の戦争をはじめ幾多の困難と闘ひながら、美事近代化に成功してまゐりました。

だがしかし、大正の頃から少しおかしくなつてまゐります。

その大正時代と平成の今とは非常に類似してをります。それは両時代共に日本人の多くが日本文明を見失ひ、様々な形で「文明の衰退」を経験してゐる点であります。

かつて昭和二十年八月十一日御前会議において、日本の「ポツダム宣言」受諾、すなはち日本の降伏と敗戦が極秘裏に決定したその日、陸軍参謀次長河辺虎次郎中将は、日記に次のやうに記しました。

今後日本は

(武) 士道の撲滅策を蒙るならん。

耶蘇教信者が急速に殖えるならん。

アメリカ語が急速に盛んに用ゐらるゝに至らん。

家々に伝家の宝刀を保存することも禁絶せらるゝに至らん。

国家の爲献身などと言ふ氣持は之を捨てよと教へらるゝならん。

日本の歴史の内容を根底より改竄せらるゝならん。

西洋文化の有難きを極度に教へ込まるゝならん。

何と鋭い予言であつたことかと驚かざるを得ないのであります。

日本は敗戦によりアメリカの軍事占領と、今迄のものを一切否定する更地化と、一神教の試練にさらされました。言はゞこのGHQがもたらしたゝ遅速性の毒ゝは時が経つに従ひ効果を現はしてゆきます。

そして他国によつて恣意的に導入された所謂「戦後文化」なるものは、はじめから「まがひもの」だつたのであります。すなはち日本文明の地下水脈とは一切のつながりを持たないから、半世紀余りで早くも衰弱破綻を來たして今日に至つたのであります。

我々はそれに氣づかなければなりません。

かつての幕末・明治維新と同じく、この国と日本人の心が存続のギリギリの地点に立た

うとしてゐる今こそ、悠久二千年以上にわたる日本の歴史の文明の生命力である天皇と、それに連なる精神・文明の魂すなはち、地下水脈からの再生の生命力を地上に湧き上げらせなければならぬのであります。

わが国は二千数百年に亘つて神話の時代から現代まで連綿と続く皇室・天皇を中心に、国民が心をひとつにして歴史と伝統を守り、平和と繁栄を築いてきた世界に類のない「道徳立国」なのであります。『神洲清潔の民』の国とは正にこの事であります。

神が与へ授け給ふた日本国の真の姿と、日本人の持つ特性の発露が、混迷の日本を否世界を救ふ大きな鍵となることを申し上げ、本日の講演を終へさせていただきます。

(京都府 松尾大社 宮司)

R・L・Sと吉田松陰

村 田 和 之

平成21年9月16日、「人の命を大切にする」、「政治主導」を理念としてスタート。歴史的な政権交代、70%の内閣支持率を受け期待された鳩山政権も、米国からは臆病者とみられ、中国にはカモにされ「沖縄米軍普天間飛行場の移設問題」と「政治とカネ」の問題で遂に有権者よりサギ師と見られ、八ヶ月の短命政治は崩壊した。

平成の御代だけで小泉首相以外、一年弱の短命政権が続々と続き十六人目となり、政党も新党ごっこ宜しく乱立し、万世一系の天皇を中心とした品格高き日本丸も沈没寸前と成って参りました。選挙のための「表紙」だけ取り替え国民の批判をかわすだけの「イラ管」政権も充分なる審議も無いまま参議員選挙に突入した。七月十一日が投票日、選ぶ人は私達市民、私利私益に走る政治家をしっかりと見極め日本の将来を見据え考え選びたいものです。

新しい菅直人首相は酒癖が悪いと聞きます。深酒がたたって何時も「国会の居眠り王」

といわれる有名な先生、消費税も自民党が掲げた10%の税率に早くも便乗していますが、管首相は以前から「消費税は15%が良い」と提案していたとか、元来消費は必要ないと主張し四年間は税率を上げないと言っていた政党、何をか言わんやですが仲々の策士家、市民運動家から市川房枝氏に師事し政治家となり「イラ管」として有名でしたが副総理となり「ダマ管」に徹し、ナンバーⅡでありながら君子危うきに近寄らずのことわざの通り、虎視眈眈と出番を待っていた人。攻めには強いが守りに弱い、姑息な人間に一国の統理が務まるのであろうか興味津津、お手並拝見といったところですが一変、じつと日本各地を見回してみると各地で静かに黙って黙々と自分の仕事を務め人々の安心、安全を祈っているものの一つに灯台というものがあります。四面海に囲まれた日本、船の安全、海難事故を未然に防ぎ航路を示す灯台は日本全体で五、三三八基あると聞きます。船に乗る人々の生命はもとより年間八億七百万トン港に出入する財貨を静かに見守っています。

五、三三八基の灯台の中で文化的にも価値評価のある二十三基の内、十三基の灯台に関わった会社にステイヴンソン兄弟社という会社があり、特に石造りの灯台として日本最古の灯台が静岡県下田湾の沖合の岩礁に建設され百三十年余りも経て今尚活躍している、神子元島灯台という灯台があります。

奇しくも吉田松陰が渡航に失敗した下田湾に当りますが、不思議にも、その神子元島灯台は私達が若い頃心を踊らせ読んだ一、八八三完成した「宝島」という本を書いたイギリスの冒険小説作家「ロバート・ルイス・ステイーンソン」の父が基本設計した灯台なのがあります。

又、不思議なことは重なり「宝島」を書いたステイーンソンは一、八九一年水戸藩士の野口勝一と富岡政信の共著として書いた「吉田松陰伝」より十一年も前の明治十三年（一、八八〇年）の九月「皇朝名臣伝」に書かれたものより半年も早い三月に「ヨシダ・トラジロウ」と題して松陰に関する書物が出版していたのであります。

イギリスの一人の無名であった小説家が日本人が記した松陰伝より早く世界最初の松陰伝としてステイーンソンの手により出版されていたのであります。

なぜにイギリスの文豪作家が松陰を知り、感動されたのであろうか、どこに見知らぬ松陰との接点があったのであろうか。

ステイーンソンは、一、八九四年十二月三日、父、トーマスと祖父、ロバートという灯台建設を専門としていた家に生まれました。しかし病弱の身の為、各地を転々と変り療養しながら小説を書いていました。又、健康状態が悪く不安定で孤独と挫折感にひたり失望の

どん底にいた時奇しき出会が起りました。それは、松下村塾の最年少グループで松陰の教えを受けていた正木退蔵との出会いでありました。正木退蔵が説く松陰の話はステイヴンソンに大きな大きな、又、力強く生きる指進と感銘を与えたのであります。

正木退蔵は松陰とは安政五年（一、八五八年）十三歳の時といわれていますが、松下村塾では最後の教育をされていた時期であり、「机の上だけの学習でなく、社会の役に立つ人間となるため自己を教育する」という実学の思想を受け実践していた正木退蔵の姿に大きな影響を受けました。

松陰もステイヴンソンも仲睦じい父母に育てられ厳しくも愛情深く育ち、しかも信仰心篤く家族愛に恵まれた環境に生まれ育ちました。

正木退蔵三十二歳、ステイヴンソン二十八歳、一、八七八年度、松陰の教えを聞いたステイヴンソンは、日下部くさかべが吟じた漢詩「大丈夫寧ろ玉となりて砕くべし、瓦かわらとなりて全うすること能あたわず」の詩に感銘し人生に「生きる力を与えてくれる日本の英雄」と評し、日本の英雄、吉田寅次郎、吉田松陰と称え、萎なえてしまう心に清新で生きる勇気を与え、息吹を吹きこんだ英雄の生き様に感銘し「ヨシダ・トラジロウ」という世界で最初の松陰伝を書くに至り、その後、一、八八三年、名作となった「宝島」が生まれ出版されたのであり

ます。

なぜにステイヴンソンをここ迄虜にし生きる道を教え諭したのか。

数多くある中で獄中より妹に宛てた手紙の一つに、「杉の家法に世の及びがたき美事あり、第一に祖先を尊び給ひ、第二に神明を崇め給ひ、第三に家族を睦まじく給ひ、第四に文学を好み給ひ」とあります。

日本の建国精神を知り尊皇精神を生んだ水戸学を学び、初心を貫き、ひと筋の道を歩む人、親に愛され、師に愛され、友に愛される人生、平等の精神で誰も大事にする心、教えることでなく一緒に学ぶ姿勢。

こうした姿は何かしら私達の恩師、石井・佐古先生の生きざまや指導の姿に等しい。体力と時間の全てを捧げ、命をも投げ打ち日本民族の為に護持すべき姿を貫き、又、通された人、松陰が諭された「至誠の心」、至誠を持って多くの人々に正義を説き聞かす姿、至誠にして動かさるものなし。

「万巻の書を読むにあらざるよりは、いずくんぞ千秋の人たるをえん、一己の労を軽んずるにあらざるよりは、いずくんぞ兆民ちやうみんの安きを致すをえん」。わずか八畳の松下村塾の講義

室の塾聯に印された松陰の学ぶことえの諭しの詩でありますが、「知は行たり、行は知の美たり」と、知と行の思想を説いています。

又、辞世の詩に。「吾今国の為に死す、死して君親に負かず悠々たり天地の事、鑑照、神明にあり」とあり、死期を覚り後に残した「留魂録」には「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」。

「親思う心にまさる親心今日のおとづれ何ときくらん」。

松陰先生の国を憂い親思う孝心深い辞世の句を見るにつけ、私達が恩師と仰ぎ日々ご奮闘頂いた石井・佐古先生の生きざまを偲び最後に両先生の辞世の句を奉唱し第二十六回神道講演全国研修大会・山口大会の取りと致します。

(佐古先生)

嵐吹く内外の国のやすらぎを神に祈りつ今日まがり逝く
現身はいまを限りにはてぬとも霊となりて国を守らむ

(石井先生)

聞く人のさらにあらずば道のへの石に叫ばむ石も動くまでに
わが魂は七たび生れて暮すらもみ代も憂ひて雄健ぶを聴け

(広島県 長束神社 宮司)

恋闕^{れんけつ}

村瀬佳子

みなさん、今晚は。私の母は山口の出身ですので、今日、ここで皆様にお目にかかれまして、本当にうれしく思つて居ります。さて、私事ですが、ほんの二週間前です。思うところありまして、出雲は美保の関（美保神社）から、鳥取砂丘まで一人旅を致しました。出発地は住んでおります愛知県名古屋市ですので、くるつと一週一二〇〇キロの旅でした。高くそびえる大山、大国主の命さまを祀る大神山神社をはじめ、海岸線をくまなく廻り、万葉の遺跡や、神話の里である白兔海岸、白兔神社・鳥取砂丘と有名な史跡は勿論のこと、旅するうちに思いがけずこの地が後醍醐天皇ゆかりの地であることにあらためて気付かされたのです。本当に私は物事を知らないな、勉強不足だなあと改めて感じましたことや、知りたいという欲求が内からあふれんばかりにこぼれてきました。

後醍醐天皇は天皇さまでありながら、隠岐島に流されてしまします。隠岐へ出発されたのは島根県美保関と伝えられます。そして、その時、皇女瓊子^{たまこ}内親王^{ないしんのう}は、父君を慕い、童

姿に身をやつしてついて来られましたが、隠岐へ渡るのを許されず、悲しみのあまり十六歳で髪をおろされ西月院安養尼さいげついんあんじょうにとなられ、その後わずか八年で今の鳥取県、安養寺で亡くなられたのであります。このお寺の境内には「齒形栗はがたくり」といわれる栗の木が生えていて、これは、土地のものが差し上げた栗の実を齒にあて、もし春になって芽を吹いたなら、父後醍醐天皇の運が開けるかもしれないと、願いをこめてその栗を土に埋められたところ、不思議にも翌年の春、栗は芽をふき、天皇は都にお帰りになったのです。この栗の実にはくつきりと齒のあとがついていて、何代目かの現在の栗にも齒型が残っていると言う事です。

そして、名和神社なわじんじゃに至ってその由緒を拝見しました時に、このご祭神の一族が隠岐に流された後醍醐天皇をお助けし、鎌倉幕府を破って天皇様自らが政治の采配をなさる建武の新政を復活させる基となった事を知りました。そしてさらに車を走らせること数分、かのラフカデオ・ハーン夫妻も訪れたという木の根神社に辿り着き、名所案内の看板に、海岸沿いに「後醍醐天皇御着船所」の地を発見しまして、訪ねてみたいと探し当てましたところ、今はただ風で吹き飛ばんばかりの木の鳥居と石の祠とおまつりしてあるばかりでありました。目の前はただただ広い日本海が広がるばかり、しかし、命懸けで天皇様をお救

いし、また、後醍醐天皇もどのような思いで隠岐の島からまた本州の土を踏まれたことではありません。七百年の時を越え、私は感動に震えたのであります。

建武の新政が成就した後、再び足利尊氏が兵を挙げ北朝・光厳天皇ををかけて天下を治めようとするのですが、後醍醐天皇はこれをよしとせず、新田義貞や楠木正成に尊氏追討を命じられるのです。そして湊川の戦いで正成は戦死します。

この湊川の戦いに赴く時の楠木正成・正行の親子今生の別れの話は、今はあまり語られることのない、『桜井の別れ』があります。けて生きては帰れないと悟ったこの戦い、最後まで父上のおそばで戦いたいと願う正行に、父正成は「お前を帰すのは、自分が討ち死にした後のことを考えての事、帝のために自分の身を惜しみ、そして忠義の心を忘れずに、一族の者、唯一人でも生き残るようにしていつの日か、朝敵を倒し滅ぼすのだ」とかたく誓って永訣の別れをされたのであります。

時は流れ江戸の幕末の時代、ここ山口県萩の地に吉田松陰先生は生まれるのです。明治維新を動かした多くの英傑を世に送った松陰先生の生き様はまことに潔く豪快なものでした。先生は日本中飛び歩いて色々な人に出会い思想を深めていかれました。広く国中の状態を明らかにして、アメリカをはじめとする外国から押し寄せる恐ろしい波からこの日本

の国を護るにはどうしたらよいかを、教えられました。そこには、実践を大切と教える生きた教育がありました。先生は古事記をよく知り、日本には幕府ではなく、神代の昔から天皇さまがいらっしゃるといふ貴い成り立ちがある事から、誇りを持ってこの国柄を守り伝えていかねばならないと説かれました。齡三十、志半ばで投獄され死を悟った松陰先生は『留魂録』を書き上げます。その冒頭和歌に

身はたとひ武蔵の 野辺に朽ちぬとも

留め置かまし大和魂

と読まれたことは、ご参会の皆様周知のこととあります。

死を以ってなお生き続ける教えがあるならば、いさぎよく死するのをもまたこれを善しとするのです。松陰先生の死後、その教え子達の活躍は目を見張るものがあります。

さて、松陰先生が生まれるおよそ二十年前、(文化二年―一八一一年)、佐久良東雄先生が茨城県にお生まれになります。九歳で仏門に入つて後、善応寺の住職とまでなるのですが、一転住職の職を辞して江戸におもむき、平田篤胤先生より国学を学ぶこととなりました。そして一八四三年、三十二歳の時に天皇陛下のために働くことを心に決めて還俗し、尊王思想の普及のために尽くされました。松陰先生が獄中でなくなつた一年後にこの東雄

先生も獄中にて亡くなられるのですが、「徳川の粟は食わず」と断食して亡くなったのではないかと噂されたぐらい、心から日本の国柄を愛し、只々天皇陛下のためにお仕えする事が日本人の生きる道として、「恋闕」の道一筋に生きぬいたお人でした。その「恋闕」の道を受け継いだ一人の雄々しい男性が昭和にも居られました。戦前、佐久良東雄先生の研究をされ、自身もその生き様に魅かれ、「恋闕」一筋に昭和を生き抜いた石井寿夫先生です。「恋闕」とは、天皇陛下を思い恋慕う尽きぬ事の無い思いです。汚れた心なく純真に日本の国の宝たる天皇陛下を思う心なのです。

心底物を学んで体得するにはどうすればよいか、それは、先に生まれた模範となるべき先生を早くみつけ、教えをひたすらに学び、先生の歩まれた道を追体験し、それをさらに乗り越える事です。石井寿夫先生も、湊川神社に楠木正成公を慕い、吉田松陰先生や佐久良東雄先生の「恋闕」の道に深く感銘したことで、更なる「恋」の道を歩かれたのです。

昭和二十年は日本敗戦の激動の時代でした。石井先生は空襲で皇居が焼ける姿を言葉無く、どうすることも出来ず、ただ見ることしか出来ませんでした。しかし、この窮地の極致ともいえる皇居炎上の中に昭和の大禊を感じられるのです。陛下のお側近くにいる臣下の穢れがこれで落ちたと感じられたのです。そして、終戦の詔を拝し、食を断ち伊勢詣で

をし、祈願してもなお自らに死が訪れなかった事を経て、自分は生きて祖国の再興のために命をかけて尽くす事を決められたのです。その最中、昭和二十三年の五月、ここ松陰神社の境内で後に講演講師となられた石井壽夫・佐古幸嬰両先生の運命の出会いが訪れたのです。そして、石井先生は生涯独身を通しきり、日本中に美しき伝統と国体とを説いて廻られたのです。そして、自分が死んだなら立派な墓はいらないけれど、もし願えれば小さな小石に「恋闕」の二文字これがあるだけで、それだけでよいと心に決められ、

神を怨みず 人を咎めず

ただただ己の忠誠至らざるを慙^はづ

の精神で生きぬかれたのであります。

おりしも、日本で一番古い歌集『萬葉集』の中で、千三百年も前に詠まれ、現代にも通じる日本人の心のあり方を示した歌があります。

神亀五^{じんき}（七二八）年、山上憶良の 惑^{まど}へる情^{こころ}を反^{かへ}さしむる歌一首 并せて序 です。

序もとても素晴らしいのですが省略します。

「父母^{ちちはは}を見れば貴^{たふと}し 妻子^{めこ}見れば めぐし愛^{うつく}し 世間^{よのなか}は かくぞ理^{ことわり} もち鳥^{とり}のかから
はしもよ 行くへ知らねば 穿^{うけくつ}沓^{くつ}を 脱^ぬき棄^するごとく 踏^ふみ脱^ぬきて 行くちふ人は

石木より なり出し人か 汝が名告らさね 天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大
君います この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み たにぐくの き渡る極み
聞こし食す 国のまはらぞ かにかくに 欲しきまにまに 然にはあらじか」

心の迷いを正そうとする一首。父母は貴く、妻子は愛おしくかわいい。それは世の中では当たり前のことである。人は石や木から生まれたのではない。そしてこの日本の国は日や月の光のもと、くまなく天皇様が治められる秀れた国である。あれこれと自分勝手に振舞うものではない。

今も昔も変わらず私達は間違いなく、世界に誇れる天皇様をいただいた国民なのです。祖先が受け継ぎ来たこの日本の国をまた次の世代へと受け継いでいかねばなりません。

明治の初め、西欧諸国に自分達の文明は劣っていると躍起になる家臣たちに、明治天皇はこうお諭しになられたそうです。

しきしまの大和ごころをさきだてて 道ある国とひとにいわれむ

日本の国には美しい立派な文化が既にある。それを磨いてさらに立派な国となるように努力しなければならぬという意味です。

そして、今上陛下におかれても、ご自身の病をおしても国民の健康と平安を常に祈って

津々浦々巡幸されるお姿に、我々国民は涙を流さずには居られません。私達が天皇様をお慕い申し上げる以上に天皇様は私達を思つて下さるのです。けしてこの恩を忘れることなく、忘れ去られようとしているこの「恋闕」の二文字を知つてその実践を生きる若者が続くなればこの先何があるうとも日本は決して滅びることの無い美しい国でありつつづけると固く信じるものでございます。ご清聴ありがとうございます。

(広島県 長束神社 権禰宜)

ある一日

松 本 ス ミ 子

本日は石井佐古両先生が生涯をかけ国を思い命の限りお尽しになられる最初の地で
ある、この松陰神社にて勉強させて戴く喜びを先ずお礼申し上げます。

人にはそれぞれに一生の内には忘れる事が出来ない日が山ほどあると思います。

楽しい事、嬉しい事、悲しい事、思い出したくない一日等数え切れない程の一日をそ
れぞれ持っているものです。

私も傷ついたり、楽しかったり、悲しみの淵に沈んだり、長い人生の中、数えても数え
切れない日があります。

平成二十年十月初め宮内庁長官名にて一通の通知状がまいりました。

その通知状には平成二十年十月二十日赤坂御苑で行われる園遊会に出席する様にとの文
書だったのです。一時迷いました、例大祭の月ではありませんが、長い間関係している婦
人防火クラブと云うボランティア団体で全国で会員数約一八〇万と云われます、その中で

一人と云う御招待でした。大変光栄な事でしたので出席させて戴く事になりましたが不安も残りました。

その日は前日より天氣が悪く、早朝より今にも降り出しそうな空でしたがいくつかの検問を過ぎる頃より怪しい空模様になり、御苑に到着した頃降り出して来しました。

お出御をお待ち申し上げる時の長かった事が思い出されます。大勢の皆さま方もソワソワして居られました。君が代が演奏され赤坂御苑に御着きになられた事を知る中に皆ざわめく気がしましたが天皇陛下皇后陛下各皇族の御談笑の御声が間近く聞こえる様になりました。

水泳の北島選手を始めとしてスポーツ選手も多く御招待をうけておられました。御苑の中は和やかな雰囲気包まれていました。

池の周囲には大勢の人々が御待ち申し上げています。秋篠宮妃殿下が私のネームに御目をお止になられ「婦人防火クラブの方ですね」「ハイ」声が上がって来しました。

「これから年末になりますと火災等が大変多くなりますので防火防災に努力して下さい」の御声に「ハイこれからも努力してまいります」とお答えする声も震えていた様でした。その頃は雨も止んでいた様です。

全国津々浦々何時もお心におとめになられ、常に国民の幸を御祈念あそばす皇室を戴く日本人としての誇りを強く強く思いました。

平成十六年御製

人々の幸願いつつ国の内 めぐりきたりて十五年経つ

あの広い御苑の中で、お声をおかけあそばされている天皇陛下皇后陛下、皇太子殿下、各皇族の方々の御姿にただ有難う御座いますとお答えする事だけでした。此の喜び、感激は参会出来なかった婦人防火クラブの会員一人一人に伝える事が出来るかと身が引き締まる思いであり又、尊い一日でありました。

いま長崎では龍馬伝で賑わって、長崎だけではなく全国の縁がある所は大変ですが歴史の中の一日が繰り返されて日本人としての心を再生へと甦らせている様に思われます。

吉田松陰先生も

かくすればかくなると知りながら

やむにやまれむ大和魂

と安政の大獄の中散って行かれました。

坂本龍馬も元治元年二月二十二日「長崎ち一体どげな町やるか」と島原半島の街道を

二十三日、日見峠を越え長崎入りし龜山社中等を設立し数度となく長崎に入り、慶応三年十一月十五日京都で暗殺されています。

人それぞれに一日を積み重ねて歴史が作られ将来へ向かって行きます。

日本人としての誇りを持って生きる、その大切さを次代の子供たちにも教えなければならぬ重大な務めがあると強く思われます。

一日一日を大切にして。

(長崎県 諏訪神社 宮司)

孤高の偉人 吉田松陰先生

渡 邊 知 宣

「身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも 留置まし大和魂」

二十一回 猛士

これは、吉田松陰先生の有名な遺書『留魂録』の冒頭です。

若干数え年三十歳の人生を全力で駆け抜けて人々に大きな影響を与え、封建制度を打ち破り、日本の近代国家建設への先駆けとして命を賭けられた御生涯に心打たれます。

今日は、この松陰先生の御誕生の地で、先生を神とお祀りする松陰神社の御社頭で、しかも御生誕百八十年の節目の年に、松陰先生のお話をさせていただく事に緊張と喜びを感じています。

拙い講話ですが暫しの間、御静聴をお願いします。

一、決死の覚悟の行動力

まず、松陰先生の無茶とも思える死に物狂いの行動力についてふれてみたいと思います。

① 先生は二十二歳の時に、当時日本近海を脅かしはじめたアメリカやロシアなどの外国船横行の実情を探ろうと東北地方の視察を計画実行されます。これは当時、兵学研究のために遊学中であつた江戸を出発し、水戸・会津を経て真冬の十二月に二メートルを越す雪中の越後山脈を踏破して日本海へ抜けるという命がけの無謀とも言える行動でした。難儀の山越えの後佐渡島へも立ち寄り、悲劇の天皇・順徳天皇の御陵に涙され、さらに厳寒の東北沿岸を北上して遂には津軽海峡にまで到達されます。そして、外国船の往航と日本近海の無防備な体制に愕然とされます。

この時の四ヶ月間、三千キロに及ぶ東北地方への遊歴は、日本の防衛のために時期を失すれば取り返しがつかないとばかりに、また同行の肥後藩士宮部鼎蔵との約束を守るために、長州藩の許可を受ける前の出発で脱藩という重罪覚悟の視察旅行でした。松陰先生は、この時の脱藩亡命の罪で家禄を没収され士籍を剥奪されてしまわれます。

② また二十五歳の時には、外国の実情を探るために死罪を覚悟で国禁を犯し、アメリカへ密航しようと計画されます。いわゆる黒船の再来航の折り、弟子の金子重輔と共に小舟

を漕いで米艦に乗り込めますが、密航者の受け入れは幕府との交渉の妨げになると判断されて、目的を遂げる事ができませんでした。

ペリー提督は

「此の国に、このような熱意を持った青年がいるとは・・・」

と驚き、嘆願書を幕府に送り、これによつて二人は助命はされますが、牢獄の中で金子は病のために死んでしまいます。松陰先生の嘆き悲しみは大きく、食を減じて献じられた石の花立が現在も金子重輔の墓前に立ててあります。

③さらに二十九歳の時、幕府が勅許を経ないで、不平等の日米修好通商条約を締結した事に悲憤し、

「將軍は天下の賊である。將軍を討ち、幕府を倒せ」

などと過激な幕府批判を述べた意見書を藩へ提出されたがために、またも投獄されてしまわれます。

そして江戸の伝馬町の牢獄での取調べ中に、

「尋問の場は、幕府役人に直接意見が言える絶好の機会」

とばかりに老中暗殺の計画の事についても話されます。

「このままでは日本の国は、外国に占領されてしまう」

という我が身を顧みずの発言に幕府の役人はビックリ仰天し、結局は死罪の刑が言い渡されてしまいます。そして次の和歌を詠まれています。

「親思ふこころにまさる親こころ けふの音づれ何ときくらん」

胸の張り裂けるような思いで、親の悲しみを思いやられる先生のお心に涙が溢れます。

これらの出来事のほかに、普通の人には考えもつかない、無茶としか言いようの無いような決断と行動をなされ続けられました。

二十一回猛士という号は、

「生涯に二十一回、激しい行動を貫いてみせる」

との決意を示めされたものです。

松陰先生が見聞を広めるために、短い御生涯に歩かれた距離は、九州地方から東北地方まで約一万三千キロに及びます。これは地球の直径とほぼ同じ距離です。

このような無茶とも思える一途な思考方法や行動力はどのようにして培われたのでしょうか。それは、先生の生い立ちにその原因を見る事ができます。

二、幼少年期の徹底した教育

今から丁度百八十年前の江戸時代の幕末に、長州藩の萩の地に誕生された松陰先生は、幼い頃から実父の杉百合之助より敬神・尊皇・崇祖など、杉家代々の家風の精神を教わり受け継がれます。また特に兵学者である叔父の玉本文之進からは、すさまじい英才スパルタ教育を受けられます。

例えばある夜、勉強中に顔に止まった蚊が気になり追い払おうとされましたが、これを叔父に見咎められます。

「勉強に励む事は藩のため国のためで、いわば公の事である。蚊が止まって痒いという事は私の事である。私事のために公の事を疎かにしてはならぬ」と激しく叱られたと伝えられています。

さらに、こうして育たれた先生の物凄さをうかがわせるエピソードに次のような話も伝わっています。

先生は諸国遊歴の途中、用便を済まされた後では全力で走られたそうです。なぜだと思われませんか。

「自分は今、大切な公の仕事のために諸国を歩き勉強をしている。しかし、用便をしたいと

いう身体の要求は私的な事である。私的な事のために公の事、公の時間を無駄にしてはならない」

と、用便にかかった時間を取り戻すために走られたのでした。

私たちには、これ程までに公私混同をしないという覚悟ができるでしょうか。万事がかくの如しで、幼い時から徹底した滅私奉公の精神を叩き込まれます。

また、

「学問は将来の己の欲を満たすための道具ではなく、学問を学べない人のために学び、学んだ学問はその人々や国のために役立てる」

という知行合一の精神や、利他の精神を培われます。

そして、九歳で中国の古典を諳んじ、十一歳の時には藩主の前で講義をされるといふ並外れた成長をされています。

三、日本を脅かす欧米列国の来航

当時の日本を取り巻く環境は、非常に危険な状況にありました。十五世紀末のコロンブスのアメリカ発見から始まった欧米の白人国家による世界侵略と植民地化の波が、アメリ

カ大陸やアフリカ大陸を始め世界中の有色人種の地を襲い、いよいよアジアの極東の地へも押し寄せて来ました。日本へもイギリス、フランス、アメリカ、ロシアなどの国々の艦船が次々と来航して、様子を窺います。アヘン戦争で隣の大国の清がイギリスに敗れたのは、十三歳の時です。

「日本は今、外国に狙われている。いざ戦争ともなれば、お前は軍学師範として指揮を執らねばならない。お前の学問が未熟のために、日本が負けて滅びる事があれば取り返しがない」

との叔父の教育に、いよいよ危機意識を強められた松陰先生は猛勉強を続けられます。

このように幼少年期に受けられた教育が松陰先生の生涯を貫きとおし、

「自分のことは顧みず、国のため人のためという純粹無私すなわち至誠の愛国心」を築き上げられたものと思われまします。

四、至誠の愛国心は人を動かし国を動かす

アメリカへの密航に失敗された後、幽囚中に始められた松下村塾での直接の指導の期間は、僅か二年間ほです。しかし、

「皇神の誓ひおきたる国なれば 正しき道のいかで絶ゆべき」

と宝祚無窮の神勅を信じ、そして

「至誠にして動かざるものは、未だこれあらざる也」

の信念のもと、誠実無私の実行力に裏打ちされた尊皇愛国の教えは、時間の長短にかかわらず生徒たちの琴線にふれ、多くの有能な人材を育て上げました。

松陰先生が幼少年期に父と叔父から受けられた教育や、松陰先生が松下村塾で生徒等に行なわれたその教育の中に、教育というものの原点を見るような思いがします。先生も生徒も、命がけの目標と実践を持って真剣に教え教わる姿こそ、本物の教育に必要不可欠の事であるといえましょう。

そしてついには、自らの命を賭けての行動による至誠の愛国の思いは、先生の無念の死後に弟子たちを初め多くの人々に、さらに強い影響を与え確実に実を結びました。

後に奇兵隊を組織して、長州藩を倒幕の先鋒にまで作り上げられた高杉晋作、蛤御門の変で残念にも戦死された久坂玄瑞、明治になって総理大臣になられた伊藤博文、木戸孝允、山縣有朋などなど明治維新の功労者の多くが先生の影響を大きく受けて活躍されました。また、今テレビで話題の坂本龍馬は、松陰先生没後二年目に萩の地を訪れ、久坂玄瑞等と

交流を深め、その二ヶ月後には、土佐を脱藩し倒幕運動を強めています。坂本龍馬も先生の志を肌で感じて、その覚悟を決められたのでしょうか。

そして、松陰先生没後八年にして、幕府は倒れ明治維新を迎えます。松陰先生が斬首直前に声高らかに吟じられた辞世の詩の通りとなりました。

「吾今国の為に死す

死して君親に負かず

悠々たり天地の事

鑑照明神に在り」

人と異なる道を行くことを恐れず、自分の限界に挑戦し続けられた行動力の人・吉田松陰先生は、日本を欧米列国の侵略から護り、近代日本の夜明けをもたらされた第一の功労者、「孤高の偉人」と申し上げてもいいと思います。

五、大和魂を次の世代へ

さらに、先の大東亜戦争敗戦後の昭和二十三年、ここ松陰神社で開催された天皇陛下御留意懇願運動の折には、私たち神主の先生である石井寿夫、佐古幸榮先生方に御祭神は御

神威を添えられて、その後の両先生の五十年に及ぶ御活躍を御加護いただきました。その両先生方の御指導を受けて今日の私どもがいます。

松陰先生が

「死しても尚、この世にとどめて日本の国を護りたい」

と願われた大和魂とは、

「日本民族が建国以来持ち続けている、死を恐れない至誠の尊皇愛国の精神」

であると私は理解しています。

今を生きる私たちは、この「大和魂」を、確実に後世に受け継がねばなりません。私も、微力ながらその役目を今後も果たし続けて行きたいと思っています。

最後に、松陰先生の悲しみのお歌「親思ふ」の遺詠を皆様と御一緒に詠って締めくくりたいと思います。

御唱和をお願いします。

「親思ふここにまさる親ごころ　けふの音づれ何ときくらん」

ご静聴ありがとうございます。

(熊本県　正野神社　宮司)

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりをお願い神明奉仕に励んでいます。講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

I 何のために語るか（祈願）

1 神命をかしこんで立つ

2 まず祈れ

3 正しい志を

4 まじめな生活を

5 話は生きている

II 何を語るか（内容）

その一 体験を語る

1 体験を語る

2 体験を反省する

3 二つの「門」

① 自然のいのちのなかに神様を見る

② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二 講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな

2 位に中す

3 講録をつくる

① 話の材料を集める

② 話の材料を選ぶ

③ 話をまとめる

④ 特に切り捨てについて

Ⅲ

いかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る

① 話はわかりやすく

② 自分の言葉で語る

③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を

④ 話には「うねり」を

2 至誠をもつて語る

① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもって語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十六回神道講演全国研修大会・山口大会の記録

於 松陰神社

神社本庁総合研究所所長 矢田部正巳

顧問 阿部 信 (神社本庁長老)

々 永江 則英 (鳥取県神社庁庁長)

々 青木 義興 (島根県神社庁庁長)

々 笹井 和男 (岡山県神社庁庁長)

々 追林 昌弘 (広島県神社庁庁長)

々 野村 清風 (山口県神社庁庁長)

々 真弓 常忠 (住吉大社宮司)

々 大野 俊康 (元靖國神社宮司)

々 矢野 憲一 (元神宮欄宜)

大会会長

上田 俊成

(松陰神社宮司)

実行委員長

村田 和之

(長束神社宮司)

実行副委員長

佐古 一洊

(松尾大社宮司)

実行委員

芦原 高穂

(旭川神社宮司)

々

生畠 經和

(松尾大社権宮司)

々

小串 和夫

(熱田神宮宮司)

々

落合 偉洲

(久能山東照宮宮司)

々

河本 文夫

(宮尾八幡宮宮司)

々

木下 鏌二

(大江八幡宮宮司)

々

藺田 稔

(秩父神社宮司)

々

谷田 勉

(櫻山八幡宮宮司)

々

長曾我部延昭

(伊豫豆比古命神社宮司)

々

戸内 康雅

(心清水八幡神社宮司)

実行委員

々	中木屋 豊	(稻荷神社宮司)
々	中野 幸彦	(多賀大社宮司)
々	二槁 一彦	(砥鹿神社宮司)
々	波多野 學	(高見神社宮司)
々	塙 東男	(笠間稻荷神社宮司)
々	原 茂子	(夜疑神社權禰宜)
々	宮川 脩	(福井県護国神社宮司)
々	山下 裕嗣	(白山神社禰宜)
々	山田 一孝	(靜内神社宮司)
々	山村 稔晴	(高知大神宮宮司)
々	山本 行恭	(椿大神社宮司)
々	渡邊 知宣	(疋野神社宮司)

— 実行委員五十音順 —

事務局長

事務局員

畠田 明彦

(松尾大社権禰宜)

村田 和弘

(長束神社禰宜)

村瀬 佳子

(長束神社権禰宜)

々

石井 昌孝

(諏訪神社禰宜)

々

鈴木 明子

(立木神社権禰宜)

々

二ノ宮雅子

(嘯吹八幡神社出仕)

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

顧	問	阿部 信	神社本庁長老	幹	事	中野 幸彦	多賀大社宮司
顧	問	真弓 常忠	住吉大社宮司	幹	事	二橋 一彦	砥鹿神社宮司
顧	問	大野 俊康	元靖國神社宮司	幹	事	波多野 學	高見神社宮司
顧	問	矢野 憲一	元神宮欄宜	幹	事	塙 東男	笠間稻荷神社宮司
會	長	村田 和之	長束神社宮司	幹	事	原 茂子	夜疑神社權欄宜
副	會	長 佐古 一洌	松尾大社宮司	幹	事	宮川 脩	福井県護国神社宮司
幹	事	長 木下 鏊二	大江八幡宮宮司	幹	事	山田 一孝	靜内神社宮司
幹	事	生 生 經和	松尾大社權宮司	幹	事	山村 稔晴	高知大神宮宮司
幹	事	小 串 和夫	熱田神宮宮司	幹	事	山本 行恭	椿大神社宮司
幹	事	落 合 偉洲	久能山東照宮宮司	幹	事	監 査 芦原 高穂	旭川神社宮司
幹	事	蘭 田 稔	秩父神社宮司	幹	事	監 査 渡邊 知宣	正野神社宮司
幹	事	谷 田 勉	櫻山八幡宮宮司	幹	事	監 査 事務局長 畠田 明彦	松尾大社權欄宜
幹	事	長 曾我部 延昭	伊豫豆比古命神社宮司				
幹	事	戸 内 康雅	心清水八幡神社宮司				

平成二十二年六月現在

神道講演全国大会のあゆみ

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一回 東京大会	昭和四六年八月四～六日	神社本庁		石沢 久英	久保田 博人	
第二回 広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第三回 伊勢大会	昭和五四年八月二七～二九日	神宮会館		冢瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第四回 九州大会	昭和五八年六月七～一〇日	太宰府天満宮		西高辻 信貞	宇都宮 正元	神国の春
第五回 みちのく大会	平成元年八月二一～二三日	高山稻荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第六回 伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第七回 東京大会	平成三年八月二七～二九日	全国神社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島清三郎	食国の祈り
第八回 宮崎大会	平成四年八月二四～二六日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第九回 愛媛大会	平成五年七月一九～二一日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第一〇回 東京大会	平成六年七月二一～二三日	靖国神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第一一回 北海道大会	平成七年八月三～五日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷 由起子	大禊
第一二回 広島大会	平成八年七月一六～一八日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	
第一三回 伊勢大会	平成九年七月一七～一九日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山

大会		開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一四回	京都大会	平成一〇年八月二七～二九日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一冽	嶋田 達久	追憶
第一五回	東京大会	平成一一年九月九～一日	全国神社社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第一六回	愛媛大会	平成一二年八月二三～二五日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第一七回	石川大会	平成一三年九月四～六日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第一八回	鹿児島大会	平成一四年八月二一～二三日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第一九回	愛知大会	平成一五年六月二五～二七日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第二十回	島根大会	平成一六年七月二三～一五日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第二一回	宮城大会	平成一七年八月二三～二五日	志波彦神社鹽竈神社	宇仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第二二回	北海道大会	平成一八年六月二三～二三日	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朔北のいぶき
第二三回	奈良大会	平成一九年六月一八～二〇日	石上神宮	森 正光	村田 和之	生寫 經和	布留の鼓動
第二四回	伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日	神宮会館	高城 治延	村田 和之	畠田 明彦	神風のむすび
第二五回	茨城大会	平成二二年六月二四～二六日	茨城県神社庁	塙 東男	村田 和之	畠田 明彦	常陸の祈り
第二六回	山口大会	平成二三年六月二二～二四日	松陰神社	上田 俊成	村田 和之	畠田 明彦	至誠のかがみ
第二七回	沖縄大会	平成二三年六月二二～一四日	波上宮	末安 大孝	村田 和之	畠田 明彦	

あとがき

松陰先生、ご生誕百八十年、殉節百五十年、留魂の尊皇精神に燃えて明治維新の志士を生んだ松下村塾、石井先生・佐古先生の出会いの地、萩で必ず石井・佐古両先生の慰霊祭をとの念願で二年前より、松陰神社、上田俊成宮司様と話を進めていました。同士諸兄の同意を得て会場も決定、今年も、また全国各地より十分間の研究発表のため約四十名の参加者がはせ参じてくれました。

六月二十二日から二十四日迄開催された第二十六回神道講演全国研修大会は、大会会長に松陰神社、上田俊成宮司、本庁よりは木田孝朋教化部長、山口県神社庁、野村清風庁長、金長広典副庁長、と花も添えて戴き、慰霊祭、次で開講式と進み記念講演では、ご多用の中同志のためにと上田宮司の記念講演「松陰先生の死生観」と題して拝聴、松陰先生が教え伝えた高い志と至誠の心の説明。受講生の発表の合い間には、石井・佐古両先生の生前の講演テープを聞き、当時の様子を説明解説しました。

「み教えを伝へて成さむ日本再成」をテーマとした大会、昔両先生にご指導を得られた先

輩の二世の参加者も見られ留魂を説かれた両先生の思いが生き伝えられている姿を見ることができました。

新設された至誠館も開放、説明いただき上田宮司様を始め白上祢宜、事務局の方々にも連日遅く迄お手伝いご協力を賜わり感謝にたえません。誠にありがたく紙上ながら厚く厚く御礼申し上げます。

昨年より同志の中より数名の方に月々の社頭講話の例文を神社新報の紙上に掲載しています。各位には日夜油断なきよう研鑽に励んで下さい。

この度この聖地において心を洗い「留魂」と「至誠」に徹し神去られた先人達の「志」を思い起し、荒廃した世相に進む危機存亡の時、日本再成に向けて各地の先達として奮闘活躍されんことを祈ります。

何時もながら縁の下の力持ち、事務局のご協力に感謝申し上げます。

平成二十二年 秋

第二十六回神道講演全国研修大会

山口大会実行委員長

村田和之

講話集 至誠のかがみ

—第二十六回 神道講演全国研修大会 山口大会—

発行 平成23年5月1日

編集者
装幀者
— 神道講演全国協議会事務局

印刷所 呉市広白石一—二—三四
製本所 株式会社 ユニックス

発行所 — 神道講演全国協議会

〒六六〇〇四 京都市西京区嵐山宮町三 松尾大社社務所内

TEL (〇七五) 八七一—五〇一六 FAX (〇七五) 八七一—三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

 2011.6



